



Title	マイナス待遇表現の言語行動論的研究
Author(s)	西尾, 純二
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2458
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マイナス待遇表現の言語行動論的研究

西 尾 純 二

2003 年 5 月 22 日（木）提出

本冊子は、2003 年 10 月 29 日に大阪大学にて受理された博士論文を、再度冊子化したものである。冊子化にあたり、要旨および誤字・書式などに関して修正を施し、付録―調査票―を加えている。

西尾純二

2003 年 12 月 20 日

要旨

本論文では、マイナス待遇表現行動を分析するために、言語行動論的な観点から概念を整備・追加した。また、マイナス待遇表現の行動モデルを仮設し、分析の枠組みを示したうえで、研究課題を整理した。これにもとづき、計量的な観点から調査を実施し、その分析からマイナス待遇表現行動についての知見を導き出した。

本研究は、マイナス待遇表現行動という未開拓の研究対象、言語行動のプロセスを重視した研究の序説として位置づけられる。マイナス待遇表現行動とは、表現の対象となる事物を低く・悪く待遇する言語行動である。また、本研究でいう言語行動論的立場とは、ことばの送り手が表現形式を産出するまでのプロセスに着目する立場である。この立場から従来の狭義・広義の待遇表現と待遇の方向性について再検討を行い、待遇表現形式と待遇表現行動とを区別した。待遇表現形式は形式の待遇的意味の違いによる対立から位置づけられる。一方、待遇表現行動はことばの送り手の事態への評価、評価表明の態度の形成、表現形式の選択といったプロセスのあり方から規定されるものである。

事態への評価とその表出の様式に注目すると、待遇表現行動は事態のなかに送り手が対人関係を認識し、それを表示する「関係性待遇」と、評価にもとづく感情を対象にむかって表示する「感情性待遇」とに分けられる。関係性待遇は、典型的には「～レル・～ラレル」「～モウシアゲル」「デス・マス」といった狭義の敬語形式の使用であり、感情性待遇の典型は「～ヤガル・～クサル」「アホ・ボケ」などの卑語形式の使用である。マイナス待遇表現形式には、一見、関係性待遇のなかで使われる専用言語要素が存在しないかのようと思われる。しかし、「～シテヤル」のような形式は、「～シテサシアゲル、～シテアゲル」との対立からマイナスと位置づけられる関係性待遇の待遇表現形式である。このように、マイナス待遇表現形式には、送り手と対象との下向きの関係性を表示する関係卑語と、「～ヤガル・～クサル」などの対象に感情性を表示する感情卑語とが存在する。

この点を踏まえ、本研究では、第3章でマイナス待遇表現行動の表現算出プロセスをモデル化し、マイナス待遇表現の研究の観点や課題を把握し、分析の観点を定めた。そして、第4章から第7章では、いくつかの言語調査からマイナス待遇表現のデータを量的に収集し、具体的な分析からマイナス待遇表現行動の諸相についてその一端を明らかにした。

第4章では、関西方言の卑語形式ヨルの表現性について、関係性待遇・感情性待遇といった視点から調査・分析を行った。そして、卑語形式ヨルが事態把握のあり方によって、関係卑語と感情卑語の両方の役割を果たしうることを明らかにした。従来の研究では、関係上目下であることを表示する機能と、感情表現としてマイナスであることとは、ヨルという一つの言語形式に二者択一であるか、どちらかの性質が優勢であるという解釈がなされてきた。これに対して本章では、関係性待遇と感情性待遇の両方の言語行動のなかでヨ

ルがマイナスの方向性を示しうることを述べた。また、ヨルは「驚き」という中立的な感情を表示することも可能である。その理由はヨルのスタイルの低さにあり、このためにヨルは、マイナスの待遇性を持ちながらも、待遇の方向性に拘束されない情意的な表現行動の中で用いられると解釈された。

第 5 章は、様々な卑語形式（命令形「ミロ、ミンカ」や「アホ、ボケ」などのいわゆる卑罵語など）の運用についての属性差を考察した。本章の目的は、アンケートによるデータ収集とその分析により、可能な限りマイナス待遇表現行動についての知見を数多く得ることであった。得られたおもな知見は次のようにまとめられる。

- 卑語運用は、世代よりも性の違いによって強く規制される。
- ただし、卑語のなかでも卑罵語の運用は、性よりも世代の違いによって強く規制される。
- 事態を強くマイナスに扱うほど卑語形式の使用率は上昇するが、どの程度のマイナス扱いで卑語形式を用いるかは話し手の属性によって異なる。
- 若年層は特定の事態に対するマイナス評価の下し方が一定しないのに対して、実年層は若年層よりは一定している。
- 実年層になると、親しい目上・目下へのマイナス待遇表現行動が強く規制されるようになる。

個々の卑語形式は、話し手の属性（ここでは世代と性）によって、異なる表現産出のプロセスを経て用いられる。つまり、卑語形式運用の規範意識が属性によって異なることが明らかになったのである。待遇表現形式は、ほかの形式との対立からのその待遇的意味が位置づけられる。しかし、この分析では、同じ卑語形式でもマイナス評価を表出するプロセスが話し手の属性によって異なることを示した。これは、言語行動から待遇表現形式の意味を規定する試みであるとも言える。待遇という行動は、そもそも個々人が事態への顧慮と扱いによって規定されるものであり、待遇的意味についてもこれに連動すると考えるべきものであろう。

さらに、卑語形式の使用に対する規制の属性差を調査結果から分析し、属性によってマイナス待遇表現行動の表現スタイルが存在するという仮説を立てた。

第 6 章と第 7 章では、分析の対象を発話にまで拡大した。これによって、第 6 章では、敬語形式を用いつつマイナスの評価を表明する慇懃無礼といったマイナス待遇表現行動についても言及した。さらに、卑語形式や表現内容だけでなく、表現のくどさや唐突さによって、マイナスの評価が表明されることを明らかにした。また、マイナス待遇表現行動を、相手を遠ざける敬遠型と、対象に過剰に関与して対象が言われたくないことを言う過剰関与型に分類した。

これら 2 種のマイナス待遇表現行動を行うために、どういった表現要素をマイナス評価の表明に用いるかは、話し手の属性によって異なっている。そして、第 5 章で指摘した属性によるマイナス待遇表現行動のスタイルの存在とその典型を抽出した。例えば、実年層

の女性は、動詞の命令形や卑罵語の運用に非常に強い規制がかかるため、マイナス評価表明の表現欲求を発話のくどさやマイナスの表現内容を表現することによって満たす。このようにマイナス待遇表現行動には、マイナス評価表明をある言語要素で表現することが許されないとき、別の規制が弱い言語要素で表明するという、補償的スタイルが話し手の属性によって存在することが明らかになった。

第7章では、こういったマイナス待遇表現行動のスタイルに、地域的なバリエーションが存在するかについて、大学生へのアンケート調査から検証した。本章は、表現産出のプロセスに注目した言語行動の地域的なバリエーションを抽出するための初めての試みでもある。

分析対象としては、発話内での卑語形式や「ジャマ・メーク」といった評価的語彙の選択などをとりあげ、それらの形式を選択する際の、評価表明の態度には地域差があることが明らかになった。しかし、ある特定の事態に、どの程度のマイナス評価を下し、その評価をどの程度表明するかという表現態度の形成には地域差が見られなかった。つまり、表現態度と待遇表現形式との結びつきには地域差が存在するが、ある特定の事態に接したときの表現態度の形成には地域差が認められなかったのである。表現態度の形成は、むしろ、クラブ・サークルの違いという社会集団の性質の違いによって認められた。

これらのケーススタディから、第8章ではマイナス待遇表現行動について、今後の研究課題を示した。第4章の卑語形式ヨルの表現性を解明するにあたっては、通時的な観点が不可欠であり、そういった研究分野のとの連携が必要であることを述べた。また、待遇表現行動に限らず、日本語行動のバラエティを実証的に把握する研究を積み重ね、データを蓄積し、方法論を洗練する必要性を述べた。これによって、日本語行動の多様性が把握され、その多様性が持つ意味が何であるのかといった点についての議論が可能になるだろう。さらに、マイナス待遇表現行動への規制が属性によって異なることによる、言語問題の存在について触れ、本研究の応用社会言語学的な展開を展望した。

目次

第1章 研究の対象と目的

1. はじめに	1
2. 本研究の構成	2
3. 諸概念の整理	3
3. 1. 待遇表現の範囲と用語について	3
3. 1. 1. 狭義・広義の待遇表現	
3. 1. 2. 待遇表現と待遇行動	
3. 1. 3. マイナス待遇表現の位置づけ	
3. 2. 表現形式と表現行動について	6
3. 2. 1. 待遇表現形式	
3. 2. 2. 待遇表現行動	
3. 3. マイナス待遇表現の方向性	11
3. 3. 1. 待遇表現形式の待遇的意味の方向性	
3. 3. 2. 言語形式運用の効果による評価	
4. まとめ	15
参考文献	16

第2章 マイナス待遇表現の研究の展開

1. 「待遇表現」の定義の変遷と分析対象の拡大	17
2. 待遇表現研究のアプローチの多様化	19
2. 1. マイナス待遇表現にかかわる研究	20
2. 1. 1. 悪態・悪口の分類	
2. 1. 2. 言語行動論的アプローチ	
2. 2. マイナス待遇表現研究の現状	22
3. 待遇表現のモデルについての研究	22
3. 1. 南不二男氏のモデル	23
3. 2. 杉戸清樹氏のモデル	24
3. 3. 菊地康人氏のモデル	25
4. 待遇表現形式の意味と社会的ダイクシス	25
4. 1. 彭国躍氏の待遇行動観	25
4. 2. 敬語のダイクシス的性格と失礼現象	26

4. 3. 卑語は社会的ダイクシスカ — 関係性待遇と感情性待遇 —	28
5. 待遇表現の社会言語学的研究	30
5. 1. 社会制度と待遇表現（行動）の体系	30
5. 2. 待遇表現行動の原理とポライトネス	31
5. 3. 広義の待遇表現の分析	32
6. まとめと展望	33
参考文献	34

第3章 マイナス待遇表現行動のモデルと社会言語学的研究課題

1. はじめに	37
2. マイナス待遇表現行動のモデル	37
2. 1. 本研究で仮設するモデル	37
2. 1. 1. 事態評価の段階 — 評価段階 —	
2. 1. 2. 表現態度決定段階1 — 「表明程度」決定段階 —	
2. 1. 3. 表現態度決定段階2 — 「表現姿勢」決定段階 —	
2. 1. 4. 表現選択の段階	
2. 1. 5. 送り手による待遇対象の「扱い」	
2. 2. ある場面で考える待遇表現行動	40
3. 研究課題の整理	41
3. 1. 評価段階	41
3. 2. マイナス評価の表出	42
3. 3. 表現姿勢の選択	42
3. 4. マイナス評価表明の手段	43
3. 5. みせかけのマイナス待遇表現	43
4. まとめ	44
参考文献	46

第4章 関西方言の卑語形式「ヨル」の表現性

1. はじめに	47
2. 先行研究と問題のありか	47
2. 1. 卑語形式ヨルの分布領域	48
2. 2. ヨル形式の待遇性	49
2. 2. 1. 関係性待遇の観点からの研究	
2. 2. 2. 感情性待遇の観点を含めた研究	
2. 2. 2. 1. 用語と概念	

2. 2. 2. 2. 社会的上下軸か話し手の感情・評価か	
2. 2. 2. 3. 好悪に基づくヨルの使用	
3. 検証すべき用法と調査の概要 — 卑語形式ヨルの考察の枠組み —	51
3. 1. 調査項目	52
3. 2. 調査対象	55
4. ヨルの待遇性の分析	55
4. 1. 関係性待遇のヨル	55
4. 2. 感情性待遇の言語行動におけるヨルの使用	58
4. 2. 1. マイナスの感情性待遇で使用するヨル	
4. 2. 2. 待遇対象への好悪と中立的感情性	
4. 2. 2. 1. マイナス評価によるヨルの出現	
4. 2. 2. 2. 「驚き」という中立的感情とヨルの出現	
4. 2. 2. 3. ヨルの文体的性格と感情性	
4. 2. 2. 4. ヨルの使用の男女差	
5. ヨルの複雑な表現性	63
6. おわりに	64
参考文献	66

第5章 卑語形式選択における規範意識の属性差

1. はじめに	67
2. 問題のありか	67
3. 調査の概要	68
4. 分析と解釈	70
4. 1. 卑語形式の出現状況	70
4. 1. 1 言語形式の分類	
4. 1. 2 全体的な傾向	
4. 1. 3. 属性別の出現状況	
4. 2. 卑語形式出現の属性差を生む要因	73
4. 2. 1. マイナス評価・扱いの程度と卑語形式選択の相関関係	
4. 2. 2. 攻撃的口調と卑語形式出現の相関の属性差	
4. 2. 3. 属性ごとの卑語形式運用の違い	
4. 3. マイナス評価表明における表現態度の世代差	76
4. 3. 1 回答パターンから予想される表現態度	
4. 3. 2. 各世代における表現態度	
4. 3. 2. 1. 若年層の表現態度形成段階の特徴	

4. 3. 2. 2. 実年層の表現態度形成段階の特徴	
4. 3. 3. 回答のばらつきから見る待遇表現行動規範の成熟度	
5. むすび	81
参考文献	83

第6章 発話レベルのマイナス待遇表現行動の基礎的分析

1. 分析の留意点と資料収集について	85
1. 1. はじめに	85
1. 2. 発話レベルのマイナス待遇表現行動の分析における問題点	85
1. 3. マイナス待遇表現行動の2つのタイプ	86
1. 3. 1. 敬語による皮肉のメカニズム	
1. 3. 2. 敬遠型と過剰関与型のマイナス待遇表現行動	
1. 4. 調査の概要	88
2. 対人関係によるマイナス待遇表現形式の使い分け	89
2. 1. はじめに	89
2. 2. 表現内容の分類	89
2. 3. 発話の切り出し方・マイナス評価が明示的でない表現の運用	90
2. 3. 1. 過剰な関与となる呼びかけ	
2. 3. 2. 関与の唐突さによるマイナス待遇表現行動	
2. 3. 3. くどい関与によるマイナス待遇表現行動	
2. 4. マイナス評価が明示的な表現の運用	94
2. 4. 1. 表現内容と敬体の使用	
2. 4. 2. マイナス評価が明示的な表現内容の使い分け	
2. 5. おわりに	98
3. マイナス待遇表現行動のスタイル — 運用規制が発話に与える影響 —	99
3. 1. はじめに	99
3. 2. 規制を受ける表現の諸要素	99
3. 3. 分析の対象	100
3. 4. 回答の特徴	101
3. 4. 1. 回答の全体像	
3. 4. 2. 表現態度と発話の特徴	
3. 4. 2. 1. 表現態度×ぞんざいな言語形式	
3. 4. 2. 2. 実年層女性の表現スタイル	
3. 4. 2. 3. マイナス待遇表現行動のスタイル	
3. 5. 表現スタイルの解釈	108

3. 6. むすび	108
参考文献	110

第7章 大学生におけるマイナス待遇表現行動の地域的バリエーション

ヨシ — 待遇表現行動の地域的変異 —

1. はじめに	111
2. 表現行動のバリエーション	111
3. 調査	112
3. 1. 調査対象	112
3. 2. 調査法	113
3. 3. 状況設定と回答項目	114
4. 事態評価から表現態度を形成するまで	115
4. 1. 表現態度形成におけるプロセスの分類	115
4. 2. 表現態度形成の傾向	116
4. 2. 1. 表現態度形成の属性差	
4. 2. 2. 大学生全体での傾向	
5. 表現態度と表現要素の選択	118
5. 1. 分析項目	118
5. 2. 表現態度の程度と表現要素の表れ方における地域性	119
5. 2. 1. 誰についての描写・判断であるか	
5. 2. 2. 命令・禁止, 詰問の表現	
5. 2. 3. ジャマ・メーワク	
5. 2. 4. 地域的な表現行動のバリエーション	
6. まとめ	123
参考文献	124

第8章 まとめと研究の展望

1. 各章のまとめ	125
2. 研究の展望	128
2. 1. マイナス待遇表現とプラス待遇表現との関係	128
2. 2. 通時的研究との連携	128
2. 3. 日本語行動のバラエティの探求	129
2. 4. 応用社会言語学的な展開	129

3. おわりに	130
---------	-----

付録 — 調査票 —

A調査（第5章）	III
B調査（第6章）	IX
C調査（第7章）	XV
D調査（第4章）	XIX

謝辞

第1章

研究の対象と目的

1. はじめに

本研究は、対象を低く・悪く待遇する現代日本語のマイナス待遇表現について、言語行動論的な立場からその表現性の解明を試みるものである。ここでいう言語行動論的な立場とは、表現形式がもつ待遇的な意味の考察だけではなく、表現主体（書き手と話し手を区別しないときは「送り手」と呼ぶ）が表現形式を産出するプロセスに注目する立場である¹。

待遇表現の研究は従来、上向きと下向きの両方の方向性を含む待遇のあり様を研究対象としてきた。待遇の方向性は、場面によることばの「使い分け」から説明される。よって、待遇表現は必然的に、その表現形式自体が「使い分け」という行動的側面をもつ。また、待遇表現形式の使い分けは、送り手を取りまく事態に対する「気のかけかた」が異なることによっても生じる。こういった性格を持つ待遇表現行動の仕組みの解明は、言語行動の特性についての理解にもつながるであろう。

ところで、待遇表現研究の歴史は、1世紀を超えるものとなった。日本語研究における「待遇」という用語は100年以上前から岡田正美によって用いられている（岡田 1900a,b）。しかしながら、待遇表現の一部である「敬語」「敬語行動」を中心とした研究の豊富さに比べて、その逆の方向性をもつ卑罵語や皮肉などの「マイナス敬語」（南 1987, 星野 1989）「マイナス待遇表現」、あるいはそれらの表現形式を用いる「マイナス待遇表現行動」（西尾 1996, 1998a,b ほか）についての理論的・実証的考察は多いとはいえない。

「敬語が待遇表現の中枢を占め、かつ、戦前の国粹主義的な考えから、日本人の敬讓の美德を表すものとして重視された（辻村 1988）」時期もあつてか、マイナス待遇表現に重点をおいた研究は盛んにはならなかった。果たして、プラスの方向性をもつ敬語・敬意表現の研究の枠組みや視点は多様化、深化したが、マイナス待遇表現を中心に据えた研究では、未だ研究の視点は限られ、議論も少ないという状況にある。

プラスとマイナスの両方向の待遇表現が「人や人に関わる事物を待遇する表現」であるという大局の立場に固執し、統一の枠組みで捉えようとするれば、プラスとマイナスの各方向における待遇表現の性格の「相違点」について議論されることは少なくなる。プラス方向の待遇表現を解明する枠組みから、無理にマイナス方向の待遇表現を捉えようとするという弊害も生じうる。本研究では、マイナスの待遇表現を詳細に検討することで、ことば

¹ このような立場は、個々の形式が産出されるプロセスを、談話の流れの中で推定する研究をも含むうるが、本研究では談話を研究対象とするまでには至らない。

によって対象を待遇するという言語行動の全体像をより明確にすることを目指す。

こういった研究姿勢をもって、マイナス待遇表現を考察の中心に据え、待遇表現全体の中でその特性を言語行動論的・社会言語学的な観点から検討する。

2. 本研究の構成

本研究は、8つの章からなる。第1章から第3章までは、本研究の前提となる研究の目的や研究史的な背景、理論的背景について論じる。このうち、第1章（本章）では研究対象を明らかにし、本研究に関連する諸概念について規定を行う。第2章は「マイナス待遇表現研究の展開」と題し、これまでの待遇表現研究の流れを言語行動論的な立場から振り返る。また、その中でマイナス待遇表現研究の現段階での到達点を把握する。第3章は「マイナス待遇表現行動の社会言語学的研究課題」とし、本研究における待遇表現行動の分類とモデル構築を行う。また、本研究で扱うマイナス待遇表現行動の研究課題を明示し、第4章からの実践的な考察において拠って立つ分析の枠組みを提示する。

第4章から第7章は第3章の分類・モデルを背景としたケーススタディである。これらの章では、いくつかの調査から具体的なマイナス待遇表現行動の様相を明らかにする。また、実証的な調査が少ないマイナス待遇表現の研究に、基礎的なデータを提供するとともに、それらのデータから第3章で明示するモデルの妥当性、有効性を検証する。つまり、本研究の重心は第3章にあるということになる。

これらの章では、考察は語彙レベルと発話レベルとで行う。まず、第4章・第5章は語彙選択のレベルでの考察である。第4章では関西方言の卑語形式「ヨル」を考察対象とする（第4章「関西方言の卑語形式「ヨル」の表現性」）。この章では、関西方言の待遇表現形式「ヨル」の選択要因を明らかにする。これによって、「ヨル」の待遇表現としての表現性を言語行動論的な立場から位置づけるとともに、待遇表現行動のタイプについての考察を行う。第5章では、さまざまな卑語形式運用の属性差についての調査結果から、待遇表現行動規範の多様性に関する社会言語学的な考察を行う（第5章「卑語形式の運用における規範意識の属性差」）。

第6章～第7章では、分析対象とする表現事象を発話のレベルまで拡大する。第6章は、「発話レベルのマイナス待遇表現行動の基礎的分析」とし、待遇表現研究における分析の主要観点とされてきた上下・親疎の軸を用いた発話レベルでの分析を試みる。また、表現態度と表現形式との結びつきを分析し、マイナス待遇表現行動に話し手の属性ごとのスタイルが存在することを確認する。そして、そのスタイルが形成される理由をマイナス待遇表現行動にかかる規制との関わりから考察する。第7章は、第6章の基礎的な分析を言語行動の地域差の研究に応用したものである（第7章「マイナス待遇表現行動の地域的バリエーション」）。この章は、事態把握から待遇表現産出までのプロセスに地域差が表れるかどうかを検証するための探索的な研究でもある。このような表現産出のプロセスを問題にした言語行動の地域差について、実証的な研究は、管見ではこれまでにない。本章は、日本語に

よる表現行動の多様性を把握するための試論でもある。

結論では、本研究で行った「概念の分類」「理論的枠組み」、および「各論によって得られた知見」を総合し、考察結果の整理を行なう。また、本研究では考察が及ばなかった点を把握し、今後の研究を展望する。

3. 諸概念の整理

待遇表現研究における用語の定義は、研究者や時代によって様々である。定義が不安定であることは、学術上好ましくないという意見もあるだろう。定義や用語が安定していることは、効率的な研究のために必要なことである。しかし、定義や用語が指し示す、待遇表現を説明するための考え方そのものが、どのように有効であったかということもまた重要である。そこで、次に待遇表現に関わる諸概念を整理したうえで、本研究での用語の定義づけを行う。

3. 1. 待遇表現の範囲と用語について

本研究では待遇表現を「対象への待遇の仕方を表した表現」と定義し、待遇表現行動を「対象を言語記号ないしは非言語記号によって待遇する行動」と定義する。このような定義における「待遇表現」がどのような範囲の分析対象を含むかについて、先行研究を踏まえつつ検討していくことにする。

表1 「敬語」の範囲

南（1987）より

	表現形式			内 容		
	専用言語要素	一般言語表現	非言語表現	いねいなど 尊敬・謙讓・て	軽卑・尊大など	
A	+	—	—	+	—	
B	+	—	—	+	+	
C	+	+	—	+	—	
D	+	+	—	+	+	
E	+	+	+	+	—	
F	+	+	+	+	+	

表1は南（1987）で示された「敬語」の範囲についての分類である。この分類は、非言語表現をも含めた広域な表現事象を扱い、「敬語」や「待遇表現」の範囲²を網羅的に示した点で画期的であった。また、これによって「表現形式」と「内容」という一定の視点で、待遇表現研究が扱う言語事象が整理された。

表1のような広域の表現事象のなかでマイナス待遇表現を位置づけることは不可欠である。マイナスの待遇表現というと、卑罵語・罵りことばなどと呼ばれる言語形式が研究対象として思い浮かぶかもしれない。しかし、それらはマイナス待遇表現の一部に過ぎない。表1のような整理はそのことに気づかせてくれる。

² 表1のうち、「専用言語要素」「一般言語表現」「非言語表現」などの用語は、南（1987 pp.17-30）を参照されたい。

3. 1. 1. 狭義・広義の待遇表現

表1の「内容」欄の「尊敬・謙譲・ていねいなど」を、ここではかりに「上向き」と呼び、「軽卑・尊大など」を「下向き」と呼ぶことにする。表中の+は問題にするところ、－は問題にしないところである。南（1987）によると、Aは専用言語要素のみを対象とし、上向きの内容のみをもつ待遇表現である。これは、最も狭い範囲の敬語であり、「学校文法でいうところの尊敬語、謙譲語、ていねい語、それにいくつかの他の要素をくわえたもの」とされている。これを本論でも「**狭義の敬語**」または単に「**敬語**」とする。

「狭義」と限定されるAに対して、下向きの内容や一般言語表現、非言語表現をも含むうるBからFは「敬語」、あるいは「敬語的表現」と呼ばれている。このうち、Bは表現形式が専用言語要素のみであり、上向き・下向きの両方向を含めたものである。本論ではこれを「**狭義の待遇表現**」と呼ぶことにする。そして、もっとも広域の表現形式を含んだFのみに「**待遇表現**」ないしは「**広義の待遇表現**」という用語を与える。さらに、上向きの内容のみを範囲とするEを「**プラス待遇表現**」と呼ぶ。

3. 1. 2. 待遇表現と待遇行動

また、同書では、Dを「待遇表現」、E、Fをかりに「待遇行動」としている。この分類では、言語記号による待遇表現と、言語記号以外による待遇表現とを区別し、言語表現のほかに表現形式の一要素として非言語表現を含めたものを「待遇行動」としていることになる。例えば、表1によると「顔の表情」や「お辞儀」などは「非言語表現」に分類される。言語表現のほかに、非言語表現である「顔の表情」や「お辞儀」などを含めた表現全体を考察対象とした場合、言語表現も非言語表現も「待遇行動」として扱われるわけである。「微笑」しながら「お辞儀」をして「ありがとう」と言う場合ならば、「微笑」「お辞儀」「ありがとう」を待遇行動の考察対象に含むことになる。

ところで、ことばを形式と意味とが備わった記号としてとらえる立場はよく知られている。一方、表現形式そのものにことばの送り手のプロセスを認める立場は、時枝誠記の言語過程説³（時枝 1941）の立場などに見られる。ことばを考察する観点には、表現産出のプロセスから見る（行動として見る）立場と、形式と意味とを備えた記号としてみる立場とがある。「顔の表情」や「お辞儀」などの非言語表現についても両方の立場からみることができであろう。「顔の表情」や「お辞儀」は、行動の一形態として考えられがちだろうが、それらについても、「形式」をもち、その形式に「意味」が与えられていることから、それらを記号系の一種（すなわち表1でいう表現形式）と見ることができる。逆に、「顔の表情」という形式に対して、何らかの事態認識とその表現態度の形成を経て産出されるというプロセスに着目することもできる。

³ 厳密に言えば、プロセス（概念化の過程）を含む「詞」とプロセスを含まない直接的表現である「辞」とに分かれる（時枝 1941, pp229-310）が、ここでは深くは立ち入らない。

これら、表現形式を「記号系」として見る立場と、「表現産出のプロセス」として見る立場との違いは、表現形式を静的な対象物として捉えるか、動的な「プロセス」として捉えるかという観点の違いである。よって、前者の立場にたつとすれば、E や F に含まれる非言語表現にあたるものは「待遇行動」よりも、静的な意味合いの用語で「待遇行動形式」または「待遇行動様式」とでも呼ぶべきであろう。ただし、これらの用語は一般的ではない。また、一般言語表現と非言語表現の両方を「記号系」として捉える立場から、本研究では一般言語表現と非言語表現とを、用語上は明確に区別しないことにしておく。

3. 1. 3. マイナス待遇表現の位置づけ

ここで、表1が「内容」欄の「尊敬・謙譲・ていねいなど」の上向きの待遇をすべて+にした上での分類となっていることに注目したい。このような整理の仕方になっているのは、表1が掲載されている南氏の著書『敬語』岩波新書が敬語の話題を中心に議論しているためであろうか。それにしても、上向きと下向きを包含する立場でありながら、表1では、下向きの待遇表現が上向きの待遇表現と対照可能な範囲では扱われていない。

待遇表現全体を網羅するためには、表1に存在しない、「内容」の「上向き」が一で「下向き」が+という場合も考える必要がある。この点を補完し、用語を与えたい。そのケースを加えて表をまとめなおすと表2のようになる。上向き・下向きともに-ということは待遇的に中立であることを示すが、そのケースはここでは取り上げない。最左列には本論での用語を記す。

表2 待遇表現の範囲

	表現形式			内 容	
	専用言語要素	一般言語表現	非言語表現	上向き	下向き
敬語	+	-	-	+	-
卑語	+	-	-	-	+
狭義の待遇表現	+	-	-	+	+
プラス待遇表現	+	+	+	+	-
マイナス待遇表現	+	+	+	-	+
広義の待遇表現	+	+	+	+	+

3. 1. 2. に述べたように、本研究では一般言語表現と非言語表現について、用語上の区別をしない。このため、表1の C, D と E, F との区別は表2からは捨象した。そし

て、内容が下向きのものに網掛けを付して加えた。このうち、表現形式が専用言語要素のみであるものを「卑語」とし、そのほかに一般言語表現と非言語表現とを含むものを「マイナス待遇表現」とした。ただし、「卑語」については、さらに「関係卑語」と「感情卑語」の2種類に分類することを、第3章4節で述べる。

表2の「卑語」は南(1987)でかりに「マイナス敬語」と名づけられたものであり、「軽卑表現」「卑罵表現」を含む。その用語は星野(1989)などにも見られる。ただ、「敬語」と対比させた場合、「マイナス敬語」は用語上有標であり、研究対象としてマイナス待遇表現が特別なものであるかのような印象がなかろうか。そこで、「敬語」と対称的な「卑語」という用語を与えることにした。ちなみに、この分類は穂田(1986)に対応している。

「マイナス待遇表現」の用語は彭(2000)でも用いられているが、表2の「マイナス待遇表現」と同様のものを指していると思われる。

以上、専用言語要素のみに表現形式を限るものを「狭義」とし敬語・卑語という用語を与え、一般言語表現や非言語表現にまで表現形式が及ぶものと区別した。さらに上向き、下向きといった方向性を用語によって対立概念として明確に区別し、両者を包含したものを待遇表現とした。そして、これらすべてを包括して「待遇表現」または「広義の待遇表現」とした。

3. 2. 表現形式と表現行動について

待遇表現は、表現自体が対人的な使い分けの結果として表れるものである。先にも述べたように待遇表現は「使い分ける」という意味での行動的な性格をもっている。また、その表現は、人間関係の上下や親疎などの軸で形式の対立を見せる。この対立により、待遇表現は言語形式上の体系性を持つ。つまり待遇表現は「使い分ける」と「体系性をもつ」という2つの性格を同時に持ち合わせている。これにより、これまでの待遇表現の分析は言語行動上の現象を問題にしているのか、言語体系や形式の意味を問題にしているのか曖昧であったように思われる。

本研究では、この点について区別したうえで考察を行う。以下では、本研究における待遇表現形式と待遇表現行動との違いを述べたい。

3. 2. 1. 待遇表現形式

待遇表現は人称性という言語内的要因、人間関係という言語外的要因によって、意味の対立を持ち、表現形式に反映する。これによって体系が構築されるわけであるが、その具体例を以下で検討する。

断定・指定の待遇表現[プラス高] 私でございます。[プラス低] 私です。[中立] 私だ。

[マイナス] 該当表現なし（関西方言では「ジャ」がここに該当する）

「居る」の待遇表現[プラス高] 先生はまだ部屋にいらっしゃるよ。[プラス低] 先輩はまだ部屋におられるよ。[中立] 友達はまだ部屋にいるよ。[マイナス] あいつはまだ部屋にいやがる。

まずは、待遇表現の専用言語要素を例にとる。上のような待遇表現の専用言語要素の諸形式は、「待遇の仕方を表しわけると」という関連で1つのグループである。そして、それぞれの形式は、待遇の方向性と程度の軸に位置づけられる待遇的意味をもつ。断定・指定の助動詞は、現代日本語の共通語では、マイナスの方向性をもつ表現形式は用意されていない。しかし、「ございます」「です」「だ」の3形式は、待遇の方向性と程度により相対的な対立をもっている。

ただし、このような表現形式の対立は、形態的な単位の大さを統一することについては寛容である。「居る」の待遇表現のうち、「いらっしゃる」や「いる」「おる」は同じ動詞語彙という点で同一の単位である。動詞という同一の品詞の中で、異なる語彙が用いられ、待遇的意味の対立を形成している。一方、動詞だけではなく、助動詞「られる」や「やがる」が待遇性を担う場合もある。これら動詞・助動詞を含めた上記の例において、待遇表現の単位上の共通点は、「文末表現」「述語部分」という程度であろう。

待遇表現の体系性は、言語の単位の面では基準が緩やかであり、待遇の方向性や程度による基準を優先させて、それぞれの形式の対立を見出しているという点に注意したい。待遇表現の体系性は、個々の形式の意味的な特徴によって成立するという側面がある。

このような待遇表現の体系性は、言語表現の単位を大きく捉えた場合や非言語表現においても見られる。たとえば、窓を開けてもらうための依頼表現についてはつぎのような例が考えられる。

1. [プラス高] この部屋はちょっと暑くありませんか？
2. [プラス高] 窓を開けていただけるとありがたいのですが。
3. [プラス低] 窓を開けてください。
4. [中立] 窓を開けて。
5. [マイナス] 窓を開けてよ。

窓を開けてもらうための依頼表現は、他にも数多く考えられる。ただ、以上の例を挙げ

ただけでも、例のなかには多くの異質な要素が含まれていることが明らかである。1は、話し手の意図を、聞き手が発話の状況から正確に推論することによって成立する表現である。2も文字通りには相手への依頼を表現するものではなく、自分にとっての好ましい状態を述べることによって、聞き手への依頼を行うものである。1や2のような表現の間接性が、待遇の程度に関与していることは、3と対比させると明確になる。また、3と4、5との間には、敬語形式が用いられているか否かによって、待遇性の違いが生じている。さらに4と5とでは、終助詞「よ」の有無によって待遇の方向性を異にしている。

このような、雑多な要素の違いに目をつぶっても、待遇性という観点からは、専用言語要素と同様に表現の体系性を構築することが可能になるのである。また、1～5のように待遇の方向性と程度によって表現を並べた時点で、それぞれの表現は待遇的な軸に沿って意味づけされた記号として扱われていることになる。例えば1の表現は、1～5のなかに位置づけられた時点で、依頼表現以外の解釈を許されなくなる。相手に返答を求める疑問表現としての解釈は許されない。1～5の一次元的なプラス／マイナスの連続性の中に位置づけた時点で、1の表現は同意要求の発話なのか、疑問の発話なのか、依頼の発話なのかといった解釈は済んでしまっている。その段階で、表現のまとまりが[]内のような待遇的意味を有する記号として処理されるのである。

おじぎなどの非言語表現に関しても、異なる形と意味によって専用言語要素や一般言語表現と同様の待遇的な体系性を見出すことができる。

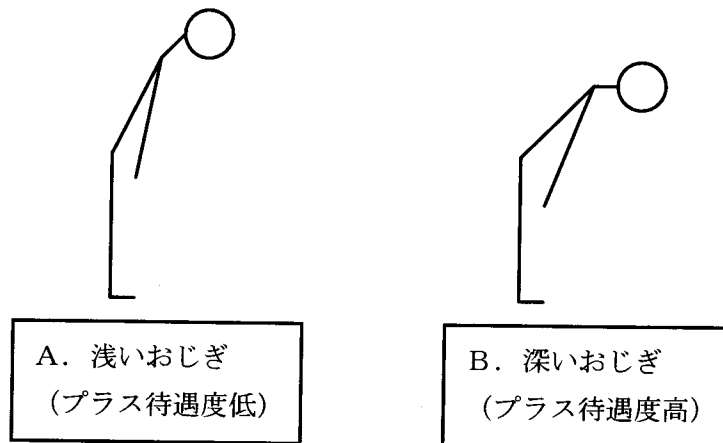


図1 おじぎの角度と待遇的意味

図1はおじぎをするときの体の傾け方を示したものである。AとBとは体の傾け方の程度によって、待遇性の程度の高低を表している。BのほうがAよりも高いプラスの待遇性を表していると通常は解釈できよう。このような対立を持つ限り、両者は待遇表現の小体系を形作っていることになり、それぞれは記号系であると捉えることが可能である。

以上は、待遇の方向性や人間関係といった、言語外的な要因から構築される待遇表現体系についての考察である。

次に、言語内的な要因から構築される待遇表現の体系について述べる。狭義の待遇表現は人称との対応性に着目される場合がある。具体的には次のような事象である。

【尊敬語】動作主は二人称か三人称であり、自尊敬語でない限り一人称ではない。

【謙譲語】動作主は一人称である。

【丁寧語】聞き手(二人称)を志向した形式である。丁寧語は三人称をマークできない。

これらの性質は、待遇の程度や方向性によって規定されるものではない。人称との対応性で規定されるものである。人称と待遇表現形式とが、対応関係をみせることは、待遇表現形式の体系性を表している。このような観点から待遇表現の体系性を論じる場合、扱う言語形式の単位には品詞レベルでの厳密さが要求される。もちろん、狭義の待遇表現には、敬語助動詞や卑語助動詞など活用をもつ形式がありその形態論的性質についても論じる場合も同様である。

以上のように、待遇の方向性や程度や人称の対応性という2つの側面から待遇表現の体系は論じられる(山崎 1963)。このような体系を構築可能にする表現の対立を、文法的・意味的側面からみた場合、各々の待遇表現は記号系としてみることになる。そして、待遇的な要素をもつ記号系としての表現形式について、本論ではこれを**待遇表現形式**または単に**待遇表現**と呼ぶ。

3. 2. 2. 待遇表現行動

待遇表現形式と待遇表現行動とを用語上、区別したのは杉戸(1983)である。杉戸氏は発話された言語表現を個々の形式ではなく、言語を用いた行動のまとまりを「言語行動」した。その行動のまとまりを杉戸(1983)では待遇表現として捉えている。

具体的には、

- (1) 入学試験に失敗した子供のことで「あいつのほうがつらいんだから、今日のところは何もいわなでおいてやれよ」と父親が母親に対して行う、命令・指示といった言語を用いた行動のまとまり。
- (2) その結果、母親が子供に何もいわないでおくというゼロの言語行動

などを待遇表現とみなしている。(1)では「行動のまとまり」が、父親から母親への命令・指示という形で表れ、それは依頼・懇願ではないという対比から、待遇表現とみなされる。

(2)の場合は、母親の「何もいわない」という子供への気配りにもとづくゼロの言語行動が、苦言・叱責という言語を用いた言語行動と対比され、待遇表現とみなされる。これらの対比は、いくつかの言語行動の中から、ある言語行動が実現形として選択されるという見方のもとになされる。その選択には送り手の対人的顧慮や気配り(姿勢)が反映しており、したがって、選択された言語行動はまさしく待遇表現なのである。

杉戸（1983）では、このような待遇表現としての性格を備えたひとままとりの言語行動は「待遇表現行動」と呼ばれた。何らかの待遇的な行動を行うために、言語表現（ないしはゼロの言語表現）を用いることを待遇表現行動としたわけである。

本研究においては、送り手の状況把握の特徴に注目し、さらに何らかの待遇的意図を持った行動を実行するために言語表現を用いる（すなわちことばの送り手による表現産出の動的なプロセスを含む）という観点から、これを「待遇表現行動」と呼ぶ。ここで、今一度、本研究での待遇表現行動と待遇表現形式との違いについて触れておきたい。上記（2）における、何も言わないという「ゼロ」の言語表現を、ほかの表現と対比的に扱い、形式の特徴に注目する場合、これは「待遇表現形式」と捉える。たとえば、「ゼロ」の表現と、わざと入学試験のことから話題をそらし、「今日の晩御飯は何を食べたい？」と言うような場合である。これは、（2）と「子供の失敗への気遣い」という同様のレベルでの気配りを反映している表現であるが、その実現形態が異なっている。

この場合、「ゼロ」と「今日の晩御飯は何を食べたい？」の両者は、「入学試験のことに関して触れないで置く」というひとままとりの言語行動の異なる実現形態であり、それぞれを変異形（すなわち表現形式）と捉えることができる。また、（1）と同じ場面でも（1'）のように違う表現も選択可能である。

（1'） 今日のところは何もいうなよ

（1）と（1'）との間には、「あいつのほうがつらいんだから」という理由を述べるか否かの違いや「いわないでやれよ」「いうなよ」という述語部分の形式上の違いがある。「子供への気配りにもとづいた妻への命令」という「同じ目的を持った言語行動」として捉えた場合、（1）と（1'）とはそれぞれが変異形といえる。そして、理由を述べる表現の有無や述語部分の形式の違いもまた、表現形式上の問題である⁴。

このような捉え方においては、「あいつのほうがつらいんだから」という理由を述べる部分は、発話レベルの待遇表現形式（1）を構成する「内容的な表現要素（以下、表現内容とする）」とみなすことが可能である。また、「いわないでやれよ」と「いうなよ」との違いも、同じ命令というレベルに同一性を求めて捉えるなら、これもやはり表現形式上の議論である。

つまり、分析者が設定する「言語行動の目的」において、その「実現形態」の違いを議論したり表現内の構成要素に着目したりする場合は、言語の単位が大きくてもそれを「待遇表現形式」として扱うわけである。

また、待遇表現を送り手の表現使用のプロセスとの関連で捉える見方がある（杉戸 1983, 南 1987, 菊地 1997）。このプロセスは概ね、1：送り手が事態を顧慮し、2：その顧慮には何らかの送り手による評価的態度が付随し、3：その評価にふさわしい対象の扱い方を

⁴ ただし、これは待遇の「仕方」の違いについて捨象した場合である。

決定し、4：扱い方に応じた表現形式を選択する、という送り手による事態認識から表現に至るまでの「動き」を捉えたものであり、まさに「表現行動」と呼ぶべきものである。このように、待遇表現を使用する際のプロセスに着目して表現形式をとらえる場合、本論ではこれを「待遇表現行動⁵」と呼ぶことにする。上記の(1)や(2)を待遇表現行動と呼ぶのは、送り手の発話に至るまでのプロセスに着目した場合に限るということになる。

以上のように、本研究での表現形式と表現行動との違いは、形式として発話の場に表れたものの違いを指すものではない。繰り返しになるが、両者の違いは、発話の場に表れたものを指すか、発話に至るまでのプロセスを指すかという、観点そのものの違いである。よって、他形式との待遇上の対立を見出したり、体系の構築を目指したりする場合、ある表現は待遇表現形式となる。一方、表現産出のプロセスのあり方を考慮し、そのパターンや多様性に注目すれば、分析対象が専用言語要素の運用であっても待遇表現行動として、本研究では扱うことにする。

3. 3. マイナス待遇表現の方向性

プラス、ないしは中立との対比でマイナスが存在する限り、「マイナス」が待遇表現の何らかの方向性を指し示していることは疑いのないところである。その方向性のありようについて、ここではひとまずの規定を行うことにする。

3. 3. 1. 待遇表現の待遇的意味の方向性

まずは、待遇表現形式に備わる待遇的な意味の方向性について考察を行う。

文化庁(1971)では、待遇表現の構造の中で、本論でいう卑語を軽卑語として図2のように位置づけている。図2では、待遇表現を方向性別に見た場合の、日本語における語彙量の比率を示したものであるが、図中の+、0、-を待遇的なレベルとして捉え、一次元の軸で待遇表現全体を把握しようとしている。この位置づけは、待遇表現の方向性の一般的な捉え方でもあろう。文化庁(1971)では、日常生活において、量的には普通語(0)が最も多く、その次に多いのが敬語(+)であり、軽卑語が最も少ないとされている。また、「敬語(+）・普通語(0)・軽卑語(-)の別は互いに他を特徴づけるためにたいせつである」と述べられており、3種の待遇表現形式が相対的に位置づけられていることが分かる。

ただし、星野(1971)は「悪態は単に語彙だけでなく、文体上(特に文末のことば)の変化を通じて感情の差を示す」と指摘する。悪態はマイナス待遇表現の一様式であるが、こ

⁵ 会話レベルでの待遇表現行動を想定するならば、送り手と受け手(聞き手と読み手を含めて以下、このように呼ぶ)との時間軸に沿った協働の流れや、送り手が発話する前に他の人の発話をどのように参照するかなどが問題となろう。ただし、本論では会話レベルの待遇表現行動には考察が及ばない。

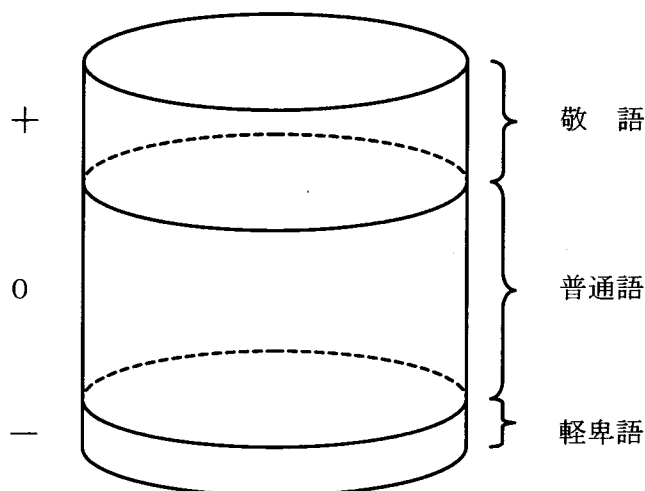


図2 待遇表現の方向性別語彙量 文化庁(1971 p99)より

の指摘から+，0，-という待遇的な「上下」が，いかなる基準によって構成されているのかという疑問が生じる。マイナスが「下向きの感情」を示しうるのに対して，プラスたる「上」は目上という人間関係や，フォーマリティという場の性質を表しうる。同じ上下の軸上にプラスを位置づけながら，待遇表現の方向性は「感情」「対人関係」「場の性質」などの複数の観点で決定されているのである。

それでは，待遇表現の方向性はどのように説明されるのか。

ものごとはしばしば，「上／下」「尊敬／軽蔑」「丁寧／ぞんざい」「善／悪」「賞賛／批判」「好き／嫌い」「美／醜」…などの様々な軸で2項対立的に評価される。あるいは，それらに「中立」というゼロ評価を加えた3項対立の中で価値評価される。それらを表す待遇表現形式は，形式に備わった意味として，評価の方向性をもっている。待遇表現におけるマイナスという方向性は，様々な軸の負の評価，すなわち「上／下」「丁寧／ぞんざい」「善／悪」「好き／嫌い」…なら「下」「ぞんざい」「悪」「嫌い」…などの様々な評価のあり方を抽象化したものである。逆に，「上」「丁寧」「善」「好き」…などはプラスの方向性を抽象化したものである。

さらに，広義の待遇表現では，狭義の待遇表現形式よりも大きい単位の言語表現や非言語表現をもプラスとマイナスの方向性で捉えられる。

「君は絵が上手だなあ」

「彼の功績は偉大だ」

【「好意的な微笑」という待遇行動の様式】

などは狭義の待遇表現形式は用いられていない。しかし，これらはひとまとまりの表現形式としては，プラスの待遇的意味をもっている。一方，

「君はいい加減なことばかりするなあ」
 「彼のことは好きじゃない」
 [「冷ややかな無視」という行動様式]

などはマイナスの待遇的意味をもっている。

以上は待遇表現形式がもつ待遇の意味についての議論である。様々な価値評価が2項対立（あるいは3項対立）化して、待遇の方向性がプラスとマイナス（と中立）に抽象化されることについては、同様のことが待遇表現行動についてもいえる。待遇表現行動の方向性もまた、行動の単位にかかわらず、「上／下」「丁寧／ぞんざい」「善／悪」…といった評価を事態に対して与え、その評価を表出するというプロセスのなかで決定するためである。

これら「上／下」「丁寧／ぞんざい」「好／悪」「善／悪」…の複数の評価軸は、異質なものでありながらプラス／マイナスという判断が可能である。そういった送り手の待遇対象に対する評価を反映した表現はすべて待遇表現と呼ぶことができるであろう。

そして、送り手の待遇対象に対する評価がマイナスに傾き、その評価が表現されるとマイナス待遇表現となる。また、マイナスの評価を表現するプロセスに注目するとそれはマイナス待遇表現行動となる。以上のようなことを、「マイナス待遇表現とは何であるか」を考える上での出発点としての規定とする。

また、待遇的「意味」の評価性と表現形式に与えられるイメージとしての評価性とが連動する場合がある。狭義の待遇表現のうち、「～ナサル」「オ～ニナル」「～モウシアゲル」などの狭義の敬語は、送り手にとって待遇対象が目上であることを表したり、送り手の丁寧な態度を表現したりする。このため敬語は「きれいなことば」と認識される。すなわち、その用法から印象付けられるプラスの評価性を表現形式自体がイメージとして持っている。逆に、「～ヤガル」「オレサマガ～シテヤル」などは待遇対象を見下げる言い方であるし、「ぞんざいで汚いことば」というイメージがあり、マイナスの評価性をもっている。これらは、語形に与えられるイメージの方向性である。

大石（1975）では、敬語には威厳や品位を示すはたらきがあるとされる。そのようなはたらきは上述のような敬語が持っているイメージを、送り手が利用したときに生じうるものである。

3. 3. 2. 言語形式運用の効果による評価

待遇表現の方向性が、待遇表現形式の意味によってではなく、それらの形式を用いる効果によって決まる場合がある。慇懃無礼などはその典型例であるが、そういった事例は、

⁶ 謙譲語は送り手が自らを下げることにより待遇対象を上げる言い方との説明もあるが、本論では、自らのことを述べることを通して、待遇対象を上げる表現と考える。

⁷ こういった表現は尊大表現や傲語と呼ばれる。

待遇表現形式がもっている「待遇的意味」と、それを利用することによって生じる「効果」とを区別する必要性を示している。また、「意味」と「効果」の区別の必要性は、待遇表現形式と待遇表現行動とを区別する理由のひとつでもある。

(3) 申し訳ございませんが、お手元の書類に目を通していただけないでしょうか。

この表現は、「申し訳ございませんが」という前置きや「お手元」「いただく」「でしょうか」などの敬語を用いており、文字通りに解釈すると上向きの待遇である。しかしながら、聞き手が手元の書類に明記されていることを見落として誤解の上に何らかの発言をしたことに対し、(3)のような発話が皮肉として批判的になされる場合も考えられる。

そのような皮肉であると判断される場合、話し手の待遇対象を低める意図と、表現形式がもつプラスイメージとのギャップから、聞き手に対する非難を強く印象付けるという修辞的な効果が生まれる。表現形式の意味ではなく、表現運用の効果がマイナスの待遇性を発話にもたらしめているのである。

また(3)は、送り手が事態をマイナスに把握し、皮肉という表現姿勢をとり、そして敬語という表現形式を選択するという表現産出プロセスを経ていると解釈したときに、プラス待遇表現形式を利用したマイナス待遇表現行動と判断できる。(3)がプラス待遇であるか、マイナス待遇であるかは、このような表現のプロセスを考慮することで判断可能となるのである⁸。

このように、表現形式に備わっている待遇的「意味」と、その意味を利用することによって生じる「効果」とを区別しないと、皮肉や慇懃無礼で用いられる敬語がマイナス待遇表現になることは説明できない。それと同時に、ある慇懃無礼がマイナス待遇表現行動であることを説明するためには、待遇表現形式と待遇表現行動としてのプロセスの両面に着目することが不可欠なのである。

狭義の待遇表現形式が表す送り手の評価的態度を、そのまま「待遇的意味」と見なすべきではないという見解がある(彭 2000b)。しかし、(3)が文字通りの意味では丁寧な発話となり、異なるコンテキストを与えると皮肉になるという現象は、待遇表現形式には社会的に共有された何らかの「待遇的意味」が存在することを証明している⁹。社会的に共有された待遇的意味を利用してこそ、修辞的な表現が可能になるのである。そして、その待遇的意味は送り手の評価的態度を表しているということは可能であろう。

一方で、待遇表現形式の意味は、常に表現行動における送り手の評価的態度を反映するわけではないことも慇懃無礼の事例は教えてくれる。むしろ一回一回の待遇表現行動のプ

⁸実際の発話では音調や身振り、表情などによって、聞き手は(3)が皮肉であると気づくだろう。しかし、この発話でプラスイメージをもつ表現形式が用いられていることが、皮肉としてのマイナスの評価性をより強く表現していることには疑いないところである。

⁹ Levinson(1983 安井, 奥田訳 1990)にもこの点について指摘があるが、その詳細については触れられていない。

ラス・マイナスは、形式の待遇的意味ではなく、送り手の待遇意図によって決定されることを慇懃無礼の事例は証明している。

また、このことから、表1、表2に示したような待遇表現の「内容」は「待遇表現形式が備えている待遇的意味」に対応するものであり、発話意図を文字通りにしか考慮しないものであることが分かる。つまり、表1、表2の各表現形式と内容との対応関係は、送り手個人の意図としての（つまり待遇表現行動の）待遇性ではなく、言語社会が待遇表現形式に与えた待遇的意味を問題にしているのである。換言すれば表1や表2は、形式と意味との対応からまとめられたものであり、表現を記号系として捉える「待遇表現形式の整理表」と考えられる。

4. まとめ

以上、待遇表現と関連する用語が指し示す概念について、その分類を含めた全体像を示し、整理を行った。用語の整理にあたっては、南（1987）で整理された待遇表現の範囲に加え、マイナス方向のみの内容をもつ表現にも焦点を当てた。次に、待遇表現形式と待遇表現行動との違いについて、本論における分析で観点が混同しないよう区別を行った。

また、本研究が中心的な考察対象とするマイナス待遇表現について、「マイナス」という方向性がいかなるものであるかについて議論を展開した。その中では、1. 待遇表現形式の意味、2. 待遇表現形式自体に付随するイメージ、そして、慇懃無礼の例をあげ、3. 待遇表現形式の運用（＝表現行動）によって生じる効果という3つのレベルで、プラス・マイナスの評価性を区別した。

本章で行った以上の点への観点や区別、規定は、以後、一貫して本研究がとる立場である。

参考文献

- 穂田定樹 (1976) 『中古中世の敬語の研究』 清文堂
- 岡田正美 (1900a) 「待遇法」 『言語学雑誌』 言語学会 富山房
- 岡田正美 (1900b) 「待遇法 (続)」 『言語学雑誌』 言語学会 富山房
- 菊地康人 (1997) 『敬語』 講談社学術文庫
- 杉戸清樹 (1983) 「＜待遇表現＞気配りの言語行動」 『講座 日本語の表現 3 話しことばの表現』 水谷修編 筑摩書房
- 辻村敏樹 (1988) 「敬語と待遇表現」 『日本語百科事典』 p610 大修館書店
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』 岩波書店
- 西尾純二 (1996) 「マイナス待遇表現行動における規範意識の属性差」 『地域言語』 9 天理・地域言語研究会
- 西尾純二 (1998a) 「マイナス待遇表現行動分析の試みー非礼場面における言語行動規範についてー」 『日本学報』 17 大阪大学文学部日本学研究室
- 西尾純二 (1998b) 「マイナス待遇行動の表現スタイルー規制される言語行動をめぐってー」 『社会言語科学』 1-1 社会言語科学会
- 南不二男 (1987) 『敬語』 岩波書店
- 文化庁 (1971) 『日本語教育指導参考書 2 待遇表現』 大蔵省印刷局
- 彭 国躍 (2000b) 「松下文法「待遇」の本質とその論理的可能性ー「価値の意味論」の枠組みー」 『世界の日本語教育』 10
- 星野 命 (1971) 「あくたいもくたい考」 『季刊人類学』 2-3
- 星野 命 (1989) 「マイナス敬語としての軽卑語・卑罵語・悪口」 『日本語教育』 69 日本語教育学会
- 山崎久之 (1963) 『国語待遇表現体系の研究ー近世編ー』 武蔵野書院

第2章

マイナス待遇表現の研究の展開

1. 「待遇表現」の定義の変遷と分析対象の拡大

マイナス待遇表現の研究は、待遇表現研究の中に位置づけられるものである。その待遇表現は、これまでにどのような性質をもつ対象として研究者に捉えられてきたのか。研究者たちが待遇表現に与えてきた定義をみることによって、研究の展開を垣間見たい。

管見では、待遇表現の定義をもっとも早く提示したのは、松下（1901）である。その一年前には、岡田（1900）において「待遇」の用語が用いられている。岡田氏は、敬語法・謙語法・平語法・傲語法・卑語法の5種をあげ「比等五種を一括致しまして茲に假に待遇法と名稱を附けました」と述べているが、その「一括」の根拠が明記されておらず、定義がなされたとはいえない。一方、松下（1901）は「ある事物に対する講話者の、尊卑の念を表はすもの」として「待遇」をあげ、「尊遇」「卑遇」「不定遇」が含まれるとしている。その後、時枝（1941）においても

国語の敬語は（中略）上下尊卑の識別に基づく事物の特殊なるありかたの表現であり、もつと厳密にいへば、かゝる識別そのものの表現である。故に敬語に於いては、先づ事物を把握する特殊なる態度が必要とされるのである。

と述べられている。定義を見るかぎり、「国語の敬語は…」と述べながらも「上下尊卑の識別に基づく事物の特殊なるありかたの表現」と記されており、プラス待遇表現だけでなく、マイナス待遇表現も考慮されている。実質的に本研究でいう敬語のみではなく、待遇表現の範疇で敬語を捉えていることになる。また、「敬語に於いては、先づ事物を把握する特殊なる態度が必要」とあるように、時枝氏は言語過程説を提唱していることもあり、敬語そのものには、「まず態度」そして「表現」というプロセスが含まれているとの見方をしている。

単に「待遇」ではなく、「待遇表現」という用語については、辻村（1958）で次のように定義がなされている。

待遇表現とは話し手・聞き手・素材の間（素材間を含む）尊卑・優劣・利害・親疎の関係に応じて変化する言語形式

辻村は、待遇表現が使い分けられる要因を、尊卑・優劣…などと例示する形で定義しているが、それらを「関係に応じて変化する言語形式」と記している点、「言語形式の変化」、すなわち文法的な振る舞いが強調されている。こういった視点は、人称と敬語形式との呼

応関係や、対者や素材などの待遇法の別、さらには山田孝雄の提唱した絶対敬称・関係敬称という概念の洗練など、敬語の分類に関する文法的側面の研究を大きく発展させたものと思われる。

これに対して山崎（1963）の定義は次のようである。

話手が、ある特定の人について（対して、又は関して）表現する時、その人に関する諸種の条件を考慮して、その人にふさわしい言語上の待遇を与える。この配慮はその人に関する事物にも及ぶ。このような表現を「待遇表現」と呼ぶ。

待遇表現は、「条件を考慮」し、「言語上の待遇を与える」表現であるという。これは、上記の時枝（1941）の定義と同様、話し手が事物や人に対して持つ認識、そしてその認識に基づいて表現上の扱い方を決定するという「動的なプロセス」に重点が置かれた定義である。しかし、山崎氏の研究は、このプロセスを強調したものとはならなかった。氏の研究は、そのプロセスの存在を前提として、待遇表現の時代や話し手の属性ごとの使用形式やその推移、人称詞と待遇表現助動詞との呼応関係や形式の待遇価値の段階性といったことが研究対象となり、待遇表現形式の記号的側面を追究した研究であった。このことは、山崎（1963）の書名『国語待遇表現体系の研究』の「体系」の語にもよく表れている。

待遇表現を言語行動として捉える視点は、国立国語研究所（1957）に明確な研究の立場として表れる。国立国語研究所（1957）では、

話し手と聞き手（第三者の加わることもある）との間の社会的・心理的關係の違いに応じて変わる言語行動

を「敬語行動」とし、敬語行動・敬語形式・敬語意識を総合したものを「敬語」と呼んだ¹。「敬語」は、敬語形式とそれを支える、またはとり巻く行動や意識を含んだものとして捉えられたのである。ただ、意識や表現、行動を動的なプロセスのなかにどのように配置するかという議論はなされていない。さらに、同書では敬語行動について次のようにも述べられている。

敬語行動は言語行動とイコールと言ってよく、ただ、言語行動をある特定の観点からながめる点が普通言う言語行動と異なる

こういった性質を持ち合わせた表現について、国立国語研究所（1957）では「敬語」より「待遇」という用語が「適切」としながらも、「待遇」が一般的でないという判断から、「敬語」という用語を用いている。この時期は「敬語」から「待遇表現」への用語転換の過渡期であったわけである。「待遇」という用語・概念は 100 年以上前から存在しながら、

¹ 先述のようにこの時点では「敬語」にはプラスとマイナスの両方向の待遇を含んでいる。また、この定義は表現産出というプロセスより、敬語行動の範囲として行動・形式・意識を取り込んでいる点が特徴的である。

その定着に非常に時間がかかった。そして、プラスとマイナスの両方向を含む待遇表現研究が認知されつつも、その重心はプラス側に長く偏っていたのである。

このように待遇表現の定義は時を経て多様さを増した。定義の多様化にともない、研究対象もまた拡大しつつある。そして、様々な課題を待遇表現研究に示唆しているように思われる。分析対象とする言語の単位は狭義の待遇表現のレベルを超え、文や発話、さらには非言語表現にまで拡大した。また、言語使用時の意識や心理までもが研究対象となった。

このような状況は、待遇表現研究におけるアプローチの多様化にもつながっている。

2. 待遇表現研究のアプローチの多様化

待遇表現の定義は固定的でなく、緩やかなものであった。その緩やかさは分析対象を多様化させた。文法的な生産性をもつ敬語・卑語助動詞、接辞、敬語・卑語語彙などの専用語言要素だけでなく、パラ言語や身振りなどの非言語要素、ひとまとまりの言語行動をも考察の対象とするに至っている。最近では、発話や非言語行動、依頼や謝罪など、その目的によって単位づけられるひとまとまりの言語行動までもが、考察対象として研究の視野におさめられるようになった。談話研究の中でも「待遇表現」の用語が現れてきている。

また、送り手の待遇的な事態把握と待遇表現形式との関係はある程度関数的でありながら、その関数性は単純なものではないため、意味論、修辞論的な議論もなされている。さらに、送り手の事態把握から待遇表現形式の運用の間をうめる表現産出プロセスのモデル化もなされた。もはや待遇表現の研究は、狭義の待遇表現などの限られた言語事象の説明に終始しない。「待遇という視点」からあらゆる言語表現（さらには非言語表現）をいかに説明するかという段階に入っている。

多様化したのは分析対象だけではない。待遇表現研究は外的言語学にも進出している。待遇表現行動は、文や会話の効率的な成立に寄与することよりも、いかに送り手の評価的態度を表すかという点に主眼が置かれる言語行動としての側面がある。その評価的態度のあり方は話し手が所属する社会・集団の性格によって異なる。この待遇表現行動の性格は、言語と社会とのかかわりを追究する社会言語学と相性がよかった。また、地域による社会性の違いを言語形式に反映させる待遇表現は、地域言語研究にとっても格好の研究材料となった。

このように、待遇表現（行動）の研究は、分析対象・目的・アプローチともに多様である。以下では、これまでに行われてきたマイナス待遇表現にかかわりの深い研究を整理する。そして、待遇表現や待遇表現行動についての先行研究のアプローチと、その中でのマイナス待遇表現研究の現状を把握する。その上で、マイナス待遇表現の研究が、待遇表現や待遇表現行動の研究に資する点を指摘し、研究の展望を行う。

2. 1. マイナス待遇表現に関わる研究

2. 1. 1. 悪態・悪口の分類

雑誌『ことばの宇宙』(東京言語研究所ラボ教育センター)では、悪口の特集が組まれた(1967年8月号)。そこでは、作家、詩人、裁判所調査官、音楽家などの執筆で、様々な観点から悪口と呼ばれることばについての報告がなされている。随筆調の主張が多い中、目を引くのが筒井(1967)である。筒井氏は悪口の分類について「ぼくの手にあまる」としながらも、約700もの卑語語彙の例をあげ、その分類枠を提示した(表1)。

表1 筒井(1967)の悪口の分類 筒井(1967)から筆者が整理、作表

	細目	語例(一部)
分類A	架空の動物	悪魔 鬼 天狗 おたふく…
分類B	人間	野郎 死人 不良 成りあがり 弱虫
分類C	職業	藪医者 先公 公僕…
分類D	身体	ふた股 屁っぴり腰…
分類E	けもの	野獣 たぬき 狂犬 ぶた
分類F	鳥	ひよっ子 若い燕
分類G	魚介	ザコ 出目金 たこ カマトト
分類H	虫	うじ 虫けら だに
分類I	植物	もやし ぼけなす
分類J	鉱物	軽石 焼石
分類K	加工品	ひも 鬼瓦
分類L	自然現象	雷 蜃気楼
分類M	生死	お陀仏 露命
分類N	病気	癲癩 水膨れ
分類O	身体障害	かたわ ちんば 盲
分類P	精神障害	ヒステリー 気違い

卑語の分類枠には、何をもってマイナス評価を表すかについての価値基準が反映される。筒井氏の分類はこれを具現化したものであり、この種の研究の出発点として興味深いものである。この分類の中には、30数年たった現在では、活字にして世に出すことがはばかれる語彙や、「あから顔」「アキレス腱」など悪口としての意味合いが薄くなってきているものも含まれている。これらの語彙の使用や意味の通時的変遷もまた、その分類との関連で興味深い。悪口として、どのような語彙の使用が規制され、あるいは頻用されるようになったのか。背景社会との関連が考察対象となるだろう。

このほか、悪態表現の意味分類をおこなった荒木(1994)やその分類に基づいて「ぞんざい表現」を分類した荒木(2001)で、悪態の分類がなされている。また、星野(1969, 1971)は、悪態の形態を語彙の品詞や言語の単位にとらわれず「誰に対して」「第三者を意識するかしないか」という悪態の使用の視点から分類した。特に星野(1971)では、悪態の動機と機能についての整理が行われている。

望月(1967)は悪口の機能・目的・形態を次のように分類した。

1. 熱い悪口——生の感情をぶつけた罵倒に近いもの。相手と心理的に密着したところでの悪口。
2. 冷たい悪口——心理的距離を置いて、冷たく突き放すような冷静な悪口
3. 救う悪口——相手を悪く言うだけが目的でなく、相手の悪いところを是正することを目的とする悪口
4. 捨てる悪口——相手の悪所を指摘し、直しようがないとさじを投げる形の悪口。
5. 間接話法の悪口——相手に密接に関係している人の悪口をいうことで、相手を悪く言おうとする。

これらは、分類基準の不統一や間接話法という用語の用い方に注意を要するが、マイナス待遇表現行動上の多様性の把握を試みた研究といえる。

2. 1. 2. 言語行動論的アプローチ

悪口・悪態・罵りを言語行動と捉え、その特徴を分析した研究には荒井(1981)、浜田(1988)がある。先述の星野(1969, 1971)も悪態行為の現場に着目したという意味では言語行動論的アプローチであると言えよう。

荒井(1981)は星野(1971)や儀礼的悪態を扱った Labov(1972)などの論考を踏まえ、悪態を戦略的な相互作用として捉えた。会話という相互作用には、演者と聴衆という役割関係の虚構意識が存在することに着目し、悪態はその虚構意識の強さによって、会話的ジャンル(憎まれ口、ののしり言葉)、遊戯的ジャンル(悪態祭り)、虚構的ジャンル(悪口歌)とに分類できるという。荒井氏は、フォークロア研究の理論に悪態の諸相を当てはめ、このような解釈をほどこした。

浜田(1988)は罵りという言語行動について、罵り表現のイメージ、使用に対する規制、攻撃性という言語形式の評価性を問題にした。浜田氏の研究では、アンケート調査により送り手の言語意識を数量的に把握し、日本語と中国語とを対照した点に特徴がある。浅田(1979)においてもアンケートによる調査結果をもとに悪口の社会言語学的な分析がなされている。浅田氏は老年層以外の幅広い年代からデータを集め、悪口の男女差、悪口の対象となりやすい人物、言われて嫌な人物、悪口に含まれる語彙などについて、その傾向性を報告した。これらは、主観に頼らずマイナス待遇表現を量的に把握しようとした先駆的な研究である。

社会語用論・発話行為論の立場からの研究としては、初鹿野・熊取谷・藤森（1996）、Olshtain, E & Weinbach, L（1993）などの不満表明研究がマイナス待遇表現行動の研究と関わる。Olshtain, E & Weinbach, L（1993）では、第二言語学習者の不満表明が長くなる傾向があり、表明の仕方が一定しないケースがあることが明らかにされた。また、両者とも上下（power）や親疎（distance）などの人間関係や、数種のコンテキストにおける不満表明を分析しており、社会言語学的アプローチであるといえる。さらに分析の方法として、不満表明の発話をいくつかの要素に区切り、それぞれの要素の出現傾向を探ることから、不満表明の特徴を描き出している。この方法は本論でも大いに参考にするところである。

2. 2. マイナス待遇表現研究の現状

これまでのマイナス待遇表現に関わる研究をふりかえると、考察の対象が悪態や卑語に偏っていることが否めない。悪態や卑語は、あからさまに待遇対象にマイナスの評価を表現する。敬語にはプラス評価の段階に応じた形式が複数存在するが、悪態や卑語の場合は「とてもマイナス」「ややマイナス」といった形式の待遇的意味の段階性は見られにくい。とくに卑語の中でも卑罵語と呼ばれるバカ、アホ、ボケなどといった語彙は、「極めてマイナス」であり、待遇的意味の段階性は見られにくい。しかしながら、待遇的意味や待遇意図のプラスやマイナスは連続的な評価軸であるから、極端なマイナスもあれば、ややマイナスという程度のものもある。極端なマイナスの評価性をもつ卑語や悪態の研究だけでは、マイナス待遇表現の研究は不十分である。

では、「ややマイナス」のマイナス待遇表現はどのように実現されているのか。インターアクションの中で常に存在している対人関係は、マイナス待遇表現行動に何らかの規制を与えているはずである。浜田（1988）が指摘した「使用にかかる規制」によって罵り表現が使えない場合、どのような代替表現によってマイナス待遇表現行動が行われているかについては、その実態が明らかになっていないといえる。その姿はいかなるもので、どのような分析方法が妥当なのかについては検討の余地がある。

3. 待遇表現のモデルについての研究

広域な言語事象を「待遇」という観点から捉えるためには、言語形式への着眼のみでは不十分である。第1章の3. 3. 2. では、慇懃無礼の事例から、待遇表現行動の方向性が、言語形式の待遇的意味ではなく、送り手による事態把握の際の評価と表現姿勢とによって決定することについて触れた。そういった事象をも分析しうる考察の枠組みが必要となる。つまり、送り手はどのような待遇意図をもって発話を行ったかということを考察の対象に含みうる待遇表現行動のモデルが必要なのである。

そこで重要となるのが、送り手の事態把握から待遇表現形式の運用までのプロセスである。このプロセスは、南（1987）、杉戸（1983b）、菊地（1994）によってモデル化がなさ

れている。これらのモデル化には、時枝（1941）で言語の3大要素の一つとされた「場面」の捉え方について議論した1950年代前後の場面論が影響を与えているものと思われる。とりわけ永野（1957）が、客観的に存在する「事態」と送り手によって認識された「場面」とを区別したことは重要であろう。ある発話の場において客観的に存在する要素は様々である。受け手が誰であるかということはもちろん、送り手や受け手の気分、昼か夜かという時間的要素、気温、匂い、場所柄なども考えられる。それらのうち、送り手によって把握されたもののみが「場面」の構成要素となる。

先述した各氏のモデルにおいても、この区別は生かされており、事態把握や人間関係の把握のあり方が問題になる。この区別が生かされることによって、待遇表現研究は言語行動論的な色合いがより強くなる。

3. 1. 南不二男氏のモデル

南（1974）では敬語の一般的な性格として、次の3点があげられている。

- (1) なんらかの対象についての言語主体の配慮²があること。
- (2) 配慮の対象あるいはそれについての表現に対する、言語主体の何らかの評価的態度があること。
- (3) その結果として、表現の素材的内容あるいは表現そのものに対する言語主体の扱い方に違いが出て来る（つまり、具体的な表現に違いが出て来る）。

これらの3点は、氏の論述に明記はされていないが、表現が産出される順序を表していると見る事が可能である。ただ、南氏はこれらを敬語の意味の要素として捉えており、狭義の敬語の意味を図1のような形で表した。

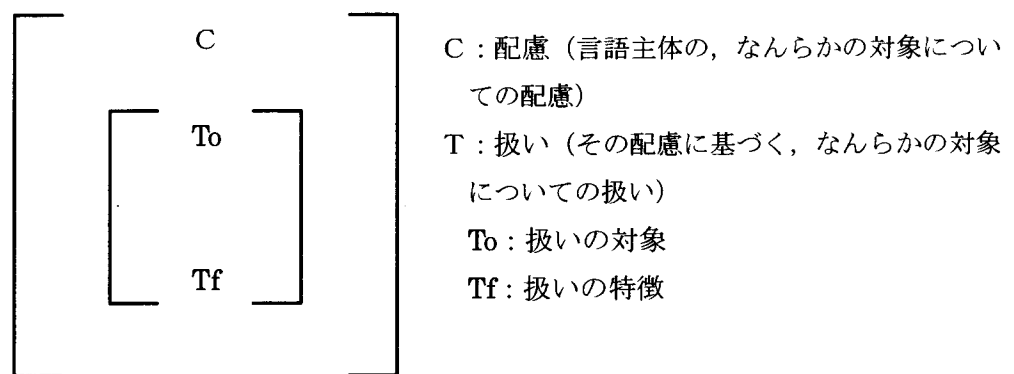


図1 敬語の意味の一般的な構造

略記号のうち、C は配慮を表す。配慮の対象として南（1974）であげられているのは、

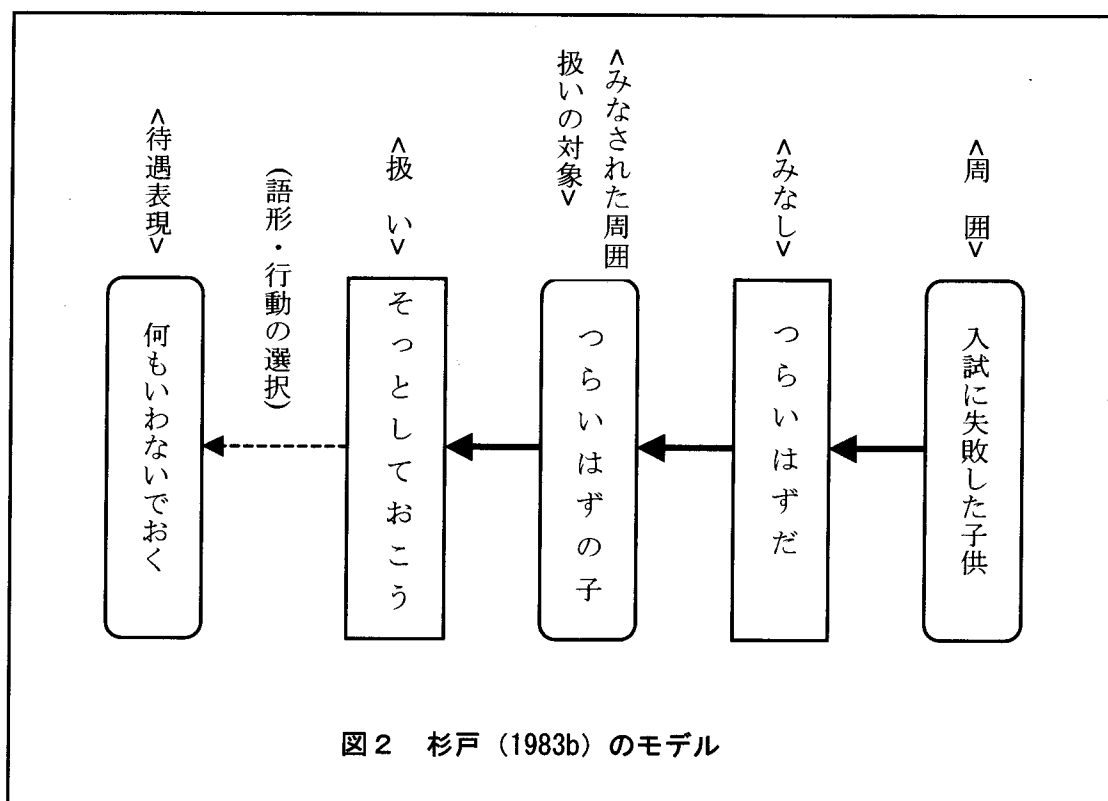
² 南（1987）では「配慮」から「顧慮」と改められた。「配慮」がプラスのイメージを持つことを考えると、「顧慮」という用語を使うことで、マイナス方向を含めたより広い待遇表現（行動）が考察可能になる。

参加者の関係，コミュニケーションの内容，状況などである。Tは配慮に基づく扱いを表し，その扱いの例として，上のものとして扱うか，下のものとして扱うかということが南（1974）ではあげられている。

この図を基本に，南氏は尊敬語，謙譲語，丁寧語，美化語といった待遇表現の専用言語要素の意味を分析している。また，同書では言語表現生成の過程がモデル化されている（pp286-310）。そして，図1では待遇表現形式の意味を捉えることに重点が置かれてはいるが，言語表現の意味を捉えるために，表現生成のプロセスを考慮したことは，大きな特徴であるといえよう。

3. 2. 杉戸清樹氏のモデル

配慮や扱いという概念を，表現選択のプロセスに位置づけたのが杉戸（1983b）である。杉戸（1983b）では待遇表現における気配りの段階として「話し手ないし言語行動主体に意識された限りの」「周囲」を設定している。次の段階として，その「周囲」に対する「みなし」段階があり，さらにその「みなし」にふさわしい「扱い」を定める段階を設定している。これら「みなし」と「扱い」とは気配りの段階の下位段階である。



第1章の3. 2. 2. で引用した事例は，このプロセスでは次のように図式化されている。上図のような考え方は，「実験や調査をへて実証されていない仮説である」とされている

るが、本論でいう待遇表現行動を論じるにあたってきわめて有益である。

このモデルでは、客観的に存在する事態を送り手が何らかの評価をもって認識するという、待遇表現の選択に強い影響を与えるプロセスが存在し、永野（1957）の事態と場面とを区別するアイデアがいかされている。

3. 3. 菊地康人氏のモデル

菊地（1994）においても、「待遇表現の選択までのモデル」が図式化されている。そのモデルでは次のようなプロセスが示されている。

まず、会話の場やその上下・親疎・立場などといった社会的諸ファクターが把握・計算される。次に、その把握・計算にそのまま対応した待遇を行うか否かを最終的に決める段階がある。この段階では、社会的諸ファクターよりも送り手の人間関係の捉え方や相手への心情などの心理的ファクターが、背景的なファクターとして、待遇表現の選択を決定づけることが指摘されている。社会的ファクターを送り手が把握・計算し、背景的な心理的ファクターを通して、待遇表現が選択されるというプロセスである。逆に、心理的ファクターは背景的というよりは前面に押し出されるケースもあることについても指摘がある。この指摘はマイナス待遇表現行動を考察する上では、不可欠であろう。待遇表現のなかでも卑語の運用についてはそういった性格が色濃い。

こういったファクターの把握・計算や、事態の把握を経て、送り手は待遇対象の扱い方を決定し、待遇表現形式の選択に至る。これらのモデルには、広範な言語事象を待遇という観点から捉える可能性があり、本論でも参考にするところである。

4. 待遇表現形式の意味と社会的ダイクシス

4. 1. 彭国躍氏の待遇行動観

彭（2000）は待遇の意味を、いったん言語上の問題から開放して、哲学的な見地からの分析を行った。彭によれば「待遇」という行為は3つの基本的要素と3つの基本作用によって成立しているという。それぞれの概念を、例えば、自宅を訪ねてきた客人に対する待遇行為で説明すると次のようになる。

待遇主体は客人という待遇対象に何らかの価値評価を行う。そして、その価値評価に見合った待遇行動、すなわち「玄関での立ち話」「招き入れてお茶を出す」などの行為を遂行しようとする。それらの行為自体が待遇象徴である。待遇主体は「玄関での立ち話」「招き入れてお茶を出す」という待遇象徴に何らかの価値承認を行っており、その価値承認にもとづいて（実際に「玄関での立ち話」「お茶を出す」ことによって）待遇対象に価値付与を行うというわけである。以上に述べたうちの文字囲みをした待遇主体・待遇対象・待遇象徴が3つの基本的要素で、下線を付した価値評価、価値承認、価値付与が待遇の3つの基本作用である。これらの待遇行為は彭（2000）では、図3のように示されている。

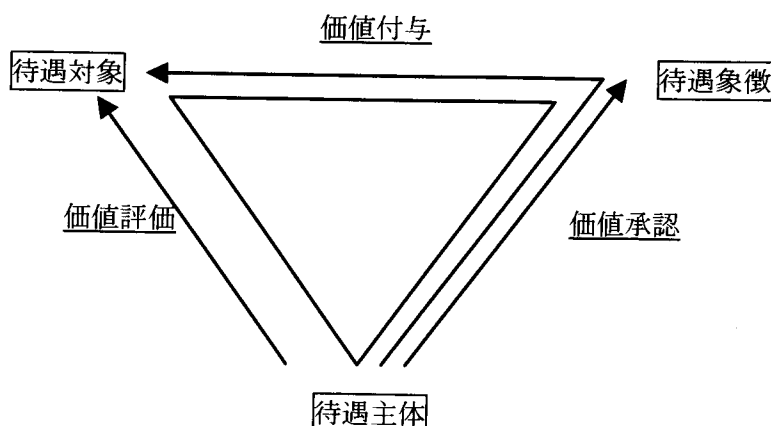


図3 待遇行為三要素と三作用 彭（2000）に加筆

ことばによる待遇の場合、待遇表現形式が待遇象徴であり、それをもって待遇対象に価値付与するということになる。

この考え方では、待遇表現形式が有する待遇的意味と、送り手の評価的態度とが区別される。彭氏は南（1977,1987）が「評価的態度」「顧慮の気持ち」などを敬語の扱い方の特徴としてとりあげ、敬語の評価的機能に注目したことを評価している。その上で、それらの特徴を直ちに言語形式がもつ意味に結びつけることに疑問を呈している。この点は待遇表現における言語形式と言語行動との関係性について、議論を深化させたものであり、卓見と言うべきである³。

ただ、彭（2000）において、敬語は社会的ダイクシスであるとする Levinson（1983）の捉え方を「大きな欠陥」とされる点には疑問が残る。「欠陥」とする理由として、彭氏は単なるダイクシスは「誤用」による「失礼現象」などのディスコミュニケーションを起こさないということをあげている。しかし、照応する内容が社会的関係である限り、敬語がダイクシスであっても、その誤りは十分にディスコミュニケーションの原因となりうる。

4. 2. 敬語のダイクシス的性格と失礼現象

敬語のダイクシスとしての捉え方はさまざまである。真田（1995）は、狭義の敬語のうち尊敬語や謙譲語が「人称暗示的機能」を有することをダイクシス上の問題であるとした。また、Levinson（1983：安井・奥田訳 1990）においても、日本語の敬語を含めた honorifics が社会的ダイクシスであることを主張している。Levinson は、社会的ダイクシスを次のように規定する。

³ ただし、本研究で設定した待遇表現形式の待遇的意味と形式に付随するイメージを、図3のどこに位置づけるべきかについては判断に迷う。価値承認の結果、待遇象徴（形式）にイメージがもたらされると考えるべきか。

会話参与者（正確には、会話参与者の役割を現在、になっている人々）が社会的にどういう位置にあるのか、あるいは参与者間の社会的関係、あるいは彼らの一人と、言及されている人々または実在物との社会的関係を記号化する言語構造の諸相

また、「社会的ダイクシスは、社会的情報の文法化、あるいは言語構造における記号化に関連している」とも述べられている。この点についていくつかの事例を以下でみて、失礼現象とのかかわりを考えてみたい。

(4) [学生が教師に対して]明日、学校においでになりますか。

(4)では、言語上、話し手と動作主が明示されずとも、外的文脈の照応により話し手と待遇対象との「関係」は表現される。さらに、言語形式を固定し、[]内を操作して次のように様々な文脈を作り出せる点は、敬語が個々の人物ではなく、社会的「関係」を記号化していることを表している⁴。

(5) [クラブ員がOBに対して]明日、学校においでになりますか。

(6) [新任教師が校長に対して]明日、学校においでになりますか。

そして、「おいでになり」で記号化される関係が、具体的に誰で、どういった人間関係であるかについては、文脈に依存しないと分らない。

この性質を踏まえて、失礼現象が生じうる事例を示そう。(7)のような待遇表現の運用は、確かに多くの場合失礼にあたる。

(7) [学生が教師に対して]明日、学校に来るの？

これを「誤用」とするには、4つのケースが考えられる。

まずは、一部の会話参与者の規範から見て「誤っている」とする捉え方である。例えば(7)のような事例で、教師が規範的と考える社会的関係の表示の仕方が(4)～(6)のようなものであれば、(7)は誤っていると認識されるであろう。しかし、学生と教師が所属している言語共同体が(7)を会話の場で行うことを許容する規範を持っていれば、(7)によってディスコミュニケーションは生じない。つまり、この場合にディスコミュニケーションを起こす要因は、会話参与者間の言語形式に対する規範の認識のずれである。

次のケースは、(7)が会話参与者間の規範を問題とせず、それを聞いた第三者が別の規範から「誤用」と判断するケースである。新聞の投書などにありがちな「〇〇という敬語の使い方はおかしい、けしからん」とする類の判断である。第三者がそのような「日本語の標準的規範」を持ち出すとき、とくに(7)は現代日本語では誤用と見なされる場合が多いだろう。

⁴ 敬語をダイクシスとして捉えることについては滝浦(2002)で身内に対する待遇の用法の存在から、その説が補強されている。参照されたい。

3つ目の誤用の捉え方は、(7)で学生が教師を人違いで話しかけてしまった場合である。これは学生の事態把握のレベルでの「誤り」で、それゆえに失礼となるのであり、教師自体を恒常的に過小評価しているわけではない。実際、学生が人違いであると気づいた場合、「来る」という誤った待遇表現形式の使用に対して、教師を適切に評価する、規範に応じた言語形式を使用しなおすなどの補償行動をとるであろう。

そして4つ目は単なる言い間違いである。話し手としては「おいでになりますか」という待遇表現を用いるべきであるという規範を持っているが、口が滑って「来るの?」と言ってしまったケースである。これはパロールとして起こりうることで、「来る」というニュートラルな待遇表現形式自体が問題なのではなく、その使用の仕方により送り手にとってのミスがある。

4通りの誤用のうち、1つ目と2つ目のケースは待遇表現形式への価値承認(図3参照)に対する規範のギャップが問題である。3通り目は事態認識の送り手にとっての誤りであり、4通り目も待遇表現形式の問題ではなく送り手の形式の選択ミスである。そして、これらはいずれも待遇表現形式の直示的性質を否定するものではない。さらに、上下や親疎などの社会的関係がすでに評価的なものであることを考えれば、待遇表現形式が社会的ダイクシスとしての性格をもつことと、プラスやマイナスなどの評価的な待遇の意味をもつこととは、排他的に考えるべきではないと筆者は考える。

「おいでになりますか」という表現形式は、言語社会に価値承認された待遇の意味を持ちつつ、話し手と聞き手との社会的関係を指し示しているのである。筆者の関心は、敬語形式が文法的か語彙的か直示的であるかというよりは、むしろこの点にある。すなわち、待遇表現形式には社会的関係を表示する機能と、形式自体の評価的な意味とを同時に持ち合わせているという点である。

4. 3. 卑語は社会的ダイクシスか — 関係性待遇と感情性待遇 —

ところが、狭義の待遇表現でも、卑語に関しては社会的ダイクシス性があてはまらない場合がある。

(8) [クラブの後輩が先輩に対して] 明日、大学に来くさるんか。

(9) [大学の教師が出入りの業者に対して] 明日、大学に来くさるんか。

(10) [親しい友人に対して] 明日、大学に来くさるんか。

これらの発話は、もちろん非日常的であり、その分ディスコミュニケーションを生む可能性は極めて高い。しかし、注目すべき点は、同じ「来くさる」という待遇表現を用いても、(8)～(10)が発話される場での[]内の人間関係には共通性がないことである。これらの待遇表現形式はマイナスの価値承認がなされた待遇象徴ではあるが、「社会的関係」を表示しているのではないことがわかる。むしろ、社会的関係を指し示すことを放棄し、話し手自らの感情を吐露する表現である。

狭義の待遇表現のうち敬語は敬意という「心理的な要因」によって用いられるものではないという見方が多く見られる(時枝 1941, 大石 1976, 彭 2000, 滝浦 2002 など)が、(8)～(10)のような卑語の運用の場合、4. 2. 1. で述べたように、むしろ表現のプロセスで心理的な要因が積極的に働いている。そういった性質の待遇表現行動をここでは**感情性待遇**と呼び、その性質を持つ卑語を以下では**感情卑語**と呼ぶ。これには、(8)～(10)のような助動詞のほかにアホ、バカ、ボケ、タワケ、ダラ、ホンジナシなどの語彙や、クソヤロー、ドタマ、ボログルマなどのなどの接頭辞、アイツメ、ワルガキドモなどの接尾辞などが含まれる。

ただし、感情性待遇の表現と感情表現との区別は必要である。「うまいなあ!」「きれいだなあ!」が単なる感情発露であった場合、対象への評価はあっても、その評価の表出は対象には向いていない。また、対象を顧慮した上で対象への扱いを定める待遇的なプロセスが存在しない。足を踏まれて思わず言う「痛い!」といった表現も感情表現であって待遇表現ではない。一方、非難の意を込めて「痛いなあ!」と言え、これは対象への扱いを定めるプロセスを含む感情性待遇の言語行動ということになる。

一方、社会的関係を指し示す卑語もある。

- (11) [大学教員が学生時代の後輩である大学教師に対して (学生が周囲にいない場合)]

〇〇君, 明日, 大学に来るの?

- (12) [大学教員が親しい同輩に対して (学生が周囲にいない場合)]

〇〇さん, 明日, 大学に来るの?

- (13) [大学教員が学生時代の恩師に対して]

〇〇先生, 明日, 大学においでになりますか?

(11)の下線部の形式は、(8)～(10)のような対象に対して感情を吐露するものではないが、大学社会の中で考えられる発話である(12)(13)の下線部と比較すれば、(11)の下線部は話し手が聞き手を相対的に下向きの社会的関係を表す言い方であることがわかる。このようにプラスであれ、マイナスであれ、社会的関係を表す待遇行動をここでは**関係性待遇**と呼ぶ。そして、関係性待遇の性質を備えた卑語を、以下では**関係卑語**と呼ぶ。この下向きの関係を表現することに関して、話し手と聞き手との間に社会的な合意があれば、ディスコミュニケーションは生じない。また、下向きの関係を表す待遇表現は、上向きや中立の方向性の待遇表現と相対化されることで成立するが、それぞれの形式には、強いマイナスのイメージが付与されていないため、待遇表現として気づかれにくい場合もあろう。

- (14) 花に水をやる

- (15) 犬にえさをやる

- (16) 子供に小遣いをやる

- (17) 友達に誕生日プレゼントをあげる

- (18) 上司に電話を差し上げる

(14)～(16)の「やる」のような授与表現は、(17)の「あげる」や(18)の「差し上げる」と相対化すると、下向きの待遇表現形式であることに気づく。また、相手に配慮した表現であっても、「ご苦労さま」のようなねぎらいの発話行為に用いられる言語表現が、目下専用である場合があり、これも関係性待遇の性格をもったマイナス待遇表現形式とみなしうる。

このように、卑語やマイナス待遇表現形式は、社会的関係を指示する表現性と感情吐露の表現性の両面を有している。待遇表現全般を考えた場合、敬語のようにダイクシスという観点からのみの説明では不十分なのである。

感情吐露の表現性は、プラス待遇表現にも適用できる。例えば、友人の描いた絵画を見て「うまいなあ!」とか「きれいだなあ!」と友人に気遣って評すれば、これはプラス待遇表現になるが、これもやはり社会的関係を前面に表現しているわけではない。これらの表現はたとえ聞き手が目上であったとしても、許容される場合が多いのではないだろうか。

つまり、プラスやマイナスの方向性に限らず、待遇表現には少なくとも関係表示性と感情表示性の2つの側面があるといえる。これらのうち、関係表示性を示す待遇を「関係性待遇」、感情性を示す待遇を「感情性待遇」として区別した。さらに、それぞれの待遇性をもつ、卑語を「関係卑語」と「感情卑語」とに分類した。両者は事態に対する評価を結果的に表現するという共通の性格から待遇表現としてまとめられる。

5. 待遇表現の社会言語学的研究

「事態」が送り手のフィルターを通して捉えられた「場面」となるとき、そこにはすでに社会的な顧慮が含まれる。待遇対象との人間関係や発話の「場」への顧慮。そういった顧慮の中で送り手自らの感情や意見をどの程度表現することが可能であろうか。そういったことは、まさに「背景社会」とのかかわりから決定される。このように考えると、待遇表現行動という概念自体が、すでに社会言語学的なものであるともいえよう。以下では、本研究に関わる社会言語学的な研究をとりあげる。

5. 1. 社会制度と待遇表現（行動）の体系

待遇表現の使い分けや段階性と、地域社会の人間関係の制度との対応関係を追究するタイプの研究は枚挙に暇がない。このタイプの研究は待遇表現が表示する社会的関係とそれに対応する言語形式が、具体的にどのようなものであるかを明らかにしようとするものである。真田(1973)は越中五箇山郷の待遇表現の使い分けが、年齢、経済力、教育などの社会変数のうち、家格によってもっとも強く支えられていることを明らかにした。その10年後には真田(1983)で、待遇表現の使い分けの主要因が家格という封建社会的なものから、年齢へと移行しつつあることを、五箇山郷真木集落の全数調査から実証した。変化のダイナミズムから日本語待遇表現の行方をリアルタイムで描き出したケーススタディでも

ある。

これらの研究で採用されたリーグ戦方式の分析方法は、宮治（1984）、国立国語研究所（1986）、姜（1997）でも採用されている。この方法では、調査者が上下・親疎といった場面設定を行わない。集団内に存在する人物を待遇対象として多数（ないしは全員）設定し、その人物に対して選択される言語形式から、「待遇表現上の」人間関係を帰納する点に特徴がある。これらの研究は、上下関係・親疎関係という既存の抽象的な分析軸が有効であることを実証するだけのものではない。分析されるのは地域社会における具体的な社会制度と待遇表現形式との対応関係である⁵。まさに関係性待遇の観点からの調査、分析が行われたわけである。これによって待遇表現形式の使い分けの実態と、待遇表現形式から見た社会制度の具体像とが同時に明らかになる。待遇表現の体系性が社会的背景に影響を受ける様子を映し出した研究であるといえる。

ただ、背景社会や人間関係による待遇表現の使い分けの解明に、感情性待遇の観点をとりにれた研究は進んでいない。命令表現などの感情的な表現の使い分けや、関西方言の卑語形式である助動詞ヨルの詳細な考察は、研究課題として残されたままである。近年、中井（2002）によって卑語形式ヨルについて重要な知見が示されたが、本研究でも研究の深化をはかる（第4章）。

5. 2. 待遇表現行動の原理とポライトネス

井出・荻野・川崎・生田（1986）では日米の対照から、「わきまえ方式」「はたらきかけ方式」の敬語行動があることが見出された。そして、日本語における敬語行動が「わきまえ」という文化行動様式の中に位置づけられることを示し、その行動様式を軸に、井出・申恵・川崎・荻野・Beverly Hill（1988）で日本、韓国、タイ、アメリカ、スウェーデンの各言語における敬語行動の対照研究もなされた。

また、行動原理という観点からは、ポライトネス研究を無視することができない。フェイス処理行動としてのポライトネス行動の理論は、日本語の待遇表現行動をも説明する。宇佐美（2002）では、ポライトネスを「円滑な人間関係を確立・維持するために機能する言語行動」と定義し、「普遍的」な言語行動としてのポライトネスを強調した。さらに、宇佐美氏は、「円滑な人間関係の確立・維持」とは反対方向の「マイナスポライトネス」をも議論の対象としている。対人関係を調整する言語行動を扱う際にプラスとマイナスとい

⁵ ちなみに、関西方言のハル敬語については、その言語上に表れる社会制度は、上下親疎といった分析軸では説明できないようである。宮治（1992）はハル敬語を「関係把握の表現」とし、岸江（1998）は「親愛語」として位置づけ、辻（2001）は「人以外、抽象・観念的世界以外の一般的な3人称を指標する表現」とした。宮治（1992）の「関係把握の表現」というハル敬語の捉え方は、時枝（1941）での「関係認識の表現」という待遇表現の捉え方と類似する概念であるが、その具体的な関係についての分析が岸江（1998）や辻（2001）でなされたわけである。しかし、岸江（1998）と辻（2001）では、人以外（猫やバスなど）を待遇するハルの調査結果に決定的な違いがあり、ハルが表示する関係が何であるかについては未だ定説はないことになる。今後のさらなる研究が待たれる。

う方向性を考慮する点、待遇表現行動研究が解明を目指すものと無関係でない。待遇表現研究は「言葉遣いというツールそのものの丁寧度（宇佐美 2002）」のみを追究するものではなく、丁寧度の違いなどから見出される待遇表現形式の体系性が意味するところが何であるかについての考察が行われる。基礎研究として言葉遣いの丁寧度を把握し、その把握の仕方を洗練する必要はある。しかし、待遇表現研究はそれに終始するべきものではないだろう。

例えば、前述のリーグ戦方式の調査・分析では、待遇表現形式の使い分けについて、人間関係の上下・親疎といった抽象的な要因だけではなく、待遇表現体系が具体的にどういった社会制度を映し出しているかということが興味の対象となっている。

このような待遇表現研究は、言語行動の普遍的な行動原理を追究するというよりは、各言語社会や時代の言語行動の「個別性」を明らかにするものであり、ポライトネス研究とは異質なものであるといえる。待遇表現行動の研究では、表現産出のプロセスのモデル化は行うが、統一的な鍵概念となる行動原理を設けようとはしない。むしろ、個々の待遇表現行動が、どのような意図や顧慮、評価をもって言語形式を運用し、その運用が背景社会とどのように関わるかを明らかにするのが中心的な興味であると筆者は考える。

ただし、個別性を明らかにできる方法論が普遍性をもつという見方もある。待遇表現研究の方法論が普遍性を持つためには、日本語や朝鮮語など待遇表現形式が発達している言語だけでなく、さらに多くの言語にその方法論を適用する必要がある。同時に、各言語それぞれに、最も適切な調査・分析の方法論を探す必要もある。その必要性は、対人関係調整の行動様式に応じたことばの使い分けや待遇の意味が、言語社会によって異なるということを、待遇表現研究では前提としているところから生じる。

この前提を踏まえれば、ポライトネスという言語行動がフェイス処理行動であることを強調した場合でも、フェイス処理に本論でいう待遇表現形式が用いられる限り、個々の待遇表現形式の待遇的意味や、形式自体が話し手のどのような顧慮や扱いを経て用いられるものであるかという問題は無視できるものではないだろう。さらにいえば、待遇表現形式の性質を把握することなしに、ことばを手がかりに推定されるフェイス処理行動の詳細がどの程度明らかになるのか、疑問が残るところである。例えば、関西方言のハルが単に目上に対して用いられるプラス待遇表現であるという認識で、関西方言のポライトネスを分析するのは危険ではなかろうか。上掲論文での宇佐美氏の用語で言えば、「規範的ポライトネス」がどのような多様性を有するのかについての議論が必要であると思われる。

そのためには、対照研究や地域差、属性差を実証的に検証する研究が重要であろう。

5. 3. 広義の待遇表現の分析

広義の待遇表現についての研究は、対象とする言語単位が幅広いため、分析の方法も様々である。国立国語研究所（1957）は、文単位での待遇表現について、送り手のパーソナリ

ティなども含む属性による分析を大規模な調査結果をもとに行っている。文の単位での分析という点では、先にあげた井出・荻野・川崎・生田（1986）の研究もあてはまる。

また、国立国語研究所（1971）では、談話資料の発話をことばの調子や文の長さなど複数の観点から分析している。また、杉戸（1983a,1989,1993,1994,1996,1998）、杉戸・塚田（1991,1993）では、言語行動を説明する言語表現であるメタ言語行動表現の研究が行われている。メタ言語行動表現には、言語行動に対する送り手の「構え」が明示的に示されており、送り手の場面のどういう要素に配慮し、どういう態度で表現行動を遂行するかを知ることができる。これらの研究も「お礼」などの発話行為や「省略」など、狭義の待遇表現を超えた単位の言語事象が分析の対象となっている。

しかし、この分野においては、先にも述べたように言語単位の幅が広く、分析の方法論はようやくその枠組みが提示されたという段階だろう（中田智子 1990,1991・熊谷智子 1997・沖裕子 2001）。

6. まとめと展望

本章では、待遇表現行動には、感情卑語の運用に典型的に見られるように、人間関係だけでなく送り手の感情を表すことによるものもあることをあらためて指摘した。そして、待遇表現行動を分析するにあたって、関係性待遇と感情性待遇という2種の待遇表現行動様式の存在を認めた。

また、待遇表現選択のプロセスのモデルは提出されているものの、そのモデルを利用して実際の待遇表現を分析しているのは、メタ言語行動表現の研究に限られている。社会言語学的な待遇表現研究のアプローチの多様性を考慮すると、待遇表現の選択プロセスを利用した研究もさらに多様化することが望まれよう。敬語の選択のプロセスは、修辭的・方略的でない限り言語社会のルールとして慣習的であり、送り手にとっては無自覚に行われることが多い。この性格により、敬語の使い分けについての研究は、場面と形式との対応関係をみる比較的静的なものとなる。

一方、マイナス待遇表現行動の場合、人間関係の悪化への危惧と感情表出の欲求とのほざまで、表現選択のプロセスは送り手にとって自覚的で操作的なものとなることが多い⁶。これらの点を考慮すると、表現選択のプロセスの各段階で送り手が行っている操作の特徴（すなわち、待遇表現行動の特徴）を考察するにあたって、マイナス待遇表現行動は格好の研究対象であると考えられる。

⁶ この点は、様々な表現要素を組み合わせで行われるプラス待遇表現行動においても当てはまる（例えば、「褒める」ためにいかにうまくことばを使うか）ことである。

参考文献

- 浅田芳子(1979)「悪口の社会言語学的一考察」『ことばの諸相』F.C.パン編 文化評論出版
- 荒井芳廣(1981)「悪態行為論ー戦略的相互作用としての悪態ー」『講座日本語学9・敬語史』明治書院
- 荒木雅實(1994)「悪態表現の意味分類について」『拓殖大学論集 人文・自然科学』2-1
- 荒木雅實(2001)「「ぞんざい表現」について」『拓殖大学日本語紀要』11 拓殖大学国際部
- 井出祥子・申恵王景・川崎晶子・荻野綱男・Ake Daun Beverly Hill(1988)「「わきまえ方式」による敬語行動の国際比較ー日本, 韓国, タイ, アメリカ, スウェーデンの場合ー」日本言語学会第97回大会 発表レジュメ 於: 神戸市外国語大学 10月23日
- 宇佐美まゆみ(2002)連載「歩ライトネス理論の展開」『言語』31-1~13 大修館書店
- 大石初太郎(1975)『敬語』筑摩書房
- 沖 裕子(2001)「談話の最小単位と文字化の方法」『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』35 信州大学人文学部
- 岡田正美(1900)「待遇法」『言語学雑誌』言語学会 富山房
- 姜 錫祐(1997)「大学応援団の待遇行動」『言語』26-6 大修館書店
- 菊地康人(1997)『敬語』講談社学術文庫
- 岸江信介(1998)「京阪方言における親愛表現構造の枠組み」『日本語科学』3 国立国語研究所
- 熊谷智子(1997)「はたらきかけのやりとりとしての発話特徴の束という形でみた「発話機能」」『対話と知ー談話の認知科学入門ー』新曜社
- 国立国語研究所(1957)『敬語と敬語意識』国立国語研究所報告11
- 国立国語研究所(1971)『待遇表現の実態ー松江24時間調査資料からー』国立国語研究所報告41 秀英出版
- 国立国語研究所(1986)『社会変化と敬語行動の標準』秀英出版
- 真田信治(1973)「越中五箇山郷における待遇表現の実態」『国語学』93 国語学会
- 真田信治(1983)「最近十年間の敬語行動の変容ー五箇山・真木集落での全数調査からー」『国語学』113 国語学会
- 真田信治(1995)「謙讓表現の現在ー尊敬語とのダイクシスにかかわることなど」『国文学 解釈と教材の研究』学燈社 40-14
- 杉戸清樹(1983a)「待遇表現としての言語行動ー「注釈」という視点」『日本語学』明治書院
- 杉戸清樹(1983b)「<待遇表現>気配りの言語行動」『講座 日本語の表現3 話しことばの表現』水谷修編 筑摩書房
- 杉戸清樹(1989a)「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』8-2 明治書院
- 杉戸清樹(1993)「言語行動における省略」『日本語学』12-10 明治書院
- 杉戸清樹(1994)「お礼に何を申しましょう?ーお礼の言語行動についての定型表現ー」『日本

- 語学』13-8 7月号 明治書院
- 杉戸清樹 (1996b) 「メタ言語行動の視野—言語行動の「構え」を探る視点—」『日本語学』15-11
明治書院
- 杉戸清樹 (1998) 「「メタ言語行動表現」の機能—対人性のメカニズム—」『日本語学』17-11
明治書院
- 杉戸清樹・塚田美知代 (1991) 「言語行動を説明する言語表現—専門的文章の場合—」国立国語
研究所103 『研究報告集12』 秀英出版
- 杉戸清樹・塚田美知代 (1991) 「言語行動を説明する言語表現—公的な挨拶の場合—」国立国語
研究所報告105 『研究報告集13』 秀英出版
- 滝浦真人 (2002) 「敬語論の“出口”—視点と共感と距離の敬語論に向けて—」『言語』31-6
大修館書店
- 辻加代子 (2001) 「京都市方言・女性話者の「ハル敬語」—自然談話資料を用いた事例研究—」
『日本語科学』10 国立国語研究所
- 辻村敏樹 (1958) 「待遇語法」『続日本文法講座』1 明治書院
- 筒井康隆 (1967) 「悪口雑言罵詈謗私論」『ことばの宇宙』8月号 東京言語研究所ラボ教育
センター
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』岩波書店
- 中井精一 (2002) 「西日本における畿内型待遇表現法の特徴」『社会言語科学』5-1 社会言語
科学会
- 中田智子 (1990) 「発話の特徴記述について—単位としてのmoveと分析の観点—」『日本語学』
9巻11号 明治書院 (所)
- 中田智子 (1991) 「発話分析の観点—多角的な特徴記述のために—」国立国語研究所報告103『研
究報告集12』 秀英出版
- 永野 賢 (1957) 「場面とことば」『講座現代国語学 I ことばの働き』筑摩書房 (永野 賢 (1970)
『伝達論にもとづく日本語文法の研究』東京堂出版所収)
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子 (1996) 「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話
者と日本語学習者の比較—」『日本語教育』88 日本語教育学会
- 浜田麻里 (1988) 「言語行動としての罵り—日本語と中国語の罵り表現の対照から—」『待兼山
論叢 日本学編』22 大阪大学文学部
- 藤森弘子 (1995) 「日本語学習者にみられる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学
習者の場合—」『日本語教育』87 日本語教育学会
- 文化庁 (1971) 『日本語教育指導参考書2 待遇表現』大蔵省印刷局
- 彭 国躍 (2000b) 「松下文法「待遇」の本質とその論理的可能性 —「価値の意味論」の枠組み
—」『世界の日本語教育』10
- 星野 命 (1969) 「悪態の文化とその機能—心理の絡み合いの中での位置づけ—」『科学朝日』
7月

- 星野 命 (1971) 「あくたいもくたい考」『季刊人類学』2-3
- 松下大三郎 (1901) 『改撰標準日本文法』
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男 (1977) 「敬語の機能と敬語行動」『岩波 講座日本語4 敬語』岩波書店
- 南不二男 (1987) 『敬語』岩波書店
- 宮治弘明 (1985) 「滋賀県甲賀郡八田方言における待遇表現の実態—動作の主体に対する表現をめぐって—」『語文』46 大阪大学国文学研究室
- 宮治弘明 (1992) 「方言敬語の現在—近畿方言を中心に—」『日本語学』11-11 明治書院
- 望月 嵩 (1967) 「わかればなし」『ことばの宇宙』8月号 東京言語研究所ラボ教育センター
- 山崎久之 (1963) 『国語待遇表現体系の研究—近世編—』武蔵野書院
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge University Press 安井稔・奥田夏子訳 (1990) 『英語語用論』研究社出版
- Olshstein, E & Weinbach, L (1993) *Interlanguage Features of the Speech Act Complaining*. *Interlanguage Pragmatics*. Oxford University Press.

第3章

マイナス待遇表現行動のモデルと社会言語学的研究課題

1. はじめに

マイナス待遇表現行動のなかには、感情卑語の運用や非難の意図が明示的なことば使用がある。それらの多くはけんかや叱責の中などで行われるものであり、感情性待遇の言語行動の典型であるといえる。ただし、そういったマイナス待遇表現行動には、穏当な社会生活を営むための規制がかかる。よって、マイナス評価が露骨に言語表現に表れないように、送り手が表現の運用をコントロールすることがしばしば起こる。社会的な規制にどのような対処をとりながら、送り手はマイナス待遇表現行動を遂行しているのか。また、そういった観点からマイナス待遇表現行動を考察する場合、どのような研究課題が存在するのか。

マイナス待遇表現行動に対する規制は、感情性待遇の言語行動に生じやすく、人間関係を円滑にするための配慮から生じるものである。そして、その配慮を喚起するものが、言語外的なコンテキストである。言語外的なコンテキストには上下・親疎といった参与者間の人間関係、場のフォーマリティ、依頼・非難などを行うことによる相手の心情や労力への負担などが考えられる。マイナス待遇表現行動に対する規制を生むこれらの要因は社会的である。その規制のあり方と要因の効き方を明らかにし、マイナス待遇表現行動の特徴を解明することは、社会言語学的な課題であるといえよう。

本章では、まず、本研究が扱ってたつマイナス待遇表現行動における表現産出プロセスのモデルを仮設する。そして、そのプロセスの各段階で生じる問題点を提示し、社会言語学的な観点から研究課題を整理する。

2. マイナス待遇表現行動のモデル

2. 1. 本研究で仮設するモデル

第2章3節に述べたとおり、表現産出のプロセスは複数の研究者によってモデルとして提示されている。それらのプロセスを参考に、マイナス待遇表現行動がどのように行われるかについて、送り手の表現選択に至るまでのプロセスを、図1のように仮設する。

この図に沿って、それぞれの送り手の表現選択に至るまでのプロセスを、段階ごとに説明する。

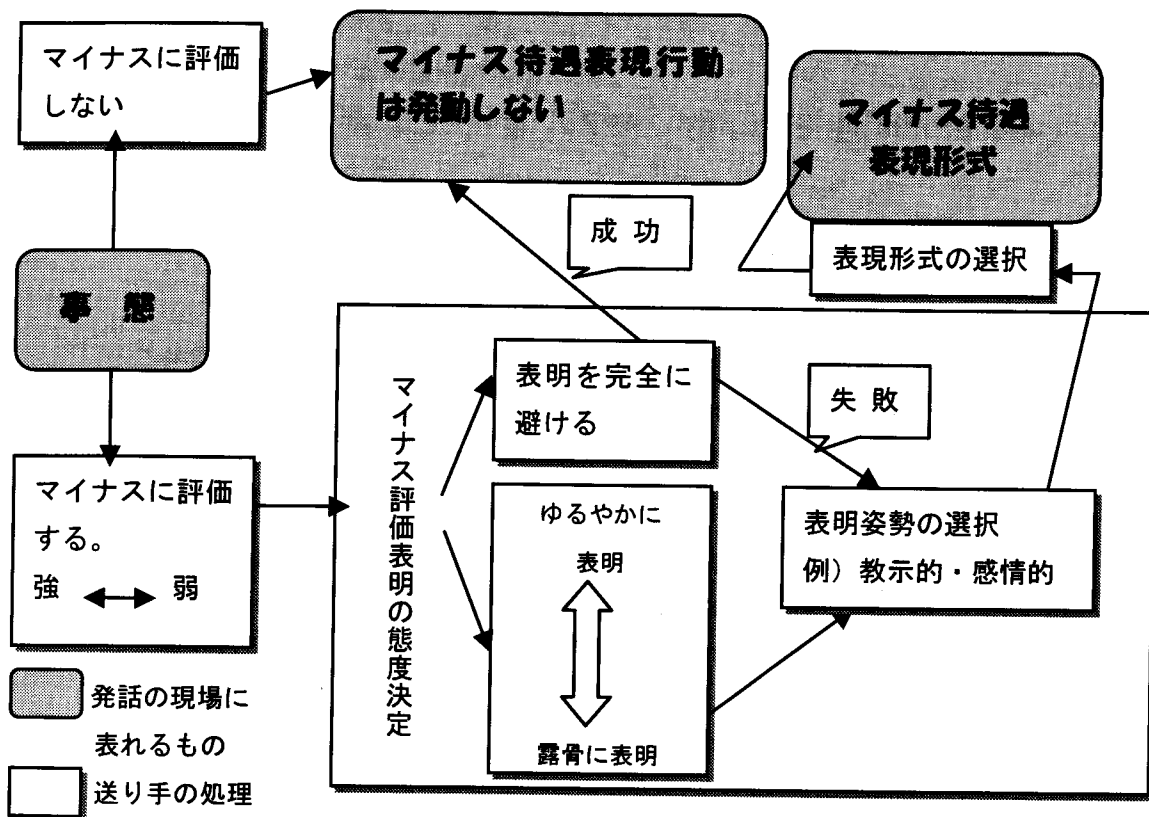


図1 マイナス待遇表現行動のモデル

2. 1. 1. 事象評価の段階 — 評価段階 —

この段階は図1の最も左に位置し、待遇表現行動を行う最初の段階である。待遇対象や眼前の事態に対して、マイナスに評価するか否かという送り手の処理がここでなされる。そのマイナス評価の強弱は、送り手の価値観にもとづいて、主体的に事態に対して付与するものである。この送り手の価値観には背景社会や所属集団の価値観、そして個人のパーソナリティが反映するだろう。

また、この図では、マイナス評価を行わないケースをも含んでいる。事態に対する評価には個人差、言語差があることから、具体的な言語行動を分析するにあたって、送り手が事態にマイナス評価を下すか、下さないかという点をまずは考慮する必要があるためである。分析者にとってマイナス評価が生じうると判断できる事態であるからといって、常にマイナス待遇表現行動が行われるとは限らないのである。

2. 1. 2. 表現態度決定段階1 — 「表明程度」決定段階 —

マイナス評価表明の態度決定の左側の段階である。マイナス評価を表明しないという表

現態度をとり、その実行に成功した場合、マイナス待遇表現行動は発動しなかったことになる。逆に、マイナス評価を表明しないという表現態度をとったにも関わらず、その実行に失敗した場合は、結果的に何らかの形でマイナス待遇表現行動がなされることになる。

意図的にマイナス待遇表現行動を行う場合、送り手はマイナス評価表明にかかる社会的規制と評価を表明したいという欲求を秤にかけることになる。そして、どの程度露骨にマイナス評価を行ってもよいかについてのカリキュレーションを行う。

感情性待遇のマイナス待遇表現行動においても、社会的規制を十分に考慮しながらも、その規制を重大な決意をもって破るような場合もありうる。例えば、上司に対して思い切って反論・批判するような場合である。この場合、カリキュレーションは複雑である。規制を破ることによる様々な社会的制裁を考慮に入れながら、送り手はマイナス待遇表現行動を行うであろう。

また、関係性待遇の性格が強く、人間関係によって表現形式が慣習的に選択される言語行動の場合のカリキュレーションは単純である。

2. 1. 3. 表現態度決定段階2 — 「表現姿勢」決定段階 —

この段階では、罵倒・突き放し・皮肉・ほのめかし・批評的・教示的など、マイナス評価をどのような姿勢で表出するかを決定する。表明程度決定段階で選択されるのは、社会的規制に対する配慮から決定される表現態度である。これに対して、この段階は表現程度の決定に基づいて選択される表現態度である。発話の場に応じて、適切な表現姿勢を決定する際、送り手のカリキュレーションが存在しうる。たとえば、教育的配慮のもとに、マイナス評価をそのまま感情的に表現するのではなく、自分と受け手の立場に気を配り、教示的な表現姿勢をとるなどである。表現程度決定段階と同様、関係性待遇の性格が強い言語行動では、こういったカリキュレーションは単純である。

なお、この段階は、表現程度決定段階における送り手の判断に影響を受ける。ゆるやかに評価を表明する場合に、罵倒の表現姿勢はとらないだろうし、露骨に評価を表明する場合には、ほのめかしの表現姿勢はとらないだろう。

2. 1. 4. 表現選択の段階

この段階では、上記3段階の判断にもとづいて待遇表現形式を選択する。ここには、送り手の言語習得度や言語運用能力が関わるであろう。Olshtain & Weinbach (1993) によると、第二言語学習者の不満表明は発話の単語数が母語話者よりも多くなる傾向があるという。学習者に限らず、自らの表現意図をうまく表現できるか否かは、送り手の属性や発話の場面によって異なるであろう。

2. 1. 5. 送り手による待遇対象の「扱い」

事態評価段階・表明程度決定段階・表現姿勢決定段階の3段階は言語形式を選択する以前に、事態に対して送り手が言語行動の態度を決定する段階である。つまり、送り手はこれらの段階において、待遇対象を言語行動によってどのように扱うかを定める。マイナス待遇表現における待遇対象の「扱い」の特徴は、これら3段階の内容によって形作られるのである。マイナス待遇表現の言語行動論的な分析を行う場合は、この「扱い」の特徴と表現形式との対応関係とが問題となる。

以上のようなプロセスは、各段階での解説でも触れたように、カリキュレーションという概念を導入すれば、関係性待遇と感情性待遇の両者の共通点・相違点についても説明しうるものである。ただし、このプロセスは仮設したものであり、その有効性は様々なマイナス待遇表現行動に対する説明能力から検証される。その有効性は第4章以降の調査研究によって問うことになる。

2. 2. ある場面で考えうる待遇表現行動

前節ではモデルの抽象的な説明をおこなったが、ここでは具体的にある場面で考えうる様々な待遇表現を例に挙げて、モデルの適用例を示していく。

例えば、買い物に付き合うように頼まれて、自分は待ち合わせ場所に約束の時間どおり来たが、相手の友達は20分遅れて「ごめん遅くなった」といって来たとする。この場合に待っていた送り手がとりうるいくつかの言語行動を考えてみよう。

- (1) いやいや、まあこういうこともあるよ。
- (2) いやあ、そんなに待たなかったよ。僕も今来たところ。
- (3) ちょっと遅かったな。
- (4) ばかやろう。遅いんだよ。
- (5) どういうこと？ 今何時だと思っているんだ？
- (6) お早いお着きでいらっしゃいますね。
- (7) 腹が立つ。もう知らん。寄るな。
- (8) <発話なし。顔を一睨みしてそのまま帰る>

これらの表現形式からは、送り手の表現産出上のいくつかの特徴を想定することができる。

前節に示した4つの段階のうち、まずは、評価段階での表現行動の特徴を考えてみる。約束の時間に20分遅れるという行為に対して、「許容」がなされた場合(1)(2)のような発話が生じうる。つまり、マイナス待遇表現行動が発動しないケースである。逆に、(1)(2)のような表現が選択されながら、送り手は心のうちではマイナス評価を抱いていると

いう場合も考えられる。表明程度決定段階における送り手の処理で、マイナス評価の表明を完全に避けるケースである。この場合、(1) (2) は事態の「みなし」としてはマイナス評価であっても、その評価を表現上には露出しないようにコントロールした表現行動であると解釈される。また、表明程度決定段階では、マイナス評価の表出をどの程度の露骨さで行うかが問題となる。たとえば、送り手が極めて悪い評価を下した場合、マイナス評価を表出するに当たって(3)のように控えめにマイナス評価を表明するか、(4)～(8)のようにマイナス評価を明示するかについて、送り手は人間関係などを考慮して決定する。

「表現姿勢決定」段階では(4)のように感情性を前面に出すか、(5)のように問いつめるか、(6)のような皮肉な表現するか、(7)のように感情を表出しながら相手を突き放すか、あるいは(8)のように発話しないことによるマイナス評価表明の効果をねらうかなど、送り手には選択の余地がある。

最後に、これらの表現姿勢を表すために表現の選択がなされる(「表現選択」段階)。それぞれの表現姿勢と言語表現の結びつきについても、個人差・地域差・言語差は存在するであろう。

(1)～(8)のような表現形式をもとに、考える送り手の待遇表現行動の処理を提示した。ここで注意を払っておきたいのは、(1) (2)のように、同じ表現形式であっても、送り手の表現産出のプロセスが異なる場合があることである。この場合、同様の表現形式を選択していても、待遇表現行動の意味もまた異なることになる。

3. 研究課題の整理

2. 2. では具体的な言語行動を図1のモデルに当てはめて説明したが、そこには既に、マイナス待遇表現行動の研究課題についての示唆がある。星野(1971)では、悪態の諸相と表現を条件分析的に研究する必要があると述べられている。そのような指摘は、マイナス待遇表現行動の諸相に迫る場合においても当てはまるものである。ここでは、図1の表現産出プロセスの各段階を分析の条件としてとらえ、各段階における研究課題を整理していく。

3. 1. 評価段階

2. 1. で設定されている状況は「頼みごとをしてきた友人が約束の時間に20分遅れてくる」というものである。他にも様々なケースが考えられる。ゴミを路上に投げ捨てる人たちを見かけたとき、上司に敬語を使わない見習が側にいたとき、貸した本を長い間、返してもらえずにいるとき、電車内で大声で騒いだり、携帯電話で話したりする人を見かけたとき。このような送り手がマイナス評価を抱くような状況は多々考えられるし、日常的に存在する。

しかし、これらの状況へのマイナス評価は普遍的なものではない。マイナス評価を下すか否か、どの程度のマイナス評価を下すのか、といった点は個人によっても言語社会によっても異なるであろう。ゴミを路上に投げ捨てることに無関心な人もいるだろうし、上司に敬語を使わない職場もある。また、長期間本を借りて、持ち主に連絡もしない人は、それぐらいは構わないと思っているかも知れない。そういった事態に対する判断や評価に応じて、マイナス待遇表現行動も異なる様相を呈するであろう。このように、図1の評価段階からすでに、送り手はどのような待遇表現行動をとるかについて、社会的な選択の制限を受けていると考えられる。

事態や状況への評価は個人や集団によって異なり、状況に対する社会文化的な認識がマイナス待遇表現行動を発動するか否かの基準となるのである。

また、どの程度のマイナス評価を抱くかについても同様の制限を受けている。現代社会において、何らかの状況に対する評価や認識は、地域や世代や社会集団によってどの程度共有されているであろうか。表現行動の動機づけを共有している言語行動集団とでもいうべき存在を、帰納的に導き出すことが研究課題として考えられる。

このような点を明らかにすることで、待遇表現行動における多様性を説明する基礎的な情報が得られるであろう。

3. 2. マイナス評価の表出

マイナス評価の「表明程度決定」段階では、状況に対するマイナス評価を表明するか否かを決定する。近年、大人が子供を叱れないことが社会問題化しているが、これはマイナス評価を表明できないでいる状態である。また、教育的配慮や相手が他人であるがゆえに、わざわざマイナス評価を表明しないといったこともありうる。たとえば、自分の子供だからマイナス評価をあらわにして叱りつけるとか、よその家の子供だから黙っておくというケースである。

各言語社会では、どのような状況に対してマイナス評価を表明しない(あるいは表明する)のか。その理由、過去と現在での異なりなどを明らかにすることが研究課題となる。また、マイナス評価を表明する場合、どの程度露骨に表明するかという点もマイナス待遇表現の研究課題となる。評価段階で下したマイナス評価を露骨に表現するか、あるいは隠蔽するか。そこには程度差が存在する。これもまた、言語社会ごとの傾向が存在しそうである。

以上述べたことは、言語社会における言語行動のタブー意識の問題ともいえよう。その実態を明らかにすることによって、分析対象とする言語のマイナス待遇表現行動の特徴が明らかになるであろう。

3. 3. 表現姿勢の選択

「表明程度決定」段階でマイナス評価を表出するという判断をしたとして、その表出を

どのような表現姿勢で行うか。これは「表現姿勢選択」段階にあたる。この段階においても、個人差が相当に働くとは思われるが、例えば、ある言語の話者はマイナス待遇表現行動を皮肉な表現姿勢で行う傾向があるとか、別の言語の話者はマイナス評価を感情的な表現姿勢で行う傾向にあるか、などといったことは実証的な研究は全くないといってよい。この種の研究は、ある言語の言語行動の特徴を説明しうると思われる。

同程度のマイナス評価を表出するという条件の下で、各言語（個人語・地域方言・社会方言を含めて）の表現姿勢の選択が異なるということはあるにない話ではない。表現行動の多様性を把握するにあたって見逃せない観点である。この分析には、ことばの調子や熊谷（1997）などによって提出された表現姿勢の分類などが重要な役割を果たすことになる。

3. 4. マイナス評価表明の手段

「表現選択」の段階は、状況に対するマイナス評価をもとに形成された表現態度を、どのような表現形式でもって表現するかである。この段階で、初めて選択される表現形式が分析対象として表れる。もちろん、無言（ゼロの表現形式）という形式も選択肢に入ってくる。無言は前の3つの段階によっては、冷たく突き放した無視にもなるし、マイナス評価を持ったけれど大目にみるといった配慮の表現にもなる。表現産出のプロセスが、表現形式の待遇的な意味をも決定付けるのである。

また、選択される表現形式のバラエティのほか、選択された表現が、どの程度の強さの評価表明態度と結びついているかという点も研究課題となる。

関西方言話者同士が「アホ」と言いあっているとしても、それは強い罵りあいではないとか、東北方言の命令表現は頭ごなしの言い方ではないなどと語られることがある。これらが事実だとして、そういったコミュニケーションに関する共通認識をもつ集団の中では、問題は生じないだろう。しかし、多文化共生が求められる現在、表現行動に対する認識のずれはトラブルの原因となる。表現態度と表現形式の結びつきについて、応用言語学的なアプローチが求められる所以である。

3. 5. みせかけのマイナス待遇表現

状況に対するマイナスの評価を伴わなくても、「軽卑表現」「卑罵表現」を使う場合がある。偉業を達成した友人を賞賛して「あいつ、ついにやりやがった」などという場合である。この場合は、たとえ選択される「表現形式」が軽卑表現や卑罵表現であっても、「表現行動」としては「低め」ではない。むしろ、修辭的なプラス待遇表現行動であるといえる。

また、マイナス待遇表現行動の面接調査をした経験からいうと、マイナス待遇表現形式を用いた発話は、腹立たしさを表していると同時に親しさをも表現していると内省する人が多い。しかも、そのほとんどは親しい間柄の人を受け手に設定した場合である。つまり、

親しいからこそマイナス評価が明示的な表現形式を用いることができる。この現象を図1のモデルで解釈すれば、次のようになる。

マイナス評価が明示的な表現形式の使用は、「表明程度決定」段階で露骨に評価を表明するという決定を行っている。その決定の際に、送り手が複雑なカリキュレーションを必要としない場合、遠慮なくマイナス待遇表現行動を実行していることになる。このことは、マイナス評価を表明すると同時に、送り手と受け手とが遠慮の必要がない間柄であるということを実証している。すなわち、遠慮なさというメタ情報がマイナス待遇表現行動にともなっているのである。このようなマイナス待遇表現行動の成功は、親しさを表すだけでなく、親しさを強化する役割をも果たす場合があるだろう。

こういった状況へのマイナス評価をともしない、あるいはマイナス評価を表しつつもそれ以外の待遇性をも表現するために、マイナス待遇表現形式を用いる表現行動を、ここでは「みせかけのマイナス待遇表現行動」と呼びたい。逆に、柔らかで丁寧に諭すような言い方には、相手や場面への配慮があっても、状況に対するマイナス評価がともなっていれば、マイナス待遇表現行動である。プラスの待遇表現行動とマイナス待遇表現行動とは、異なる方向性を持ちながら、一つの言語行動の中で排他的ではないのである。

4. まとめ

本章では、マイナス待遇表現行動における送り手の表現産出プロセスのモデル化を行った。そして、マイナス待遇表現行動のプロセスの各段階を、分析条件とすることによって、

表1 マイナス待遇表現行動の分析の条件と問題点

段階	条件	問題点	研究課題
A	状況固定	その状況にマイナス評価を下すか否か。 (評価段階)	言語社会または個人がもつ価値観。何に対して、どの程度評価を下すか。
B	その状況にマイナス評価をもつ	マイナス評価を表明するか、隠蔽するか。 (表明程度決定段階)	言語社会における言語行動のタブー意識。
C	マイナス評価表出の程度の固定	どのような表現姿勢をとるか。表明態度と表現姿勢の結びつき。 (表現姿勢決定段階)	表現姿勢の選択の個人差、言語差。
D	A～Cにもとづいて表現形式を選択する	どういった表現がどの程度のマイナス評価表明の手段となりうるのか。 (表現形式決定段階)	各表現運用の規制の強さ。表現運用を規制する要因。各表現運用の属性差。等

社会言語学的な問題点と研究課題を提示した。それらを表現産出のプロセスの段階ごとに整理したものが表1である。これらについての説明は、すでに3節で述べているので、ここでは省略する。

全ての段階は送り手の心理的過程であり、不可視なものである。表現の送り手に、個々の表現についての心理的過程を内省してもらったとしても、その内省をそのまま分析に用いることはできないであろう。心理的過程を報告するという言語行動自体に、個人の性格などによる差が生じるからである。それゆえに、マイナス待遇表現行動の4つの段階について、分析者の主観的な推定を排除することはきわめて困難である。このことは、研究の方法論上、大きな問題点であるといわねばならない。

しかしながら、これまで述べてきたように、「場面」と「表現形式」との対応関係からのみでは、個々のマイナス待遇表現行動を説明しきれないこともまた事実である。表現産出のプロセスを考慮しないマイナス待遇表現行動の分析は不十分なのである。正確に対象を分析するためには、客観性を重視する必要がある。しかし、マイナス待遇表現行動という分析対象は、主観的な推定をしなければ十全な分析ができない。

この意味で、マイナス待遇表現行動の研究には方法論上のパラドックスを含んでいる。このパラドックスを幾分でも解消するためには、表現プロセスやプロセスの段階がどのように設定できるかについて仮説をたて、具体的な言語行動がその仮説によって説明可能であることを検証する必要がある。図1は、まさにその仮説である。

次章以降では、この仮説をもとに様々な調査から得られたマイナス待遇表現行動を説明し、実態把握を行う。

参考文献

- 熊谷智子(1997)「はたらきかけのやりとりとしての発話特徴の束という形でみた「発話機能」
『対話と知-談話の認知科学入門-』新曜社.
- 西尾純二(1996)「マイナス待遇表現行動における規範意識の属性差」『地域言語』9 天理・
地域言語研究会
- 西尾純二(1998)「マイナス待遇表現行動分析の試み—非礼場面における言語行動規範につい
て—」『日本学報』17 大阪大学文学部日本学研究室
- 西尾純二(2001)「マイナスの敬意表現の諸相」『日本語学』 明治書院
- 星野 命(1971)「あくたいもくたい考」『季刊人類学』2-3
- Olshtain, E & Weinbach, L(1993) *Interlanguage Features of the Speech Act Complaing.*
Interlanguage Pragmatics. Oxford University Press.

第4章

関西方言の卑語形式「ヨル」の表現性

1. はじめに

西日本方言では助動詞ヨルがアスペクトの意味をもつ地域と、待遇の意味をもつ地域とがある。このうち、関西方言の広範な地域ではヨルが待遇表現形式として機能し、待遇の方向性はマイナスであるといわれる。助動詞のマイナス待遇表現形式にはほかに「～ヤガル」「～クサル」などがあるが、それらの形式がどのような用法を持っているかについては、あまり明らかにされていない。その理由の一端は、「～ヤガル」や「～クサル」といった形式の使用が非日常的な場面で用いられるため、事例の収集が困難なことにある。

これに対して、関西方言のヨルは「～ヤガル」や「～クサル」に比べて、さほど強いマイナスの待遇の意味を持たないし、その運用も日常的である。よって、事例収集もさほど困難ではない。また、卑語形式ヨルの待遇性は複雑であり、「～ヤガル」や「～クサル」とは一線を画す用法をも持ち合わせている。

本章では、この関西方言のヨルの待遇性について、感情性待遇・関係性待遇といった待遇表現行動の様式についての違いから分析を試みる。また、助動詞レベルでの待遇表現形式の分析に、第3章で仮設した事態把握や表現態度のあり方といった表現産出のプロセスを応用する。これによって、ヨルという語彙レベルの待遇表現形式の表現性について、本研究で掲げている感情性待遇・関係性待遇といった観点や表現産出のプロセス上の特徴から説明を試みる。

2. 先行研究と問題のありか

近年、関西方言における卑語形式としてのヨルの研究が盛んになりつつある。アスペクト形式としてのヨルがムード性を帯びることとの関連性の中で、関西方言の卑語形式ヨルについての研究が進展した（井上 1998, 工藤 2001, 2002 ほか）。卑語形式としてのヨルについての研究の観点は、大きく次の4つに分けられるであろう。

- (Ⅰ) その地理的分布に関する視点。
- (Ⅱ) アスペクト形式との文法的な関わりを共時的に捉える視点。
- (Ⅲ) アスペクト形式から待遇表現形式へと変化したプロセスへの視点。この視点からの研究では、存在動詞とヨル形式との関わりについても考察対象となっている。
- (Ⅳ) ヨル形式そのものの待遇性についての視点。

次節では、本研究に関わる(Ⅰ)(Ⅳ)を中心に、近年の研究成果を把握したい。

2. 1. 卑語形式ヨルの分布領域

卑語形式のヨルを考察するにあたって、どの地域のヨル形を分析対象とするべきか。まずは、待遇表現形式としてのヨルがどの地域に分布しているかを確認しておく必要がある。

井上(1998)では、各種調査報告をまとめ、卑語形式としてのヨルの分布域を、大阪北部・兵庫県の大阪府に近接する一帯・京都府南部・奈良県北部・滋賀県・三重県を含む地域とした。また、工藤(2002)で調査された7地点は、ヨル形のアスペクト的な意味用法と存在動詞との関わりから、次の3つのグループに分けられている。

Aグループ：大阪市、亀岡市、奈良市

Bグループ：松阪市、赤穂市、相生市

Cグループ：神戸市

Aグループは、ヨルがアスペクト形式として有標ではなく、負の評価性をもつ形式(卑語形式)として用いられる地域である。Bグループはトル形・ヨル形が有標アスペクト形式として用いられる地域(ただし、松阪市はトルのみ)である。そして、Cグループは、基本的にBグループに属するが、Aグループの特徴もあわせもっている地域とされる。卑語形式ヨルは、AグループとCグループの地域に存在しており、Bグループの地域では卑語形式としてのヨルは存在しないという。つまり、近畿から西日本に向けては、神戸市が卑語形式としてのヨルの分布域と、アスペクト形式としてのヨルの分布域との境界域にあると見ることができる。

中井(2002)では、「第三者の待遇表現において軽卑的な意味を示す」形式として助動詞のヨルとトルとをあげ、その分布域を「近畿地方中央部」としている。中井氏によれば、ヨルが「軽卑的要素」をもつ地域は、三重県、京都府北部・兵庫県但馬地方といった「関西周辺」。そのほか「関西中央部」である和泉を除く畿内に、近江を加えた地域であるという。これら、工藤(2002)、中井(2002)の見解によると、神戸市より西の地域では、ヨルは卑語形式としての性格を持たない地域ということになる。

一方、村上(2001)では、神戸市を含め、明石、高砂、姫路、相生の各市においても、ヨルに卑語性が見られることが大学生へのアンケート調査の結果から示されている。これらの先行研究からヨルの分布域は、もっとも広域に考えると和歌山県、和泉を除いた関西のほぼ全域であることになる。しかし、調査によって結果が異なっており、従来は実年層・老年層への調査が多かったのに対して、本調査の回答者が大学生であることから、どの地域のヨルを分析すべきかについては、本調査の調査結果を見て検討することにしたい。

2. 2. ヨル形式の待遇性

2. 2. 1. 関係性待遇の観点からの研究

宮治（1987）では、人間関係による使い分けの観点、すなわち関係性待遇の観点から、近畿方言の待遇表現について詳細な調査研究が行われている。その中で、ヨルの場面による使用の特徴が指摘されている。しかし残念ながら、感情性待遇でのヨルの使用については調査されておらず、ヨルの待遇性の全体像が明らかになったとはいえない。

宮治（1987）の調査では、京都や奈良、大阪ではヨルの出現率は滋賀に比べて低くなっている¹。ただし、これは関係性待遇の観点からの調査結果である。これまでの多くの調査では、「～ヤガル」や「～クサル」のような感情卑語としてのヨルについては、その使用状況が明らかにされていない。よって、関係性待遇の観点で行なわれた調査結果で、ヨルの出現が少ない京都や奈良、大阪でヨルという形式自体があまり使用されないと判断することはできない。一方、中井（1986, 1992）などで報告された調査結果では、とくに奈良県における関係卑語としてのヨルの使用が多数認められている。このように、調査によってゆれがあることにも注意しなければならない。

2. 2. 2. 感情性待遇の観点を含めた研究

2. 2. 2. 1. 用語と概念

工藤（2002）の調査では、京阪奈のヨル・トル形式の待遇性に関する次のような質問項目が立てられている。

G=待遇性

31= 3人称・目上

32= 3人称・目下

33= 3人称・動物

34= 3人称・その他

また、モダリティとしての性格を調査するために、次のような質問項目も設定された。

H=モダリティ（感情・評価性）

10=<出来事>が話し手にとって中立または都合がいい場合

20=<出来事>が話し手にとって不都合（否定的評価）な場合

30=<動作主体>に対する否定的評価の場合

これらの分類から工藤（2002）では、「待遇性」の範疇に「感情」や「評価性」が含まれ

¹ 宮治氏はこの点について、論文の中で取り立てて言及していない。

ていないことが分かる。一方、本研究では、事態に対する何らかの評価が存在し、その評価の伝達が待遇対象にむけられた時点で、送り手の待遇表現行動は開始していると考ええる。このため、上記のモダリティ（感情・評価性）という分類は、本研究では待遇表現の分類のひとつとして考えたい。実際、明らかにマイナス評価性を感情的に表現する「～ヤガル」「～クサル」は典型的なマイナス待遇表現形式として、広く認められている。このような評価を、対象に顧慮しながら、送り手の様々な処理を経て表現化されたのが、待遇表現形式であると本研究では考える（第3章図1参照）。すなわち、「評価性」という概念は全ての待遇表現行動・待遇表現形式が備えているのである。また、「感情性」も対象や事態への評価があつて初めて送り手に生じるものである。よって、本研究では「待遇性」のなかに「感情・評価性²」を含めて考察を進める。

2. 2. 2. 2. 社会的上下軸か話し手の感情・評価か

中井（2002）によると、近畿中央部（中井氏の資料では東大阪市）では、犬という人間から見れば下位に待遇される存在でも、「かわいい（犬）」「汚い（犬）」というような評価語をとまなうと、それぞれがテルとトルとで待遇し分けられるという。すなわち、関係性待遇の性質よりも、「かわいい」「汚い」といった感情的評価を表す感情性待遇としての性質が、テル・トルには認められるという指摘である。

また、中井（2002）では、卑語形式ヨルの用法についても重要な報告がなされている。テル・トルに見られるような近畿方言の待遇表現形式の特質について、ヨルを母方言として使用中井氏は、自身の内省から用例を作成し分析を行っている。氏の内省では、「大好きな」「お世話になった」校長先生は「ハル」で待遇され、「事件を起こした」「大嫌いな」校長先生の場合は「ヨル」で待遇されるという。つまり、「ハル」という表現形式の使用にも感情性待遇の性格を認めている。さらに、氏は同論の中で、次のように述べている。

近畿地方中央部では、人物やモノなどに対して社会的に定まった上下軸の評価よりも、話し手の評価・感情が待遇表現形式を決定する場合に優先される

この記述からは、近畿地方中央部の待遇表現形式が、関係性よりも感情性によって選択される傾向が強いという中井氏の主張を読み取ることが出来る。ただし、「優先」の内容をより明確にするために、明らかにすべきことがいくつか残っているように思われる。

ハルに関して第一に明らかにすべきことは、「大好きな校長先生」に用いられるハルは、校長先生が「目上」だから用いられているのか、「大好き」だから用いられているかということである（中井 2002 表5などを参照）。次に、評価や感情が待遇表現形式の決定に優先するという主張に、感情・評価の程度（たとえば「ちょっと好き」か「大好き」か）がどのよ

² 第2章4. 3. で述べたように、「熱いっ!」「痛いっ!」など、感情や評価の表出が話し手の中で完結し、聞き手や話題の人物を指向しないものは除く。

うに関係するかについても議論の余地が残っているように思われる。これらの2点は、ヨルに関しても同様のことがいえる。

また、感情性待遇はそのときどきの送り手の感情が、人間関係への配慮に優先する言語行動である。典型的には「～ヤガル」「～クサル」といった感情卑語の使用がこれに当てはまり、「～ヤガル」や「～クサル」は待遇対象が目上であっても目下であっても感情の高ぶりに応じて用いられる。つまり、「社会的に定まった上下軸の評価」よりも、「話し手の評価・感情」が待遇表現形式の運用に優先するというのは、感情卑語本来の性質であるとも考えられるのである。「大嫌いな校長先生」に用いられるヨルにこのような性格があるのかについても明らかにしなければならない。

2. 2. 2. 3. 好悪にもとづくヨルの使用

今ひとつ、中井(2002)での重要な指摘は、対象への好悪の別がヨルの出現を左右することである。同論の内省例を次に引用する(番号は変更)。

- (1) 高橋尚子が負ける
タカハシナオコガ マケル
- (2) うれしいことに高橋尚子が負ける (高橋尚子嫌い)
タカハシナオコガ マケヨル
- (3) 残念ながら高橋尚子が負ける (高橋尚子ファン)
タカハシナオコガ マケル / (マケヨル)

(2)のように「嫌い」というマイナスの感情によってヨルが使用され、(3)のように「ファン」である対象がマイナスの状況にある場合はマケルとなり、素材待遇語をともなわないと内省される。また、(3)でヨルを使用しうることについては、次のように解釈されている。

最良ゆえに残念という想いが極まってその想いが表出したためか、最良ゆえにその不甲斐なさに感情を害し突き放す想いで使用されると考えられる。

この解釈の後半は、マイナスの感情性が問題となっている。一方、前半については、なぜ「想いが極まる」とヨルが使用されるのかという点について、議論の余地を残している。本章でも主体に対する好悪が影響する場面について、量的調査を実施している。その分析の折に触れて、上記の解釈について言及していきたい。

3. 検証すべき用法と調査の概要 — 卑語形式ヨルの考察の枠組み —

以上のように、近年の研究によって、卑語形式としてのヨルの分布域や待遇性は徐々に明らかになってきた。また、新たに検証すべき用法上の問題点も浮かび上がってきている。

ここではまず、検証すべき点を整理し、次に調査上の問題について述べたい。

3. 1. 調査項目

ヨルの感情性待遇の性格と、関係性待遇の性格を検証するために下のような文脈を設定し、アンケート調査に臨んだ。

ここでは、2002年11月、12月に実施したアンケート調査のうち、本章で分析対象とする質問項目を取り出し、項目設定の意図について述べる。

まずは、ヨルの関係性待遇の上・下の違いに焦点を当てた5つの文脈を立てた。関係性待遇の性格をより浮かび上がらせるために、これらの文脈では事態評価性、感情性は中立なものとした。

① 後輩場面<関係下向き(後輩)・事態中立・感情中立>

「後輩が図書館に行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言うか。

② 先輩場面<関係上向き(先輩)・事態中立・感情中立>

「先輩は図書館に行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言うか。

③ 先生場面<関係上向き(先生)・事態中立・感情中立>

「先生は図書館に行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言うか。

④ 弟妹場面<関係下向き(弟・妹)・事態中立・感情中立>

→ 身内の関係性に焦点(身内敬語に対する身内卑語はありうるか)

「弟・妹は図書館に行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言うか。

⑤ 犬場面<関係下向き(犬=非人間)・事態中立・感情中立>

「犬が公園のほうに行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言うか。

また、下向きの関係性をもつ動作主体には、「ゴキブリ」のように、動作主体そのものに悪感情がつきまとうものがある。⑥では、ゴキブリは話し手から遠ざかる文脈を設定した。ゴキブリが話し手に向かって飛んでくるというような文脈だと、事態そのものが話し手の感情的マイナス評価を強く喚起するためである。⑥はゴキブリという動作主体そのものの評価に話し手の焦点が当たるような設定である。

⑥ ゴキブリ場面<関係下向き(ゴキブリ=非人間(虫))・事態中立・感情マイナス>

「ゴキブリがあっちに行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言うか。

次に、関係性・事態評価性・感情性ともにマイナスであり、もっともヨル形が出現しやすいよう操作したのが⑦の文脈である。

⑦ 犬噛みつき場面<関係下向き(犬)・事態マイナス・感情マイナス>

「さっき、あその犬を撫でようとしたら私の手を噛んだ。腹が立つなあ!」と親しい友人に言うとき、下線部をどのように言うか。

⑧は、事態評価性・感情性はマイナスであるが、関係性がプラスの文脈である。この項目は2. 2. 2. 2. で問題にした、感情性が関係性にどの程度優先するかを検証する項目である。

⑧ 先生無断休講場面<関係上向き(先生)・事態マイナス・感情マイナス>

「あの先生、予告もせずに今日の講義を休講にした。せっかく来たのに腹が立つなあ！」と親しい友人に言うとき、どのように言うか。

対象への好嫌がプラスで、事態評価性・感情性ともにプラスの文脈は⑨のようなものとした。卑語形式としてのヨルの使用を促す要因はこの場面では存在しない。

⑨ ファンチーム勝利場面<好悪プラス(ファンチーム)・事態プラス・感情プラス>

朝刊のスポーツ欄を見ると、あなたがファンのプロ野球のチームが勝っている。このとき、「おっ、〇〇(ファンのチーム) 勝った」と言うときどのように言うか。

また、ファンのチームであっても、チームへの恒常的な評価がマイナスの場合もありうる。単に、動作主体への好悪やその場での感情性だけでだけでなく、送り手による対象への恒常的評価を変数とした。このような複雑な評価性を有した文脈でのヨルの出現を見るため、⑩を立てた。この設問は、第3章で設定したモデルの「評価段階」における、待遇対象への「評価のあり方」を複雑にしたものである。

⑩ 弱小ファンチーム勝利場面<好悪プラス(ファンのチーム)・事態プラス・感情プラス・恒常的評価マイナス>

あなたがファンのプロ野球チームは、ここ10年ほど下位に低迷しているとする。あなたは半分あきれているがファンはやめられない。そのチームの試合をテレビ中継で見ていたが、今日は勝った。このとき「おっ！ 今日は〇〇(あなたがファンのチーム) 勝った」と言うときどのように言うか。

対象への好悪を嫌いなチームとして設定し、事態評価性・感情性ともに、マイナスの場合は、⑪のように設定した。ここでは、ヨルの出現率が高くなることが予想される。

⑪ 嫌いなチーム勝利場面

<好悪マイナス(嫌いなチーム)・事態マイナス・感情マイナス>

朝刊のスポーツ欄を見ると、あなたが嫌いなプロ野球のチームが勝っている。このとき、「ちえっ、〇〇(あなたが嫌いなチーム) 勝った」と言うときどのように言うか。

次の項目は、プラスの感情性に、中立の感情である「驚き」を加えたものである。「驚き」という感情は、プラスにもマイナスにも傾きにくい。待遇表現としてのプラスの方向性もマイナスの方向性も持たない感情表現的なヨルの性格を、⑩と比較することで検証する。

⑫ ファンチーム意外に勝利場面

＜好悪プラス（ファンのチーム）・事態プラス・感情中立（プラス）＞

あなたがファンのプロ野球チームの試合をテレビ中継で見ている。5回の裏で0－6で負けている。今日はダメだと思い、テレビを切った。翌朝、朝刊を見ると、ファンのチームが逆転して8－6で勝っている。このとき驚いて、「あっ！ ○○（あなたがファンのチーム）勝った」と言うときどのように言うか。

⑬の文脈も、感情性は働いているが、その方向性は中立的な「驚き」に焦点を当てている。この場合、関係上向きという要因が、感情表現としてのヨルの出現を阻止すると予測される。

⑬ 先生受賞場面＜関係上向き（先生）・事態中立・感情中立（驚き）＞

朝刊を見て「あっ！ うちの先生、研究ですごい賞をとった！」と驚いて言うとき、どのように言うか。

⑭は発話の目的が伝達に限られるニュートラルな場面である。関心のないプロ野球チームを動作主体に設定することで、事態や感情性も中立となる。評価や関心の対象外の事物が動作主体になった場合のヨルの出現を考察する。

⑭ 無関心チーム勝利場面＜好悪中立（関心のないチーム）・事態中立・感情中立＞

友人がファンだけど自分は好きでも嫌いでもないプロ野球チームが勝ったことを、その友人に伝えるときどのように言うか。

以上が、分析対象とする文脈である。ここで注意したいのは、事態への評価の方向性が感情の方向性と概ね一致することである³。話し手にとってプラス（マイナス）の評価を与える事態が、話し手のプラス（マイナス）の感情性を喚起しない場面を設定するのは、困難であった。これは本研究で、「関係性待遇」「感情性待遇」のほかに、「事態性待遇」という待遇行動の様式をあえて立てなかった理由でもある。

なお、①～⑧の文脈では、動作主体に悪い印象や嫌いな気持ちがあるかを尋ねている。また、①～⑭の全ての文脈で、ヨルを「言わない」「言えなくない」「言える」かについて選択してもらった。

最近のヨルの用法に関するこれまでの研究のなかには、少人数の詳細な内省によって資料が作成されているものがある（工藤 2001, 2002）。この調査法の大きなメリットは、とくに内省者が言語表現の意味的対立を分析することに長ける研究者の場合、形式の使い分けを様々な文脈で随時検証し、用法を網羅することが可能であるということであろう。通常、見知らぬ人に面接して回答を引き出す方法に比べれば、費用や時間の制約も大いに緩

³ ⑥の「ゴキブリ場面」ではゴキブリという動作主自体がマイナスの感情性をともなって把握されるため、例外である。

和できる。ただ、中井（2002）でも触れられているように、感情性待遇は、「状況や個人のパーソナリティなどに左右される」性格を持つことが予想される。よって、用法の枠組みや、感情・評価など必要な概念を設けた次の段階として、量的な検証が必要となってくる。つまり、個人的用法であるか、地域言語に共有されている用法であるかを確かめなければならない。

3. 2. 調査対象

調査対象⁴は大阪府立大学・近畿大学・帝塚山学院大学の近畿圏に在住する大学生 220 名である。ただし、0～15 歳までの間に近畿外への外住歴が五年以上の学生は分析の対象から外した。これにより、分析対象とした回答者数は 158 名となった。この基準で得られた回答者数は表 1 の通りである。

表 1 回答者の内訳 （単位：人数）

総回答者数 220					
大阪府立大学 163		帝塚山学院大学 38		近畿大学 19	
分析対象回答者の出身地・性別の内訳（分析対象者数 158）					
大阪	89	奈良	19	兵庫北部	2
京都	9	和歌山	10		
滋賀	5	兵庫東部	18	男性	78
三重	2	兵庫西部	4	女性	80

三重県の回答者は名張市と上野市。兵庫県西部は姫路市、三木市、加古川市、相生市出身の回答者を、兵庫県東部は神戸市以东の瀬戸内側の地域を含めた。兵庫県北部は篠山市、豊岡市である。表 1 に上げた地域は中井（2002）でヨル使用地域外とされた大阪の和泉も含め、全ての地域で「犬が手を噛んだ」などの設問で、「カミヨッタ」の回答があり、後輩や犬にはヨルを回答するが先輩や先生には回答しないといった傾向が見られる。このような回答の傾向から、以上の地域全てを分析対象とした。

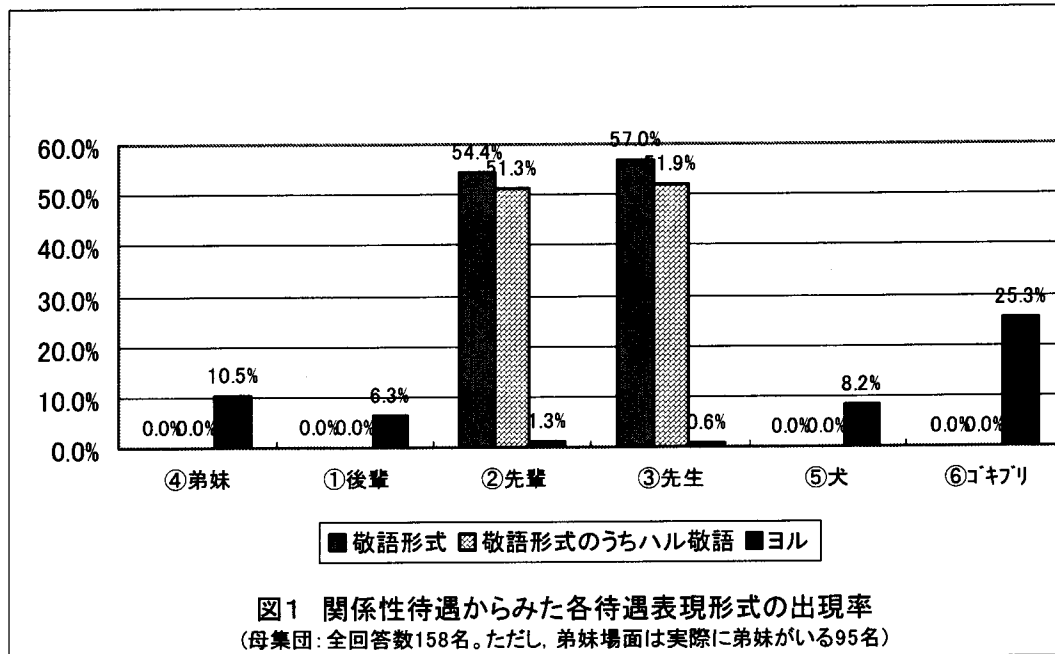
4. ヨルの待遇性の分析

4. 1. 関係性待遇のヨル

3. 1. 1. で述べたように、関係性待遇の性格に注目したのは①～⑤の設定場面である。また、これらの関係性待遇に注目した場面と比較する目的で、⑥の動作主体がゴキブ

⁴ 近畿大学・帝塚山学院大学でのアンケート配布・回収にあたっては、鳥谷善史氏のご協力を賜った。鳥谷氏ならびに、大阪府立大学・近畿大学・帝塚山学院大学の回答者各位に心よりお礼申し上げる。

りである感情性待遇に注目した場面を含め、発話文を回答者が記入する回答（以下、記入回答と呼ぶ）における、ヨルと敬語形式の出現状況を図1にまとめた。



この図から、ヨルは関係性待遇の言語行動の中で用いられるということが明らかである。弟妹や後輩、犬に対してヨルは出現し、先輩や先生に対してはほとんど出現しない。ただし、ヨルは、目上に対する敬語形式（ほとんどはハル敬語）の出現率にくらべて、目下に対するヨルの出現率はきわめて低い。また、ゴキブリという悪感情を抱きやすい対象にヨルの出現率が高いという状況からも、中井（2002）の「人物やモノなどに対して社会的に定まった上下軸の評価よりも、話し手の評価・感情が待遇表現形式を決定する場合に優先される」という主張がヨルの使用にも適用されることを支持するかに見える。

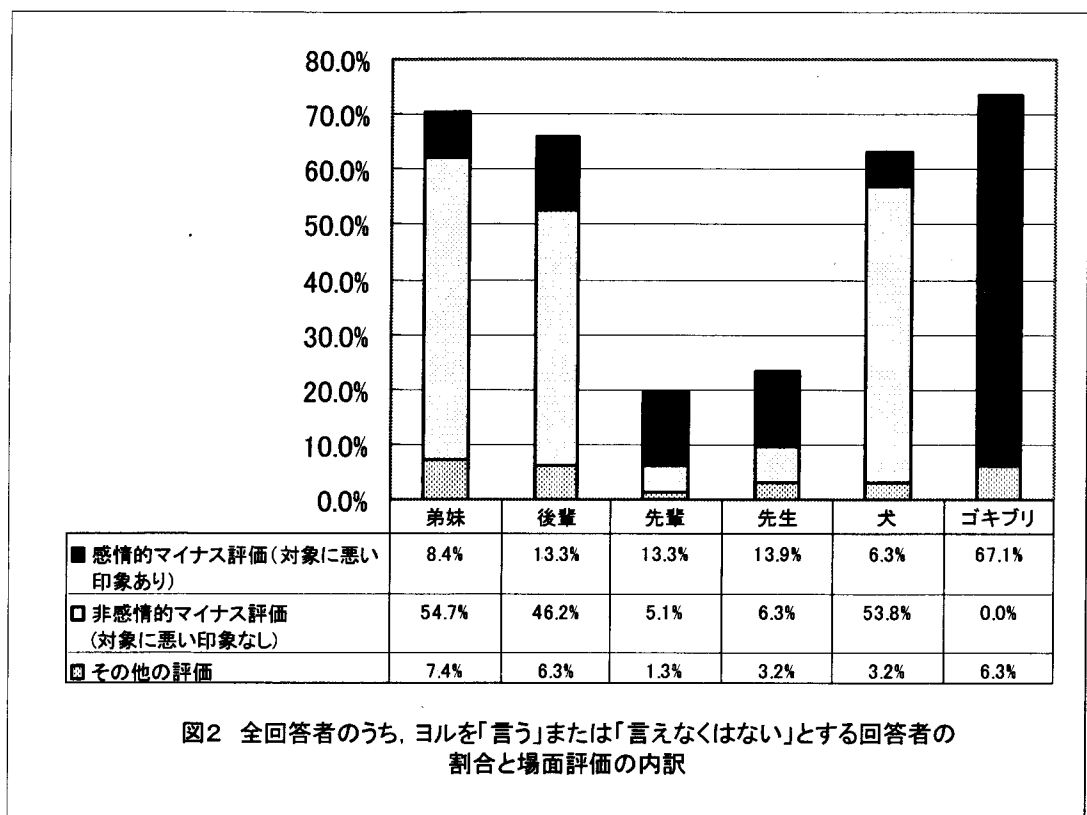
しかし、ここでまだ考慮すべきことがある。それは、敬語形式と卑語形式ヨルの使用の遂行義務性・回避義務性（西尾 2000）の違いである。たとえ発話の現場に待遇対象がいなない第三者待遇であっても、目上に対する敬語形式の不使用は社会的に好ましくない。これにより目上に対する敬語形式は遂行義務性が強くなる。これにともない、目上の人物に対する敬語形式の出現率は高くなる。一方、マイナスの関係性を表示する言語行動では、その関係が表示されなくとも失礼にはならない。このマイナスの関係性待遇の性格は、関係卑語形式の運用の遂行義務性を弱くする。それだけでなく、殊更に待遇対象が目下であるという「マイナス評価」をそのまま表明するという「表現態度」は、尊大さ、品のなさから社会的に好ましくないと受け止められる可能性もある。

このことは、目下に対するヨルの使用に対して回避義務性を持たせることになる。つまり、記入回答で目下に対するヨルの出現率が目上に対する敬語のそれと比べて低いことは、

ヨルの関係待遇性を即座に否定したり、関係性より感情性を優先していると結論づけたりするものではない。ヨルの出現率の低さは、マイナス待遇表現行動そのものの性質が関わっているものと考えられるのである。

この見方は金水（2001a）で提唱された「下位待遇表現使用の原則」と重なるところが大きい⁵。またこの見方は、話し手の事態へのマイナス評価（「評価段階」）と、その評価をいかに表現するかという「表現態度形成段階」とを分離して考える第3章のモデルの応用でもある。

この点を検証するために、使用が義務的ではなく選択的であるヨルを「使っても不適切ではない」かを回答者に尋ねた。各場面で「ヨル」が「言える」か「言えないこともない」かについての集計結果を図2に示す。



グラフの各質問項目での柱の高さは、全回答者（158名・弟妹場面は実際に弟妹がいる95名）のうち、設定された場面でヨルが「言える・言えなくはない」と回答した人数の割合で

⁵ ただし、筆者はこの原則をマイナス待遇表現形式の使用全体に通用させるのは、避けるべきだと考える。マイナス待遇表現の中には、義務的ではないものの、第2章の4. 3. の用例（12）や「犬にえさをやる」といった授受表現の卑語形式など、対象を下位者とする関係表示の行動が高度に慣習化し、回避されことなく用いられる関係卑語の形式が存在するからである。また、蔑みや軽視、怒りといった感情性を契機に用いられる感情卑語については、逆に対人関係を維持するために「回避義務」が生じる。その回避義務を無視してでも感情卑語を用いたいという表現欲求が、感情卑語の運用を決定づける。このため、金水（2001）で提唱された「下位待遇表現使用の原則」を、感情卑語の運用に当てはめることも躊躇される。

ある。そして、柱の中の内わけは、「ヨルを用いるとき対象に悪い印象を持っているかどうか」という表現産出プロセスの評価段階のあり方を示すものである。

今、内訳を無視して柱の高さだけに注目すると、記入回答ではヨルの出現率が10%前後だった「弟妹」「後輩」「犬」に対して、70%前後もの回答者がヨルを「言う・言えなくない」と回答していることが分かる。しかも、そのうちの多くは対象に対して悪い印象（感情的マイナス評価）を持っていないと回答しているのである。

このことから、これらの場面でのヨルは、話題の人物が話し手より目下であることを示し、感情卑語としてはほとんど機能していないことが分かる。ただし、記入回答でのヨルの出現率は低い（図1）。よって、これらの場面での関係卑語としてのヨルの使用は、義務的ではないと考えるべきである。

一方、記入回答でヨルの出現率が比較的高いゴキブリの場面では、ヨル使用の「言う」「言えなくない」とする率は70%を超えるが、そのほとんどがゴキブリに対して感情的マイナス評価（悪い印象）をとまなっている。場面設定の意図どおり、ゴキブリは関係的なマイナスではなく、感情的にマイナスと評価されたことによって、ヨルで待遇されたのである。

なお、目上の人物に対してもヨルが20%前後の出現率を見せるが、その使用は目上の人物に対して、評価段階で感情的マイナス評価がなされているケースが多くを占めている。これらのヨル使用も感情性マイナス待遇と見る事が出来る。

卑語形式ヨルの使用は話し手の事態把握の仕方によって、関係性待遇・感情性待遇のいずれの言語行動にもなりうるのである。つまり、ヨルは、ある場面では対象が目下という関係性のマイナスを示すことができるし、別の場面ではマイナスの感情を表出することができるのである。筆者は、関係性・感情性のいずれかが優先されるものではなく、ヨルは場面によって待遇の性質を変化させると考えたい。このような用法の卑語形式は、共通語や他の方言においてもこれまでに全く報告がないものである。

また、両図において弟妹に対するヨルの出現率がわずかに高い。これは身内の人間に対しては、関係性のマイナス待遇表現行動が謙譲表現的な役割を果たし、他の場面に比べて許容されやすいということが理由として考えられる。

4. 2. 感情性待遇の言語行動におけるヨルの使用

前節では、主に関係性待遇の言語行動を検証する場面設定での調査結果を考察した。本節では、感情性待遇の言語行動を検証する場面設定でのヨルの使用について、調査結果の分析を行う。

図2の「弟妹」「後輩」「犬」を待遇対象とした場面では、10%前後は対象を感情的にマイナスに評価しており、感情性待遇としてのヨルの使用が一部認められる。待遇対象が「図書館に行く」や「公園に行く」という中立的な事態を質問項目に設定しても、待遇対象への感情的なマイナス評価を調査者は完全にはコントロールできないのである。同様のこと

は、感情的マイナス評価を喚起する質問項目にも言える。感情的マイナス評価を喚起する場面設定であっても、その評価を回答者が抱かない場合がある。

この点を踏まえ、感情性待遇の言語行動を喚起する質問項目の分析に入りたい。

4. 2. 1. マイナスの感情性待遇で使用されるヨル

マイナスの感情性待遇を喚起する設定場面のうち、ここでは、「⑥ゴキブリ場面」「⑦犬噛みつき場面」「⑧先生無断休講場面」を取り上げる。また、関係性待遇でのヨル使用と比較するため「③先生場面（先生が図書館に行った）」も参照する。これらの場面でのヨルが記入された回答・「言う・言えなくない」を選択した回答の出現率は、表2の通りである。

表2 各場面でのヨルの出現率

場面	⑥ゴキブリ	⑦犬噛みつき	⑧先生無断休講	③先生・図書館
ヨルの出現率A	25.3%	44.3%	34.8%	0.6%
ヨルの出現率B	73.4%	81.6%	74.1%	23.4%

A：記入回答でのヨルの出現率

B：ヨルを「言う」「言えなくない」とする回答の出現率

⑥～⑧の場面は、マイナスの感情性待遇の言語行動を話し手に喚起するよう場面設定をしている。表2で第一に注目すべきは、ヨルの出現率A（記入回答）である。ヨル出現率Bは図2で示した「弟妹」「後輩」「犬」の場面でのヨルの出現率と大差はない。これに対してヨルの出現率A（記入回答）でのヨルの出現率は、「後輩」「弟妹」「犬」といった場面に比べて、数倍高くなっている。すなわち「ゴキブリ」「犬噛みつき」「先生無断休講」の場面では、ヨルの使用に対する遂行義務性が希薄な中でも、待遇表現形式としてヨルが用いられやすくなるのである。

また、大学の先生が話題の人物である2つの場面でのヨルの出現率は、「③先生」場面が0.6%であるのに対して、感情性待遇の「⑧先生無断休講」場面では34.8%と急激に上昇する。話題の人物が目上の「先生」であっても、その出現率は高くなる点は、2.2.2.2.で述べた、対人関係よりも感情表出の欲求が優先する感情性待遇の特徴だといえる。

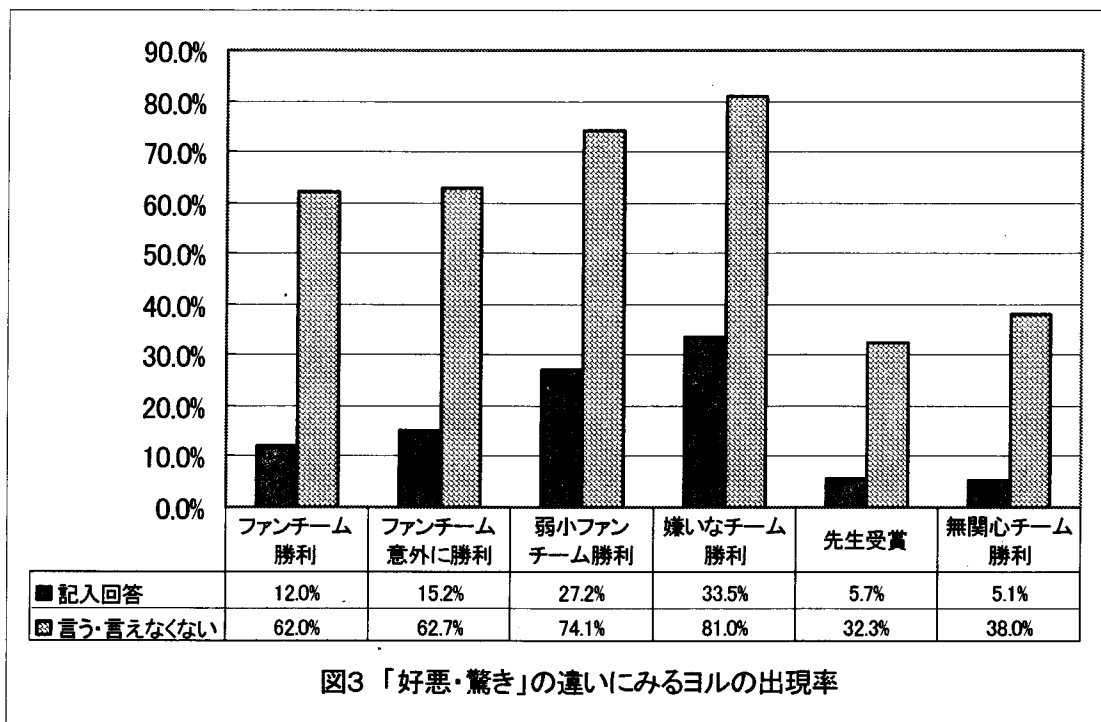
4. 2. 2. 待遇対象への好悪と中立的感情性

次に待遇対象への好悪を変数として考察を行うが、ここでは好悪を感情性の一種として考える。ただし、好きか嫌いかは事態に接した時点で決まるものではなく、その価値判断の基準は、対象と接する前から既に話し手に準備されているもので「態度 (attitude)」といってよい。このように感情の中には、予め準備された判断基準から生起するものと、接した事態によってその場で生じるものとがある。中井（2002）では、この点について「最

屑にしている対象（最員のマラソン選手・嫌いなマラソン選手）」と「事態の好ましき（その選手が勝ったか負けたか）」がヨルの使用要因となりうるということが鋭く指摘されているが、前者は「予め準備されていた判断基準から生じる感情」、後者は「接した事態によってその場で生じる感情」に相当する。この点についても、本研究では量的な観点から検証したい。

4. 2. 2. 1. マイナス評価によるヨルの出現

表2と同様、ここでも場面ごとにヨルが含まれる記入回答とヨルを「言う・言えなくない」とする回答の出現率を図3に示す。



まず、ヨルが卑語形式であることから容易に予想された結果として、「⑪嫌いなチーム勝利場面」では、記入回答でのヨルの出現率、ヨルを「言う・言えなくない」とする回答の出現率が図3の中でもっとも高い。この場面では、待遇対象に対して「嫌い」という感情的マイナス評価が与えられ、かつ、そのチームが勝利するということへの腹立たしさがあり、二重に感情性のマイナス評価がなされる。このことがヨルの出現率を高めていると考えられる。この場面は、マイナス評価を与える要因が明らかであり、ヨルの出現に対する説明が容易な場面である。

しかし、「⑨ファンチーム勝利場面」「⑭無関心チーム勝利場面」といった場面では、マイナスに評価する場面要素がないにもかかわらず、ヨルは無視できない出現率を示している。これは何故か。また、感情的にプラスの評価を喚起する場面設定である「⑨ファンチーム勝利場面」と「⑩弱小ファンチーム勝利場面」、 「⑫ファンチーム意外に勝利場面」に

においてもヨルは多く出現する。

こういった点が、ヨルの表現性の複雑さを示している。これらの点について、次に考察を行う。

4. 2. 2. 2. 「驚き」という中立的感情とヨルの出現

ファンチームが勝利するという場面設定に、意外性が加わった場面が、「⑩弱小ファンチーム勝利場面」「⑫ファンチーム意外に勝利場面」である。これらの場面では「⑨ファンチーム勝利場面」に比べて、ヨルの出現率は記入回答・「言う・言えなくない」とする回答ともに、順に微増する傾向にある。つまり、「驚き」という中立的な感情性が、ヨルの選択にかすかな影響を与えている。ただし、「⑨弱小ファンチーム勝利場面」では、チームが弱小であることによって生じるマイナス評価も、ヨルの出現率を高めているものと見られる。待遇対象に対する評価は、複合的な観点からなされ、待遇表現形式の選択に影響を与えることがわかる。

また、待遇対象が「先生」という目上である「⑬先生受賞場面」では、図3中の他の場面に比べてヨルの出現率は低い。ヨルを単なる卑語形式と考えると、待遇対象が「目上」であることも、「その先生が賞をもらうという事態への評価」も、ヨルの出現を抑制する要因として働くと考えるのが妥当であろう。よって、「⑬先生受賞場面」のほうがヨルの出現を抑制する要因は多い。しかしながら、「⑬先生場面」と「⑬先生受賞場面」とを比較すると、「⑬先生受賞場面」のほうがヨルの出現率は高くなる(表3)。

表3 「驚き」の有無によるヨルの出現率の違い(対象=先生)

	先生場面	先生受賞場面
ヨル出現率A	0.6%	5.7%
ヨル出現率B	23.4%	32.3%

A: 記入回答でのヨルの出現率

B: ヨルを「言う」「言えなくない」とする回答の出現率

この結果から、「驚き」という中立的な感情性待遇においても、ヨルが選択される可能性は高くなることが再び支持される。事態を報告するような客観的な描写ではなく、モーダルな発話のなかでヨルの使用は促進されるのである。このことは、「⑨ファンチーム勝利場面」で、ヨルの出現率が高いことをも説明しうる。ヨルはマイナスの待遇の方向性をもつ以前に、方向性に関わらない感情性を表現しうるのである。

よって、「⑨ファンチーム勝利場面」でヨルの出現率が高いのも、嬉しさというプラスの感情性が前面に出ているのではなく、勝利という結果の事態把握が感情的であるために出現率が高くなったと考えられる。つまり、「⑨ファンチーム勝利場面」でのヨルは、「プラス」の感情性を表現するものではない。感情的・非感情的という事態把握性の対立の中で、

感情的な事態把握を表現するためにヨルは用いられるのである。「⑭無関心チーム勝利場面」で、ヨルの出現率が図3の他の場面と比べてかなり低いのもそのためであると考えられる。

4. 2. 2. 3. ヨルの話体的性格と感情性

ただ、「⑭無関心チーム勝利場面」においても、ヨルの出現率は0%ではない。待遇対象が上位であることを表す「②先輩」「③先生」場面でのヨルの記入回答は0%に近いし、「言う・言えなくない」とする回答も、非感情的な評価では5~6%に過ぎない。これらに比べると図3の「⑭無関心チーム勝利場面」でのヨルの出現率は決して無視できるものではない。

このような結果が生じるのは、ヨルのスタイル（話体 真田 2003）の低さが原因であると考えられる。「無関心なチーム」であっても、この場面での話題は、プロ野球という娯楽である。「①後輩」「②先輩」「③先生」場面のよう、事態を客観的に報告するような場面ではない。娯楽に関する話題では、淡々と聞き手に説明するよりも、感情移入した発話になりやすい。

そこで、スタイルの低いヨルを用い、その *covert prestige* を利用して発話に面白みや情意性を持たせているのものと解釈する。ヨルの使用がニュートラルなスタイルからのギャップを生み、そこに何らかの情意性が生まれるのである。

この解釈は、「⑨ファンチーム勝利場面」でヨルの出現率が高い理由についての解釈とも連動している。すなわち、感情的にプラスの喜びなどを表現するためには、中立的なスタイルでは表現欲求が満たされないため、ヨルの *covert prestige* を利用していると考えられる。

これに対して、目下に「～君」と言ったり、「お疲れ様」でなく「ご苦労様」と言ったりする場合は、それぞれはマイナス待遇表現でありながら、スタイルは低いとはいえない。一方、ヨルのスタイルは決して高いものではない。フォーマルな場面でのヨルの使用は、当該フィールド出身である筆者にとっても適切であるとは思えない。

このようにヨルの話体的性格は、何故ヨルが、方向性を問題にしない感情性を表現するかをも説明しているのである。

4. 2. 2. 4. ヨルの使用の男女差

ヨルの話体が低いことの傍証として、ヨルの使用に男女差があることをあげることができる。女性が敬語や標準語など *overt prestige* を持つことばを好んで用いるのに対して、男性はその傾向が弱いことは、各種調査で実証されている。この点を踏まえると、本調査の結果で、女性によるヨルの回答は全ての場面で男性より低い（表4）ことは、ヨルのスタイルの低さを示唆すると考えられる。

さらに、ヨルのスタイルの低さは、同一発話文の中に異なるスタイルに属する語が共起しにくいことから説明できる。「飯食いにイキヨッタ」という発話は可能であるが、「お食事にイキヨッタ」という発話は許容しがたい。これは、一つの発話文の中で、「お食事」という高いスタイルに属する表現と、「イキヨッタ」というスタイルの低い表現とが共起していることが原因であると考えられる。

表4 各場面でヨルを「言う・言えなくない」とする回答の出現率の男女差

場面	男性	女性
①後輩	82.1%	50.0%
②先輩	25.6%	13.8%
③先生	33.3%	13.8%
④弟妹	83.7%	56.5%
⑤犬	78.2%	48.8%
⑥ゴキブリ	78.2%	68.8%
⑦犬噛みつき	91.0%	72.5%
⑧先生無断休講	85.9%	62.5%
⑨ファンチーム勝利	76.9%	47.5%
⑩弱小ファンチーム勝利	87.2%	61.3%
⑪嫌いなチーム勝利	89.7%	72.5%
⑫ファンチーム意外に勝利	76.9%	48.8%
⑬先生受賞	44.9%	20.0%
⑭無関心チーム勝利	37.2%	26.3%

5. ヨルの複雑な表現性

アンケート調査の結果は、卑語形式ヨルの様々な表現性を示した。ここでは、分析と考察の結果から明らかになったヨルの表現性について整理する。

まず、ヨルの表現性について、調査結果の分析から次のような知見を得るに至った。

- a. ヨルは下向きの関係性を表す関係卑語としての性格を持っている。しかし、マイナスの関係性を表すためにヨルの使用は義務的ではない。
- b. 同時に、ヨルは下向きの感情性を表す感情卑語としての性格も持っている。ヨルが関係卑語になるか、感情卑語になるかは話し手の事態把握によって変わる。
- c. 「驚き」のような中立的感情を表現する場合にも、ヨルの使用は促進される。
- d. ヨルの話体は低く、covert prestige を持つ。これによって、ヨルの使用が発話に情意

性を加える。

これら a～d は、いずれもヨルという卑語形式の性格として捨象しがたいものである。しかし、ヨルが待遇対象との関係を表示する関係卑語であると同時に、待遇対象と関係性に優先して感情を表す感情卑語でもあるということは、一見、矛盾しているように思われる。

本章の主旨からはややそれるが、この状況について包括的な説明を与えるには、通時的な観点を導入せざるを得ない。すなわち、ある時期に、ヨルに d のような話体の低下が生じたとき、感情卑語としての性格が備わった。そして、感情卑語というマイナス待遇表現としての用法が定着したのち（あるいは同時に）、マイナスの方向性が待遇対象との関係性を表すものとしても適用された。

これらのいずれの段階もが完全に消滅することなく、現在の関西方言に溶け込んでいるといった仮説を立てたくなる。この仮説が正しければ、関西のなかでも、地域によって上述のどの段階にあるかが異なるという状況が生じるだろう。また、現在では、助動詞の待遇表現形式が関係卑語になりにくいという日本語全体の傾向から、関係卑語としてのヨルは定着せずに、再度、感情卑語としての色合いを強めているかもしれない。

実際、宮治（1987）の調査結果は、現代の関西方言では、ヨルが関係卑語として用いられやすい地域と用いられにくい地域とがあることを示している（表5）。

表5 高校生への調査にみる関係卑語としてのヨル使用の地域差

	回答者総数	近所の年下	弟妹
滋賀	256	55 (21.5%)	95 (37.1%)
京都	107	14 (13.1%)	20 (18.7%)
奈良	133	12 (9.0%)	22 (16.5%)
大阪	248	9 (3.7%)	10 (4.0%)

素材待遇の用法。「近所の年下」「弟妹」は話題の人物。（宮治 1987 より作表）

今後、これらの地域でヨルの卑語性がどのように変化していくかについての調査・観察（井上 1993 など）や、文献上に見る用法の変遷に関する議論（柳田 1990, 1991, 金水 2001a, b など）を考慮することで、ヨルの用法についてのさらなる包括的な説明が可能になるだろう。

6. おわりに

本章では、言語行動論的な観点からヨルという卑語形式の表現性を分析した。特に表現産出プロセスのうち、**評価段階**における事態把握のあり方がヨルの分析では重要であった。「対象への悪い印象」有無、「好悪」「驚き」など、話し手の事態把握がヨルの選択に大きく影響していることがわかった。

また、ヨルの記入回答での出現率が低いことは、表現産出プロセスの**扱いの段階**におけ

るマイナス待遇特有の事情によるものと考えられた。すなわち、関係性のマイナス待遇表現形式の使用は、遂行義務性が希薄であり、回避義務性も存在しうるため、殊更に待遇対象を下げる表現上の扱いをしなくてもよい。このような事情により、ヨルを「言える」「言えない」という潜在的な使用を示す回答の分析に、本章では大きな意義を与えた。そして、その分析結果はヨルの表現性の解明に役立ったといつてよいであろう。ただし、このような事情はマイナス待遇表現全体に適用できるものではない。この点については脚注5を参照されたい。

さらに、関係性待遇と感情性待遇といった待遇表現行動のタイプもまた、ヨルの表現性を説明するのに有効であったといえよう。ヨルという卑語形式は小さな単位の言語形式であるが、表現産出のプロセスを考慮することにより、その表現性を明らかにすることが出来た。

また、5. では、卑語形式ヨルの用法の地域差や文献研究とのかかわりについても触れた。これらの分野への言語行動論的観点の導入は、今後の大きな課題である。

参考文献

- 井上文子（1993）「関西中央部における「オル」「～トル」卑語化のメカニズム」『阪大日本語研究』5 大阪大学文学部
- 井上文子（1998）「卑語化形式へのメカニズム」『日本語方言アスペクトの動態』秋山書店
- 金水 敏（2001a）「平安時代の「をり」再考 — 卑語性の検討を中心に — 」『古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究』平成 12 年度 科学研究費特定研究（A）（2）研究成果報告書（代表：金水敏）
- 金水 敏（2001b）「文文化と意味—「～おる（よる）」論のために」『古代・中世の漢文訓読文資料の文体史的研究』平成 12 年度 科学研究費特定研究（A）（2）研究成果報告書（代表：金水敏）
- 工藤真由美（2001）『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』平成 11 年度～12 年度 科学研究費基盤研究（B）（1）研究成果報告書（代表：工藤真由美）
- 工藤真由美（2002）「京阪奈を中心とする地域のヨル・トル形式調査の目的・方法と結果の概要」『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究』平成 13 年度 科学研究費基盤研究（B）（1）（代表：工藤真由美）
- 真田信治（2003）「対談 A T O K 16 の方言対応は史上初の「ことばの民営化」である」『A S C I I』27-4
- 中井精一（1986）「奈良盆地中・南部における待遇表現形式の分布について」『第 43 回 日本方言研究会 発表原稿集』日本方言研究会
- 中井精一（1992）「関西共通語化の現状」『阪大日本語研究』4 大阪大学文学部
- 中井精一（2002）「西日本言語域における畿内型待遇表現の特質」『社会言語科学』5-1 社会言語科学会
- 西尾純二（2000）「言語行動における遂行義務と回避義務」『阪大日本語研究』12 大阪大学大学院 文学研究科 日本語学講座
- 宮治弘明（1987）「近畿方言における待遇表現運用上の一特質」『国語学』151 国語学会
- 村上敬一（2001）「神戸市とその周辺域における若年層のアスペクトについて」『方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究』平成 11 年度～12 年度 科学研究費基盤研究（B）（1）研究成果報告書（代表：工藤真由美）
- 柳田征司（1990）「近代後の進行態・已然態表現」『近代語研究』8 武蔵野書院
- 柳田征司（1991）『室町時代語資料による基本語詞の研究』武蔵野書院

第5章

卑語形式選択における規範意識の属性差

1. はじめに

例えば、送り手が相手から何らかの非礼を受けたとき、相手やその非礼に対してどの程度のマイナス評価を抱き、そしてどの程度までそのマイナス評価を表明してよいと考えるだろうか。それは、非礼の種類、話し手の属性、非礼の仕手と受け手との人間関係などの場面要素によって異なってくるであろう。

非礼の種類、話し手の性別や年齢、非礼の仕手との人間関係といった要素が絡みあって、場面に応じたマイナス待遇表現形式は選択される。その選択には、対人関係を維持するために、「あるマイナス待遇表現行動は許されない・行ってはいけない」という、言語社会からの規制（浜田1988）が関与するだろう。そして、その社会的な規制は、行動主体の規範として働く。本章では、このような行動規範について、卑語形式の選択を分析対象とし、その世代差・性差といった属性差についての知見を可能な限り得ることを目的とする。

また、場面の要素が変われば、マイナス待遇表現行動の規制のあり方も変化すると考えられる。そういった場面ごとの規制のあり方と、規制に応じてなされる表現の選択を明らかにすることで、マイナス待遇表現行動の特徴が明らかになるであろう。本章では、話し手が相手から非礼を受ける場面設定をしたアンケート調査の結果から、マイナス待遇表現行動の規範意識の属性差について考察する。

2. 問題のありか

マイナス待遇表現行動は相手や表現対象を下向きに待遇するわけであるから、失礼になったり相手を怒らせたりして争いの原因になる場合がある。これは、とくにマイナスの感情性待遇の言語行動においていえることである。このことから、マイナス待遇表現行動は相手との対立を生む「反社会的」な行動となる可能性を持っているといえる。ここに、マイナス待遇表現行動に規制が生じる原因がある。マイナス待遇表現行動には、社会的な秩序を維持するための規制が働くのである。たとえば、次のような会話を例にしてみる。

先生：A君、最近元気がないね。

学生A：（1）お気遣いありがとうございます。

（2）へえ、気にしてくれるんだあ。

（3）うるせえ。大きなお世話だ。＜ぶっきらぼうな表情で＞

多くの学校社会においては、学生Aの発話としては(1)が最も適切であろう。これに対して(2)や(3)は、先生に対しては「言うてはいけない」こととして認識されることが多い。(2)のような言語形式の運用上の不適切さや、(3)のように言語形式だけでなく発話内容までもが不適切であることは、話し手のマイナス評価の表明でなければ、社会言語能力(渋谷1992)の欠如とみなされることになるだろう。

ところで、(1)が適切で(2)(3)が不適切としたが、これは筆者が一般常識に照らして行った判断である。つまり、筆者が推測した日本語社会の言語行動規範である。

言語行動のこのようなマクロな社会的規範と、個人の言語行動の規範とは必ずしも一致するものではない。(2)の発話では学生Aがマイナス評価をもっていない場合も考えられる。学生Aにとって(2)の発話が、先生へのマイナス評価を表明するものでないならば、(2)が一般常識的に不適切であっても、これをマイナス待遇表現行動の発話と見なすべきではない。(2)がマイナス待遇表現行動であるかどうかは、話し手の事態評価と評価表出のあり方といった待遇意識によって決まる。つまり、(2)がマイナス待遇表現となるかどうかについて、一般社会的規範と学生Aの規範とは異なる場合がある。

では、実際のマイナス待遇表現行動における規範意識とはいかなるものか。この点を明らかにするために、本章では、特定地域の異なる世代・性別を対象に行ったアンケート調査から考察を行う。

また、丁寧に待遇するプラスの待遇表現行動とマイナスの待遇表現行動における言語行動規範は、果たして全く反対のベクトルを持つ表裏のものだといえるだろうか。この点の解明も、待遇表現行動という言語行動の本質的な理解に関わる本章の課題である。

3. 調査の概要

これまでの研究で、言語主体が事態をどのように待遇しようとするか、という待遇意識を分析したものに、江川(1990)がある。江川氏は「場面において人々が自分のことばづかいにどの程度気配りを行っているかという意識」を「場面接触態度」と称した。そして「どの程度ことばづかいに気をつけるか」を5段階に分けて点数化し、それを「接触態度の丁寧度」として処理している。このような調査法を参考にした上で、下のような場面設定を施した質問票を作成した。

この場面設定において、どういう言語形式を選択するか、要求表現の述語部分を次の選択肢の中から選んでもらった。

本調査では、第3章で仮設した話し手の事態評価段階の様相を把握するために、下の非礼場面に対して、内心ではどの程度の怒りを抱くかについて5段階評価で尋ねた。次に表現態度形成段階の様相を把握するために、下の場面で「どの程度攻撃的な口調になるか」についても5段階評価で尋ねている。

このような表現産出のプロセスには、「話し手の心理の内部の動きをさしたものであり、容易には実証しがたい」(杉戸1983)と指摘されるところである。そこで、無理なく内省

<場面設定>

____さんが道を聞くために、あなたのところに地図をもって来ました。あなたは一生懸命____さんのために道を探していますが、____さんは他の人と笑ってしゃべっています。道を見つけたので、____さんにこちらを見るようにいうときどのように言いますか。

____には具体的に想定してもらった聞き手（上下関係×親疎関係の6人）が入る。

<選択肢>

1. ミー 2. ミーヤ 3. ミーヨ 4. ミレ 5. ミヨ 6. ミロ 7. ミリ
7. ミテ 9. ミンカ（一） 10. ミナハレ 11. ミナハレヤ 12. ミテクダサイ
13. ゴランクダサイ
その他（自由記述）

あなたは内心怒っていますか

- 5p かなり怒っている
4p 怒っている
3p 少し怒っている
2p ほんの少し怒っている
1p 怒ってはいない

それは攻撃的な口調ですか

- 5p かなり攻撃的な口調だ
4p 攻撃的な口調だ
3p 少し攻撃的な口調だ
2p ほんの少し攻撃的な口調だ
1p 攻撃的な口調ではない

ができて、かつ、表現行動のプロセスにおいて指標となる心理状態の一側面を聞き出す。さらに、計量的な処理を施すことで属性論的に共通性をもった傾向を抽出する、という点に配慮し、上のように「内心の怒り」「攻撃的口調」を調査項目として設けた。

なお、別に行った20名程度への面接調査から、インフォーマントが「口調」という用語をどのように捉えているかを聞いている。その結果、インフォーマントは「口調」を「声の大きさ・はやす・リズム」などの超分節的要素、「皮肉な言い方かどうか」などの表現法や「敬語・ことばのきれいさ・ことばの汚さ」などの言語形式に関するものなど、いずれも表現態度を顕著に表す言語事象として認識していることを確認しておく。

表現選択の段階としては、上述のように、主に要求表現の述語部分を分析項目として取り上げている。上記の事態評価・表現態度の表現形式選択への影響は多種多様である。要求表現の述語部分は取りうる言語形式が多様であり、質問に回答する際にも多様な選択肢を与えることになる。表現態度の多様性が表現選択に与える影響を見るためには、要求表現の述語部分の分析は好材料であるといえよう。

以上のように、アンケート内容は、第3章で仮設した表現産出プロセスを考慮して作成されている。インフォーマントの属性は若年層（中学生・高校生）の男女と実年層（30代～50代）の男女である。調査票の配布は筆者がよく知る奈良県内の学習塾に依頼し、塾職員、

塾生とその父母から回答を得た。人数は若年層77名（男32，女45名），実年層70名（男29，女41名）の総計147名である。

4. 分析と解釈

4. 1. 卑語形式の出現状況

4. 1. 1 言語形式の分類

まず，選択肢・自由回答で表れた形式を大分類として敬語・中間・卑語とし，表1のように記号化した。敬語形式を用いているが，形式の意味として強要度が高いもの（ミナハレ・ミナサイなど）は中間形式に含めている。なお，回答語形がぞんざいであるという判断は，聞き手への自由拘束性，攻撃性，軽視する態度をもって用いられる，という当該地域出身の筆者の内省によった。

丁寧形式には白丸系統，中間形式には白角系統，卑語形式には黒系統の記号を与えている。

表1 回答形式の分類

	語例	記号
敬語形式	ゴランクダサイ・ミテイタダケマスカ・ミテイタダケマセンカなど。待遇度の高い敬語形式。	◎
	ミテクダサイ・ミテクダサラナイなど。敬語形式。	○
	ココデスヨ・ワカリマシタヨなど要求の意図への理解をコンテキストに依拠させ，かつ敬語形式を含む回答。	§
	その他，敬語形式を含む回答。モー イーンデスカなど。	↑
中間形式	ミー	◇
	ミテ・ミテチョーダイ・ミテミ	△
	ミナハレ類	#
	ミナサイ	*
卑語形式	卑罵形式。自由記述回答の中で回答された「アホ」「ボケ」「ムカツク」などの感情卑語。その他「コロスゾ」などの暴力的脅迫を含む。	★
	ミンカ（一）・ミヤンカ類	▼
	ミロ・ミレ・ミヨなど命令形式	■

これらの形式に終助詞ヨがつく回答語形には，記号の上に終助詞をふる。例えば，「ミロヨ」は「^ヨ■」となる。

4. 1. 2 全体的な傾向

これらの分類・記号化にしたがって、聞き手の違いによる表現形式の出現状況を全て整理したものを図1～図4に示す。これらの図は、回答された待遇表現形式の出現状況を関係性待遇の観点から整理したものである。なお、場面ごとに全体数が異なっているのは、無効回答があるためである。

図からは、若年層の男女、実年層の男性の場合、目下の関係から、目上の関係になるにしたがって、卑語形式の出現数が減少していくことが分かる。これらの属性では、上下関係によって卑語形式の出現状況が変化していることが分かる。

この使い分けは、目上に対しては卑語形式は使いにくいという意味において、卑語形式の関係性待遇としての消極的な性質を示している。消極的とするのは、目上にマイナス待遇表現形式である卑語形式が出現しにくいのは、目上には丁寧に話すべきであるというプラス待遇表現行動の規範が主要因となっているためだと考えられるからである。このことは、敬語形式が「目上に対して使うべき」言語形式であるのに対して、卑語形式の運用は「目上に対して使うべきでない」という、いわば敬語形式と「逆」の性格を示しており、マイナス待遇表現行動の常識的な特徴であるといえる。また、女性は卑語形式の使用そのものが少ない。この点も、敬語形式の運用が女性に多いこととは反対の傾向である。

4. 1. 3 属性別の出現状況

全場面の全回答における卑語形式と、その中の卑罵形式の出現率の順位は、次のようになる。

卑語形式 若年男 (41.5%) > 実年男 (22.0%) > 若年女 (12.2%) > 実年女 (4.1%)
うち卑罵形式 若年男 (5.3%) > 若年女 (1.2%) > 実年男女 (0.0%)
 小数点第2位以下四捨五入

卑語形式の運用に関わる話者の属性は、1位と2位とが男性であり、3位と4位とが女性である。女性よりも男性の卑語形式の出現率が高い。また、同じ性別内での世代差をみれば、男性・女性とも若年層の卑語形式の出現率が実年層のそれを上回る。これらの結果から卑語形式の出現率には世代差より性差が強く関わっていることが分かる。

いっぽう、卑罵形式の出現率に目を転じると、実年層では皆無であり、若年層では男性が5.3%、女性が1.2%となり、性差よりも世代差が出現率に影響を与えているようである。また、卑罵形式の出現率が極めて低いことは、これらの形式に対する運用規制の厳しさ、とりわけ実年層における規制の強さを示している。

ぞんざいな形式の中でも、卑罵形式は命令形などの使用とは、社会言語学的には異なる性格をもっていることになる。

[illegible]

図1 若年層男性

[illegible]

圖 2 若年層女性

親	上	# # ◊ △ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ §
	同	▼ ▼ ■ ■ ■ ■ # ◊ ◊ ◊ ◊ ◊ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △ △
	下	▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ▼ ■ ■ ■ ■ ◊ ◊ ◊ ◊ ◊ △ △ △ △ △ △ △ △ §
疎	上	▼ ■ # # ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ⊙ § §
	同	■ ■ ■ ■ ■ # ◊ ◊ ◊ ◊ ◊ △ △ △ △ △ △ △ △ ◊ ○ ○ ○ ○ ○
	下	▼ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ◊ ◊ ◊ ◊ ◊ ◊ ◊ ◊ ◊ ◊ ◊ △ △ △ △ △ △ △

図3 実年層男性

親	上	# ^サ ◇△△△△△○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○ [*] ◎◎◎◎◎◎\$
	同	▼# ^{ヨ ヨ ヨ ヨ ヨ ヨ ヨ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ} ◇◇◇◇◇◇◇△△△△△△△△△△ [*] ◎\$ \$
	下	▼▼■ ^{ヨ ヨ ヨ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ} ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇△△△△△△△△△△ [*] △△○○○
疎	上	■#△○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○◎◎◎◎◎◎↑↑
	同	■# ^{ヨ ヨ ヤ} ◇◇△△△△△△△△△△△△△△ [*] △○○○○○○○○○○○○○○○○○○\$ \$
	下	■■▼* ^{ヨ ヨ ヨ ヨ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ ヤ} ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇△△△△△△△△△△ [*] △○○○○○○○

圖 4 実年層女性

表2 プラス待遇表現とマイナス待遇表現との対比

プラス待遇表現	マイナス待遇表現
目上に用いられやすい	目上に用いられにくい
女性が丁寧な形式を用いやすい	男性がぞんざいな形式を用いやすい
敬語は若年層より実年層が多用する	卑罵形式と呼ばれる、感情性が強い感情卑語は実年層より若年層が多用する

これらの性質をプラス待遇表現と対比させたのが表2であり、プラス待遇表現とマイナス待遇表現の運用が、逆の方向性を持っていることを示す。

これらの分析結果には、言語行動論的に検証すべき問題点が残されている。表2は表現形式の選択に関する対比であって、表現産出のプロセスを踏まえた対比ではない。表現産出プロセスに注目すると、まず第1に、「マイナス評価・扱いの特徴」と「卑語形式の選択」とが相関関係にあるかどうかの問題となる。プラス待遇表現行動では、相手を目上とプラス評価すれば敬語形式が出現する。同様の評価と形式選択との相関関係がマイナス待遇表現の選択にも存在するであろうか。第2の問題点は、卑語形式の出現率の属性差をどのように解釈すればよいかということである。

卑語形式の出現率に属性差がでる理由としては、次のような3つの仮説を立てることができよう。

仮説1：属性ごとにぞんざいな「扱い」をする（しない）傾向が異なるため、卑語形式が多く（少なく）なる。

仮説2：卑語形式使用における規制のあり方が話者の属性ごとに異なるため、卑語形式の出現率に差が生じる。

仮説3：卑語形式以外の要素によってマイナス評価を表明するため、出現率に差が生じる。

4. 2. 卑語形式出現の属性差を生む要因

上の2つの問題点と、3つの仮説を検証するためには、攻撃的口調の程度別に回答される語形を分析することが一つの手段となる。ここでは、典型的な分布として、疎の目下場面の回答分布状況（図5～図8）と攻撃口調の点数の平均値を以下に示す（表3）。これらの図表から前節で提示した問題点と仮説の検証を行う。

4. 2. 1. マイナス評価・扱いの特徴と卑語形式選択の相関関係

まず、第1の問題点、「マイナス評価・扱いの特徴」と「卑語形式の選択」との相関関係について検討する。図5～図7を見るとマイナスに扱う程度（ここでは攻撃的口調の程度）

疎遠な目下に対する攻撃的な口調の程度と言語形式の出現（図5～図8）

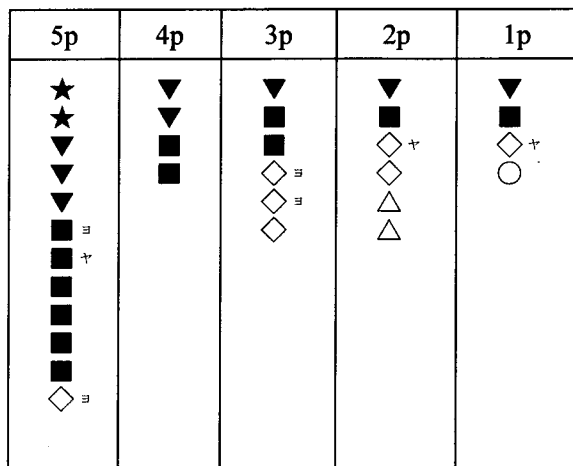


図5 若年層男性

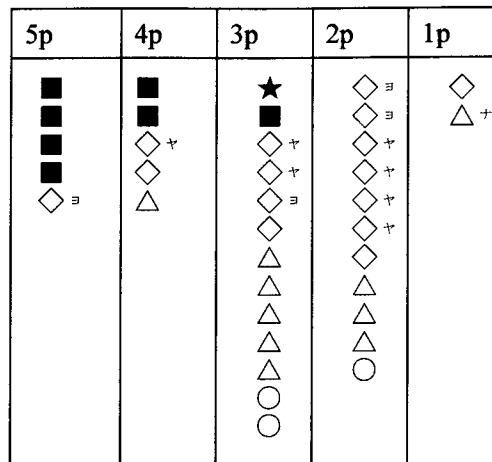


図6 若年層女性

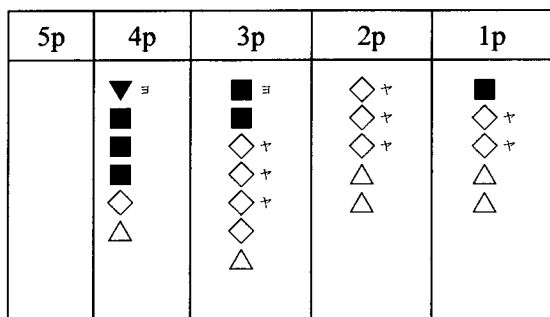


図7 実年層男性

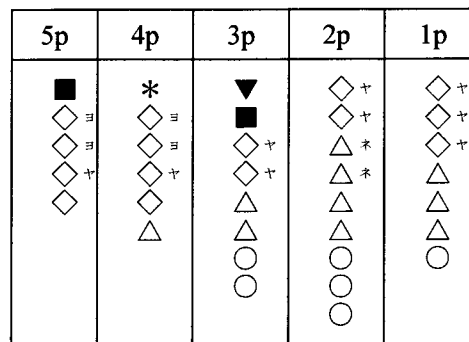


図8 実年層女性

表3 各場面の攻撃的口調の平均点（若年層 小数点第二位以下四捨五入）

若年層		上	同	下
男性	親	2. 0 9	2. 4 1	2. 8 4
女性		1. 8 9	2. 1 3	2. 0 9
男性	疎	3. 1 2	3. 3 1	3. 4 4
女性		3. 1 1	2. 8 8	2. 7 1

表4 各場面の攻撃的口調の平均点（実年層 小数点第二位以下四捨五入）

実年層		上	同	下
男性	親	1. 2 9	1. 7 5	1. 9 6
女性		1. 4 9	2. 0 3	2. 0 5
男性	疎	1. 8 4	2. 1 3	2. 6 1
女性		1. 8 6	2. 2 2	2. 8 1

が強いほど、卑語形式（黒系統の記号）が含まれる割合は高くなる傾向が見られる。概ね、マイナスに扱う程度と、卑語形式の出現率とは正の相関関係にあると見てよい。

4. 2. 2. 攻撃的口調と卑語形式出現の相関の属性差

次に第2の問題点である、卑語形式出現の属性差が生じる理由について、先にあげた3つの仮説を検証する。

攻撃的口調の程度が高いとき、どの属性の話し手にも同じ割合で卑語形式が出現しているわけではない。攻撃的口調の点数が高くて、卑語形式が多く含まれる図（図5）と少ない図（図7）とがあることに注目されたい。「マイナス評価・扱いの程度」と「卑語形式の選択」とは概ねの相関関係がみられるものの、属性によってその相関関係には程度差が見られるのである。

実年齢層男女を例にとってみよう。表4から実年齢層女性は、全ての場面で、実年齢層男性より攻撃的な口調で発話すると意識していることが分かる。にもかかわらず卑語形式の出現率は実年齢層の男性のほうが高い。実年齢層女性は、ぞんざいな扱いを行わないから卑語形式の出現が少なくなっているとはいえないのである。むしろ、卑語形式以外の表現を使用することで、マイナス評価を表明していると考えられる。また、卑語形式を使用することに対する規制が、実年齢層の女性には強く働いていることも図8から認められよう。一方、若年齢層の場合はまた別の男女差が見える。若年齢層女性（表3）を見ると、男性のほうが攻撃的口調の点数が高い。つまり、ぞんざいな扱いをする程度が男性のほうが高い。そして、卑語形式の出現も男性のほうが多くなっている。

これらの状況から、仮説1は棄却される。また、仮説2、3の正当性が示唆される。つまり、マイナス待遇表現行動には世代・性ごとに個別の表現スタイルが存在するということを示唆する。話し手の属性によって、マイナス評価を表明の仕方が異なっていると考えられるのである。この点については第6章の2節で検証する。

4. 2. 3. 属性ごとの卑語形式運用の違い

図5～図8、表3・表4から明らかになった、世代・性ごとの攻撃的口調と卑語形式の関係を表5に示す。

若年齢層男性は、強い攻撃口調で卑語形式を多く用いる直截的なタイプの表現スタイルとなる。若年齢層女性は、若年齢層男性の次に強い攻撃口調となるが卑語形式の使用は少ない。実年齢層男性は卑語形式を用いるが扱いとしては攻撃的口調にはならない。卑語形式の使用への規制は緩やかである。ただし、目上に対する卑語形式の使用は規制される。実年齢層女性は実年齢層男性より攻撃的口調になる傾向があるが、卑語形式はほとんど回答されない。

表5 属性による卑語形式運用

		攻撃的口調	卑語形式
若年層	男性	強	多い
	女性	やや強	少ない
実年層	男性	弱	中
	女性	やや弱	ほとんどなし

以上、攻撃的な口調の程度という扱いの段階の特徴と、形式選択との関わりについて、属性ごとに違いがあることを指摘した。これらの結果は、「どのような表現でマイナス評価を表明することが許されるか」について、その規範が属性ごとに異なることを示している。

4. 3. マイナス評価表明における表現態度の世代差

次に、場面へ下されたマイナス評価と攻撃的口調の関わりについて論じる。この段階では具体的な言語形式を問題にせず、表現態度形成の属性差について世代差を中心に分析する。表現産出プロセスの「扱い」の段階についての考察である。

4. 3. 1 回答パターンから予想される表現態度

この調査で、表現産出プロセスの様相を探る質問項目は2種類ある。一つは話し手の評価段階の指標として「内心どの程度怒っているか」という質問項目である（表6）。もう一つは、扱いの段階の指標として前節でも利用した「攻撃的な口調の程度」である（表7）。これら2種類の点数の大小関係から、両項目の回答パターンには以下の4種が設定できる。

Aパターン： 内心怒りなし・攻撃的口調ではない

Bパターン： 内心の怒り>攻撃的口調

Cパターン： 内心の怒り=攻撃的口調

Dパターン： 内心の怒り<攻撃的口調

等号・不等号はそれぞれ点数の大同小を表す。

また、これらの回答パターンから、それぞれのパターンにおける回答者の表現産出プロセスの特徴を推定することができる。まず、Aパターンは、マイナス評価を抱かないため攻撃的口調にならないものである。Bパターンは、内心の怒りほど攻撃的口調ではないもので、マイナス評価を思ったままに表明しないという表現態度が推定されるパターンである。Cパターンは内心のマイナス評価と攻撃的口調の点数が同値であるものである。マイナス評価をそのまま表現しようとするケースであると考えられる。そしてDパターンであるが、内心のマイナス評価よりも攻撃的口調のほうに高い点数をつけるものである。

表6 各場面の「内心の怒り」平均点（若年層）

若年層		上	同	下
男性	親	2. 0 6	2. 5 6	2. 9 4
女性		2. 2 5	2. 5 1	2. 4 5
男性	疎	3. 6 6	3. 6 6	3. 4 7
女性		3. 0 5	3. 2 4	3. 3 8

表7 各場面の「内心の怒り」平均点（実年層）

実年層		上	同	下
男性	親	1. 7 9	1. 9 9	2. 1 6
女性		1. 8 9	2. 1 1	2. 3 9
男性	疎	2. 0 8	2. 5 4	2. 9 1
女性		2. 4 9	2. 5 9	3. 1 9

(表6, 7とも小数点第二位以下四捨五入)

この場合、悪態をつくことによって集団の連帯意識を強化するといった表現効果を狙ったものとも考えられる一方で、必要以上に攻撃的になりたい「虚勢を張る」（星野1971）のような表現欲求や、教育的配慮から必要以上に怒って見せることで生じるものとも考えられる。以上のような分類に基づいて、表8, 9に各回答パターンの出現率を示す。

4. 3. 2. 各世代における表現態度

4. 3. 2. 1. 若年層の表現態度形成段階の特徴

若年層(表8)では、まず疎の相手が受け手である場面に注目したい。疎の相手に対しては、

表8 若年層の回答パターン(%)

	親の関係			疎の関係		
	上	同	下	上	同	下
Aパターン	34. 7	25. 4	26. 9	9. 5	8. 1	8. 6
Bパターン	26. 7	35. 8	25. 4	63. 5	41. 9	40. 0
Cパターン	21. 3	23. 9	35. 8	13. 5	37. 8	41. 4
Dパターン	17. 3	14. 9	11. 9	13. 5	12. 2	10. 0
計	100. 0	100. 0	100. 0	100. 0	100. 0	100. 0

(%: 小数点第二位以下四捨五入。網掛けは各場面における最大値と最大値との誤差5%以内のパターン)

Bパターンの出現率が高い。とくに、疎上に対してはBパターンの回答が多く60%以上の出現率である。Bパターンは、内心の怒りほどは強い攻撃的口調にならない、規制されるタイプのマイナス待遇表現行動である。疎の関係でBパターンの出現率が高いのは、マイナス待遇表現行動が反社会的な言語行動であることを認識しているため、疎の関係という未知の相手に対して、警戒しているのであろうか。とくに、疎上という力関係が働く相手に対して、Bパターンの出現率が多いことも、上位者への警戒心が垣間見られる。

また、疎の関係に対しては、怒りを抱かず口調も攻撃的でないAパターンが最も少ない。事態把握段階では非礼に対する「許容」は、疎の関係にはなされにくい。この点は、内心の怒りの平均点（表6）が、疎の関係の人物に対しては親の関係の人物より高いことから分かる。

次に、親の関係に注目する。若年層は、親上に対しては怒りも抱かず攻撃的な口調にもならないAパターンの出現率が高くなる。そして、親同ではBパターンの出現率が高い。親の間柄であっても、同等の相手にはマイナス待遇表現行動が規制されていることがわかる。さらに、マイナス評価をそのまま表出するCパターンは、特に親下に対して出現率が高い。逆に目上に対しては親疎に関わらず、Cパターンの出現率は低い。

つまり、親しい目上には設定場面に対して許容がなされ、マイナス待遇表現行動が発動しないというケースが増える。これは疎上には起こらない現象である。疎上には、Aパターンの出現率はわずか9.5%である。目上だけでなく、疎の相手には設定場面に対する許容はなされず若年層はマイナス評価を抱く。これは表6の点数が疎の間柄で親の間柄より高くなること、Aパターンの出現率が疎の間柄で低いことの両方から分かる。

以上をまとめると、若年層の場合、非礼への許容や配慮がともなう待遇表現行動は、相手が親しい人物で目上であるときに多くなる。一方、相手が目下の人物であるときは許容がなされず、マイナス待遇表現行動にかかる対人関係を維持するための規制も弱くなるといえる。

このように、若年層のマイナス待遇表現行動は、目上には非礼への許容がなされるために起こりにくく、目下には起こりやすい。つまり、若年層のマイナス待遇表現行動は、相手との上下関係によって影響を強く受けることがわかる。また、疎の関係の人物に対してBパターンが多いことから、疎の関係の人物に対して警戒を持ってマイナス待遇表現行動がなされている様子うかがえた。Bパターンは、親の関係では同年代の人物に多くなる。このことは、警戒というよりも、親しさを保持するための配慮が前面に出たものであろう。

4. 3. 2. 2. 実年層の表現態度形成段階の特徴

若年層の表現態度の特徴と、実年層の表現態度の特徴とは異なる部分がある。そのひとつは、実年層はマイナス評価をそのまま表現するというCタイプの表現態度を、親の関係では同等の相手に対して最も多くとるという点である。そして、親同に対してはBパターンという相手に遠慮してマイナス評価を表明するケースが最も少ない。若年層で、親同の

相手に最もBパターンが多いのとは逆の結果である。

表9 実年層の回答パターン (%)

	親の関係			疎の関係		
	上	同	下	上	同	下
Aパターン	40.3	33.9	27.1	24.6	16.7	10.5
Bパターン	41.9	22.0	37.3	36.1	36.7	35.1
Cパターン	12.9	30.5	22.0	29.5	35.0	49.1
Dパターン	4.8	13.6	13.6	9.8	11.7	5.3
計	99.9	100.0	100.0	100.0	100.1	100.0

(%: 小数点第二位以下四捨五入。網掛けは各場面における最大値と最大値との誤差5%以内のパターン)

実年層では、親同という話し手と最も近い立場にいる相手に、遠慮のないマイナス待遇表現行動が発動しやすいのである。このことは、ぞんざいなことばを使い合えるほど、親しい関係であるというマイナス待遇表現行動への一般的な認識と関係があるだろう。ただし、同年代を除けば、親の関係でBパターンは若年層より出現率が高く、Cパターンは低くなる。つまり、マイナス評価の表明は実年層になると、疎の関係だけでなく、親の関係でも強く規制されるようになる。

また、表7からもわかるように、親の関係であるほど、また目上であるほど、内心の怒りは生じにくく、非礼に対する許容がなされやすいといえる。この点は表9のAパターンの出現率にも反映している。

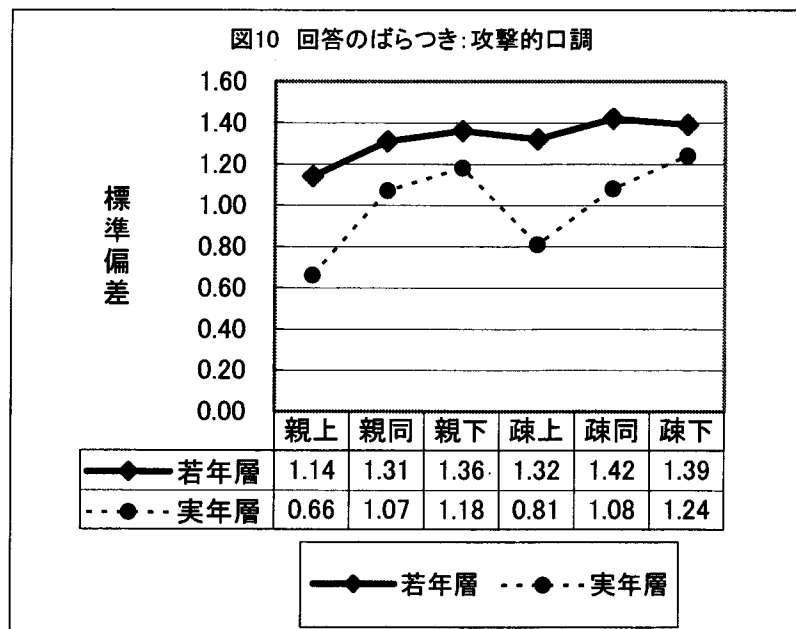
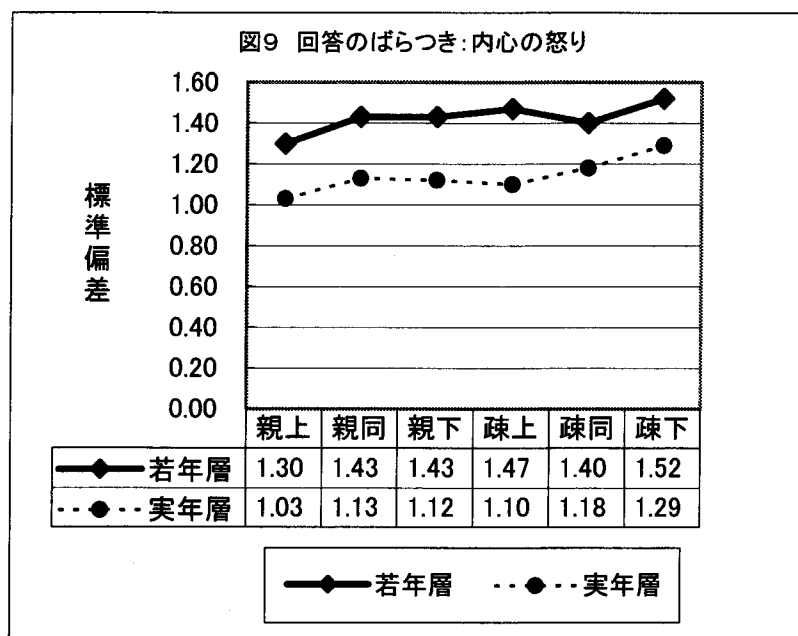
このように、実年層の表現態度形成の特徴は、非礼への事態評価には上下関係・親疎関係ともに影響するが、マイナス待遇表現行動に対する規制は、親しい間柄では相手と近いほど弱いと考えられる。

また、若年層・実年層ともにCパターンの表現態度は、親より疎の関係で高くなる。つまり、疎の関係では遠慮ないマイナス待遇表現行動が発動しやすいことを示している。これは実年層の親同の関係でCパターンの出現率が高くなることとは理由が異なり、疎の相手にはそもそも維持すべき人間関係が希薄であることから生じる結果であると思われる。

4. 3. 3 回答のばらつきから見る待遇表現行動規範の成熟度

ここまでの分析で、表現態度形成には世代差が存在することが明らかになった。この世代差が意味するところについて考察を行う。言語変化において、使用される語形の世代差は、若い世代が変化を先導していることの表れとしてみなされることが多い。しかし、ここで明らかになった世代差は、待遇表現行動の変化を表しているとは考えにくい。待遇表

現行動は、対人関係を考慮しながら遂行される社会的なスキルである。若年層はそのスキルを習得している最中であるため、社会進出にしたがって、若年層もいずれは実年層の待遇表現行動規範へ移行していくと考えられる。



この点を検証するために、内心の怒りと攻撃的口調の評点の与え方にどの程度の個人差があるかを分析した。図9と図10は、攻撃的口調の評点と内心の怒りの評点との標準偏差を場面ごとに算出したものである。標準偏差が高いほど、評点の与え方に個人差が大きい

ことを示す¹。

両図から明らかなのは、実年層はどの場面においても標準偏差が若年層よりも低いことである。つまり、実年層の非礼への評価の仕方、非礼に対する扱い方についての回答は、若年層よりも個人差が少なく、しっかりとした規範が形成されていることがわかる。このことは同時に、若年層のマイナス待遇表現行動の規範形成が未成熟であることをも示している。つまり、先に述べたように、若年層は待遇表現行動の規範を習得している最中であり、あたらしい待遇表現行動の規範を生み出しているとは考えにくいのである。

また、図9では、図10ほどは場面の違いによる標準偏差の違いが出ていない。比較的平坦な折れ線グラフになっている。ただし、疎の関係では、親の関係よりもやや標準偏差が高くなり、関係の希薄さが場面への評価を不安定にさせていることが分かる。

一方、図10は攻撃的口調の程度についての回答のばらつきを示したものである。この図では、実年層における目上の場面での標準偏差は、同等・目下よりもかなり落ち込む。これは、事態への評価よりも、目上に対する評価表明の表現態度形成が強い統制を受けていることを示している。つまり、親疎を問わず、目上に対するマイナス待遇表現行動は、一定のルールにしたがってなされているといえる。若年層ではこの傾向は弱く、実年層より目上に対する標準偏差は高い。しかし、同等・目下の場面よりも、標準偏差はやや低く、社会進出にしたがって目上に対する言語行動規範を身に付けていくであろうと考えられる。

また、目下に対しては、世代・親疎を問わず標準偏差が高く、回答にばらつきが見られる。目下への言語行動規範は、目上に対し手ほど統制されていないことがうかがえる。目下が非礼を行っても大目に見たり強く叱ったりするなど表現態度が多様になること、目下へのことばづかいは、目上に対してほど家庭や学校、職場などで教育や指導が厳しくないことが理由として考えられる。

5. むすび

本章では、マイナス待遇表現行動における卑語形式の選択プロセスについて、世代差・性差を明らかにした。それぞれの属性差は、2. で述べたようなマイナス待遇表現行動にかかる規制の違いを表すものであると考えられる。つまり、分析結果の属性差は、卑語形式選択にかかる規制の属性ごとの規範であるといえる。

また、プラスとマイナスの待遇表現行動は表裏の関係か、個別に扱うべき現象かという疑問点を冒頭で掲げた。その検討のために、本章では、4つの観点からマイナス待遇表現行動の属性差を分析した。第1の観点は、非礼の仕手との上下・親疎関係による卑語形式の選択傾向である。この点については、表2に示したような、敬語とは逆の性質が見られた。しかし、卑語形式の出現率には、世代差・性差が大きく、目上には常に高い確率で選択される敬語形式とはこの点で異なっている。

¹ これらの図の数値は、計算方法を改めたため、西尾（1996）の数値と異なっている。

そこで、第2の観点として「マイナス評価・扱いの特徴」と「卑語形式の選択」との相関関係を分析した。プラス待遇の言語行動を行うためには狭義の敬語形式の使用は極めて重要な要素となる。しかし、マイナス待遇表現行動においては、卑語形式の使用は属性間で強い統制がなされておらず、ぞんざいな形式を用いずにマイナス評価を表明する属性がある。逆にぞんざいな形式を用いても強いマイナス評価を表明していない場合もある。卑語形式の使用は、世代・性によって規制のされ方に大きな違いがあり、属性別のマイナス評価表明のスタイルが存在することが示唆された。マイナス待遇表現行動の考察は、語彙レベルの分析だけでは不十分であることが明らかになったことになる。このことは、プラス待遇表現が、敬語形式という語彙レベルの形式選択を分析することによって、多くの成果が得られることと事情を異にするものである。この点も、プラス・マイナスのそれぞれの待遇表現行動は個別に考察する必要性を示している。

第3の観点としては、事態評価から表現態度形成に至るプロセスについての世代差を考察した。ここでも世代という属性による差が認められた。この分析では、表現形式を問題しなかったが、表現行動が場面によって受ける規制のありかたを、事態への評価・評価の表出の仕方という観点から明らかにした。マイナス待遇表現行動は世代が進むにつれ、疎の間柄に加えて親しい間柄に対しても規制が強くなるということが認められた。これも、「丁寧に話そうとする」態度のあり方とは異なる様相である。ここでも、プラス待遇表現行動とマイナス待遇表現行動とは個別に考えるべき部分があるということが指摘できた。

さらに、第4の観点として、事態評価・評価表明段階の規範形成のあり方を、回答の標準偏差から分析した。この分析から、若年層は規範形成の途中にあること、そして、若年層から実年層になるにしたがって、目上に対する表現行動は統制を受けるようになることが明らかになった。この結果は、プラス待遇表現行動の性格をも示唆する。目上に対する表現行動は社会的に統制を受けるものであり、「言うべきこと」を言う性格があるが、同等や目下に関してはそのような性格が希薄である。

以上のことは、語彙レベルの分析によって得られた基礎的な知見であり、以下の章でも援用することができる。また、語彙のレベルを超えた大きな単位での言語表現を分析するにあたっても有効な分析結果である。本章で得られた知見をもとに、次章以降では発話レベルでの待遇表現行動の分析を行う。

参考文献

- 江川 清（1990）「場面接触態度」『場面と場面意識』国立国語研究所報告 102 三省堂
- 渋谷勝己（1992）「言語習得」『社会言語学』おうふう
- 西尾純二（1996）「マイナス待遇表現行動における規範意識の属性差」『地域言語』9 天理・地域言語研究会
- 浜田麻里（1988）「言語行動としての罵り—日本語と中国語の罵り表現の対照から—」『待兼山論叢 日本学篇』22 大阪大学文学部

第6章

発話レベルのマイナス待遇表現行動の基礎的分析

1. 分析の留意点と資料収集について

1. 1. はじめに

本章では考察の対象を発話のレベルまで拡大し、マイナス待遇表現行動の分析を試みる。

助動詞や単語などの単語よりも、大きな単位の言語事象を扱ったマイナス待遇表現行動研究は、いくつかの手法で行われてきた。W. Labov (1971) では儀礼的悪態の談話分析がなされた。第二言語習得の観点からは、不満表明における発話の特徴分析(初鹿野・熊取谷・藤森1996)が行われている。初鹿野・熊取谷・藤森(1996)の不満表明における発話の特徴分析は、第二言語習得の観点からストラテジーの使用状況や話線構造にまで考察が及んでいる。しかしながら、これらの研究には、どの種類の発話がどのような要因によって規制されるのかという点について議論が不足しているように思われる。なかでも、話し手・聞き手の他、場面の構成要素の違いはマイナス待遇表現行動のあり方を大きく左右するはずである。比嘉(1976)の以下の指摘は、そのことを示唆する。

日本語の類義語の使い方は一中略一社会的に厳しく規制されているのでその制約そのものを破ることがきわどい悪態のつき方になる一中略一。日常的に「あなた」とさえ呼べない目上の人に向かって「おまえ」とか「きさま」と呼び、普段、命令形の使えない相手に「これを読め」のような直接命令文を使うことは、一中略一非常に効果のある悪態のつき方である。

この指摘からは、相手が誰であるかによってマイナス待遇表現行動の規制が変化すること。そして、文化・社会の違いによって、言っていることと悪いこととの境界線が異なることを示唆する。その境界線を見つけること自体が、とくに感情性のマイナス待遇表現行動の研究に通じるであろう。

1. 2. 発話レベルのマイナス待遇表現行動の分析における問題点

上に引用した比嘉(1976)の指摘から、マイナス待遇表現行動は、単に感情卑語を選択するだけでなく、「言うべきこと」を意図的に言わない、または「言うべきでない」ことを意図的に言うことでもなされることが分かる。このような言語行動には修辞・方略が駆使され、表現形式の丁寧さやぞんざいさのみからでは、分析対象とする発話がマイナス待遇表現形式か否かを判定するのが困難な場合がある。

(a) 大変でしたね。ご苦労さまでした。

(b) 図太いやツだな、お前は。

(a) (b) がマイナス評価表明であると解釈される引き金は、いずれも話し手が対人関係の維持のために「言うべきでない」ことを言っていると受け手が判断することである。

(a) の発話は文字どおりねぎらいの意図を表すこともできれば、無駄な仕事をした相手に対する皮肉たっぷりのマイナス評価表明にもなる。逆に (b) の発話は文字どおりに解釈すれば相手へのマイナス評価表明となるが、相手の積極的な姿勢をほめることばにもなりうる。マイナス待遇表現行動と判断されるのは、(a) (b) とともに、対人関係の維持のためには「言うべきでない」ことであつた場合である。このため、文脈や送り手の意図を踏まえなければ、マイナス待遇表現行動と判断することができない。

このように、分析者は発話データを目の前にして、それぞれの発話がマイナス評価の表明であるか否かを判断しなければならない。この判断は単語レベルの分析のみでは不可能な場合がある。以上のようなことから、発話レベルでのマイナス待遇表現行動の考察が必要となる。

1. 3. マイナス待遇表現行動の2つのタイプ

1. 3. 1. 敬語による皮肉のメカニズム

(a) は、先述のように、無駄な仕事をした相手に対する皮肉たっぷりのマイナス待遇表現になりうる。(a) では、敬語が用いられているが、敬語というプラス待遇表現が、なぜマイナス待遇表現になることができるのだろうか。

大石 (1975) は、敬語には送り手と待遇対象とを「へだて」る働きがあることを指摘している。大石氏のいう「へだて」は、必ずしも相手をマイナスに待遇する働きを示すものではない。しかし、(a) での敬語は、その「へだて」のはたらきを利用して、マイナス待遇表現として機能していると考えられる。(a) が皮肉のマイナス待遇表現となるとき、送り手は敬語を使用することにより、相手から一歩引いた冷ややかな対人的態度をとることができる。

大石 (1975) では、敬語の働きとして「へだて」の他に「あがめ」や「皮肉」「軽蔑」「品位」を表すことができるという。これらの敬語の働きには階層性を認めることができるものがある。とくに「へだて」は、その他の働きよりも抽象的な上位のはたらきであろう。つまり、「へだて」することで自分と対象の「距離」を示し、その「距離」に込められる評価的態度のバラエティによって、敬語は「あがめ」「皮肉」「軽蔑」などという違う方向性をもった働きをもつことができる。プラスの評価的態度で対象を「へだて」れば、「あがめ」になる。マイナスの評価的態度で「へだて」れば慇懃無礼を含む「皮肉」や「軽蔑」となる。

また、「へだて」の過剰さによっても、「皮肉」「軽蔑」の表現姿勢を表しうる。この過剰さは、普段の対人的な距離のとり方との対比で規定される。普段敬語を使用しない親しい相手に敬語を使用するのは、明らかに過剰な「へだて」である。対人関係のいわば「適正距離」から遠ざかりすぎるのである。このとき、受け手は、その過剰さに気づき、(a)が皮肉であると解釈するであろう。

1. 3. 2. 敬遠型と過剰関与型のマイナス待遇表現行動

(a)は送り手が敬語使用によって、対象との過剰なへだてを表しているものであることを述べた。これは送り手から対象を過剰に遠ざける扱いをする待遇表現行動である。その扱いは敬語という表現形式を選択することによって成し遂げられた。しかし、対人関係上の距離を遠ざけるのは、もちろん、敬語によってのみではない。

ここで、第3章2. 2. でとりあげた、待ち合わせに20分遅れてきた友人に対する発話例のうち(4)～(8)を挙げ、マイナス評価の表出法についての多様性を探る。

- (4) ばかやろう。遅いんだよ。
- (5) どういうこと？ 今何時だと思っているんだ？
- (6) お早いお着きでいらっしゃいますね。
- (7) 腹が立つ。もう知らん。寄るな。
- (8) <発話なし。顔を一睨みしてそのまま帰る>

(6)のように敬語使用によって皮肉な効果を表す他に、相手を敬遠する扱いを、発話の内容的な表現要素に表したのが、(7)の「もう知らん。寄るな。」の部分である。また(8)のように、<発話なし>や<そのまま帰る>ことによって相手との接触自体を断ち切るへだてかたもありうる。(6)～(8)のマイナス待遇表現の共通点は、送り手から相手を遠ざけるところにある。

一方、(4)では、マイナス待遇表現行動には相手そのものの扱い方として、相手が言及してほしくないことに積極的に踏み込んで言及している。つまり、対人関係の「適正距離」よりも近づきすぎる表現行動である。他に(5)や(7)の「腹が立つ」も、相手を敬遠するのではなく、送り手は積極的に相手に関与している。敬語による皮肉など敬遠の扱いは、「へだて」が過剰であったのに対して、これらは「関与」が過剰なのである。

ここにマイナス待遇表現行動における「扱い方」について、2つのタイプが認められる。すなわち、待遇対象が言ってほしくないこと、言うとは不快だと感じるだろうことを積極的に述べるタイプの表現行動と、相手を遠ざけて対人関係を脆弱にさせるような態度をとるタイプの表現行動である。前者を過剰関与型、後者を敬遠型と呼ぶことにする¹。

¹ ポライトネスの理論では、前者は相手のネガティブフェイス、後者はポジティブフェイスを侵す言語行動であると言える。

もちろん、コミュニケーションをとることそのものが、相手との関与である。よって、具体的にどのような言語行動が「過剰」な関与になるのか、あるいは敬遠となるのかということ表現内容、表現形式など複数の観点から検討する必要がある。(5)の用例も敬体が用いられると

(5') どういうことですか。今何時だと思ってるんですか。

となり、問いつめるという内容上強い関与を示すが、友人相手には表現形式上丁寧すぎる敬体が用いられており「へだて」た敬遠を表しうる。このように、過剰関与型と敬遠型のマイナス待遇表現行動は相容れないものではなく、両者が組み合わさることで相乗的なマイナス評価表明の効果をもたらすと考えるべきであろう。

1. 4. 調査の概要

以上、発話レベルの表現の分析について留意点を述べた。その留意点を踏まえ、どういった表現の運用がどのように規制されているかについて具体相を探るため、非礼場面を設定してそこでどのように発話するかを聞く面接調査を実施した。実施期間は1996年11月から12月である。設定した非礼場面は次のようなものとした。

弱非礼場面

() さんが道を聞くためにあなたのところに地図を持ってきました。あなたはその人のために一生懸命道を探していますが、その人はあなたの友達と横で笑ってしゃべっています。地図で道を見つけたので、こちらを見るように言うときどのように言いますか。

強非礼場面

今度も() さんのために地図で一生懸命道を探していますが、なかなか道を見つけられません。もう10分も探していますが、() さんはずっとあなたの友達と笑ってしゃべっています。あなたは我慢して一人で道を探していましたが、疲れてイライラしてきました。今度は一生懸命探しているあなたをおいて、どこかに行こうとしています。() さんを引き留めて() さんもこちらを見るように言うときどのように言いますか。

() 内には、親疎関係、上下関係(目上、同等、目下)をクロスさせた6人の聞き手が入る。聞き手が具体的に誰であるかは、インフォーマントに設定してもらった。

対者待遇の方がマイナス待遇表現行動に関する規制がより強く働くと考え、非礼の仕手を目前にして話す場面を設定した。また、回答者がこれらの場面でマイナス評価をもつかどうかの指標として、第5章と同様に「どの程度怒っているか」を尋ねた。また、評価表出態度形成段階についての指標として、「どの程度怒った口調か」ということについても尋ねている。

インフォーマントは実年層（30代～50代）男女各10名。若年層（主に中学生）男女各10名の計40名である。

発話レベルのマイナス待遇表現行動を分析する手始めとして、詳細な情報を得ることができ、筆記の回答より話しことばが得られやすい面接調査であることが望ましかった。また、フィールドは奈良県とした。この種の言語行動にも地域差が存在する可能性がある（第7章で検討）。そこで、個人の調査としての規模と発話者の意識により近づくことを考え、筆者の出身地で内省の効く奈良県にフィールドを絞った。

2. 対人関係によるマイナス待遇表現形式の使い分け

2. 1. はじめに

マイナス待遇表現行動の対人関係ごとの規範は、第5章で考察したように若年層では形成過程にあると考えられる。よってここでは、実年層の対人関係によるマイナス待遇表現形式の使い分けの分析を行う。また、対人関係による表現形式の使い分けは、関係性待遇としての言語行動といえる。しかし、第5章でも明らかになったように、相手との上下関係は感情卑語の選択に、消極的な影響を与えていた。すなわち、目上に対しては、丁寧なことば使いをするべきであるという規制が、感情卑語の使用を抑制していた。

このような規制は、発話レベルでいかに作用しているであろうか。本章ではここまで、発話レベルのマイナス待遇表現行動を分析するにあたっての問題点・留意点を述べてきた。また、分析対象とする発話資料の調査方法を示した。その問題点・留意点を踏まえ、本調査で得られたデータをもとに、発話レベルでのマイナス待遇表現行動の対人関係による、表現形式の使い分けについて分析を試みる。

2. 2. 表現内容の分類

筆記記入された発話回答を、第1章の3. 2. 2. で述べた内容的な表現要素（表現内容）に分解すると、次のようになる。

<回答例>

- 1 : b センセー a チョット ヨロシードショーカ
 2 : b チョット e ドコイクノ g チョット マツテクダサイヨー
 3 : b ワエ（オマエ） h ヒトニ サガサセトイテ e ナンド（ナンド） f シャベ
ンノモエーカゲンニセー
 4 : b 〇〇サン c サガシテンノ アリマセンネケド d アト ドーシマショー
 5 : i モーシラン i ジブンデサガシテ

- A. 発話の切り出しに関する内容
 - a. 断り（発話の切り出しに際して相手に対して断りを入れる）
 - b. よびかけ（発話の切り出しに際して相手の注意を喚起する）
- B. 話し手のマイナス評価が明示的でない内容
 - c. 状況描写（話し手が把握している状況を評価を明示せずに描写する）
 - d. 現状にどう対処するか相手の意向を問う
- C. 話し手のマイナス評価が明示的な内容
 - e. 問いつめ（相手を攻撃するのが主な目的。相手の返答を要求することを主な目的としない。）
 - f. 非礼の停止を求める。
 - g. 非礼の改善を求める。
 - h. 非礼の指摘・批判（非礼とみなした事態の描写や批判を行う。）
 - i. 接触回避表明（相手との接触を避ける意志を表す。）

Aは発話の切り出しの形という談話構造上の特徴を軸にした分類である。発話の切り出しには話し手の表現態度が表れやすく、待遇表現行動としても役割は大きいだろう。また、発話を構成する内容上の表現要素をa～iに分類した。このうち、c～iには内容そのものがマイナス評価を表現しうるものとそうでないものがある。話し手のマイナス評価が明示的でない要素であるcとdをBに、マイナス評価が明示的な要素e～iをCに分類した。

2. 3. 発話の切り出し方・マイナス評価が明示的でない表現の運用

発話の切り出しに現れる呼びかけは、言語形式だけを見ると、「テメエ」「コラ」などのぞんざいな表現形式を用いない限りマイナス評価は明示的でない。しかし、呼びかけも発話を構成する要素である限り、聞き手に関与する言語行動であり、過剰関与型の言語行動となる可能性がある。では、どういうときに過剰関与型の言語行動になるのか。

2. 3. 1. 過剰な関与となる呼びかけ

実年層の全回答における発話の切り出しに関する表現形式の出現状況を表1、2に示した。これらの表から、相手との関係によって出現する記号に偏りがあることが分かる。先述のように、相手が目上であることは、関係性だけでなく、感情性のマイナス待遇表現行動を抑制する。このことから、目上に対して出現しにくい表現要素は、マイナス待遇表現としての働きをもっていると考えられる。

表1 発話の切り出し方の使い分け<実年層・男>

C : context S : speaker(age) H : hearer

C	S \ H	親上	親同	親下	疎上	疎同	疎下
弱 非 礼	MA (58)	○	●	●	○	◎	●
	MB (54)				#		
	MC (54)			●		◆	●
	MD (50)			●		●	●
	ME (44)				☆		
	MF (42)		#		#	#	
	MG (38)	○	●●●	●◆◆	○☆	☆	
	MH (35)						
	MI (35)	○	◎		○	◎	◎
	MJ (34)	○●●	●◎	●	#●		
強 非 礼	MA (58)			●		●	
	MB (54)						
	MC (54)						
	MD (50)						●
	ME (44)						
	MF (42)				#		#
	MG (38)	○	●	●●	☆		●●
	MH (35)	◎					
	MI (35)	○	◎	▲	○	◎	●◎
	MJ (34)	○●	●●●	●●●●		●	

☆ : 切り出しの断り。オハナシチュースミマセンなど

: 躊躇を表す形式。アー アノーなど

○ : 役職敬称 (先生, 支店長など)

◎ : ~サン・~クン・アナタ

● : チョット, ホラなど感動詞

▲ : 名前の呼び捨て

◆ : 卑罵的よびかけ (ワエ<お前>, コラ)

□ : 呼びかけ (☆#は含まない) が連続して行われていることを表す。

表2 発話の切り出し方の使い分け<実年齢・女>

C : context S : speaker(age) H : hearer

C	S \ H	親上	親同	親下	疎上	疎同	疎下
弱 非 礼	F A (56)	◎ #	☉☉●	# ☉●●	☆○	◎ #	☉●●
	F B (55)						
	F C (53)			●			
	F D (49)			☉	☆	☆	
	F E (48)	●	●	●	☆		☆
	F F (47)			☉☉	●		☉☉
	F G (47)						
	F H (33)						
	F I (32)	☉			☉		☉
	F J (30)			◆			
強 非 礼	F A (56)	☉	☉☉	☉●●	○○	☉	☉
	F B (55)						
	F C (53)				☆		
	F D (49)			☉☉	☆	☉☉	●
	F E (48)		●				
	F F (47)			●			☉
	F G (47)						
	F H (33)						
	F I (32)						
	F J (30)	#			#	#	

☆：断り。オハナシチューズミマセンなど

#：躊躇を表す形式。アー アノーなど

○：役職敬称（先生，支店長など）

☉：～サン・～クン・アナタ

●：チョット，ホラなど感動詞。

▲：名前の呼び捨て

◆：卑罵的よびかけ（ワエ<お前>，コラ）

☉☉：呼びかけ（☆#は含まない）が連続して行われていることを表す。

表3, 4は聞き手との上下関係による、発話の切り出しに用いられる呼びかけ方の違いを量的に示したものである。これらの表から、呼びかけ方に対する関係による明確な使い分けの傾向が見られることがわかる。

表3 呼びかけ方

	目上	同等	目下
○役職敬称	12	0	0
◎ケン・サン	5	9	7
●感動詞	2	11	21
合計	19	20	28

表4 連続する呼びかけを含む発話の数

	目上	同等	目下
出現数	2	5	11

目下に多用される呼びかけは感動詞（●記号「チョット」「ホラ」）によるものである（表3）。これは関係性待遇としての目下への感動詞の運用というより、目下への感動詞による呼びかけの規制が最も弱いことを示唆する。感動詞は、表現形式そのものに丁寧さが表されることもない。しかし、表3をみるとそういった感動詞による呼びかけは、目下に対しては頻繁だが、目上に対して規制されていることが明らかである。相手への適切な関与の仕方に、呼びかけ方といった要素が強く関わっていることが分かる。また、役職敬称によって呼びかけることが多いが、この傾向は役割関係が明確な言語社会にいる男性回答者（女性は10人中8人が主婦）のものであることが、表1, 2からわかる。

これらの目上に対して規制され目下は規制されにくい呼びかけ方による待遇表現行動は、目下には感情性のマイナス待遇表現行動が許容されやすいという日本語社会の性格を表しているものといえよう。

2. 3. 2. 関与の唐突さによるマイナス待遇表現行動

また、発話の切り出しに唐突に相手に働きかけることは、失礼な関与になりうる。だからこそ、「オハナシチュー スミマセン」といった切り出しの断りの要素を用い、唐突さを緩衝するものと考えられる。表1, 表2では特に、☆や#の記号が疎上の相手に用いられることも、唐突さを回避するためのものと考えられよう。☆や#は「オハナシチュー スミマセン」など、発話の切り出しに際して断りを入れるものや、呼びかけながらも発話することへの躊躇を示す「アー」「アノー」などの形式である。疎の相手には、人間関係が希薄なため、言語行動による接触の仕方が慎重になる。さらに、目上に対しては、この配慮がさらに強くなる。

この疎上に対して行われる唐突な関与への配慮との対比からも、「チョット」「ホラ」など聞き手の感覚に直接訴えかける表現行動がマイナス待遇表現行動になりうることを支持される。「チョット」「ホラ」といった感動詞が、目下に多く用いられるマイナス待遇

表現行動となるのは、形式の意味ではなく、発話の唐突さという談話構造上の性格が関与しているものと考えられるのである。

2. 3. 3. くどい関与によるマイナス待遇表現行動

また、談話構造上の性格として、長く相手に関与することも関与の量が増すため、過剰関与型のマイナス待遇表現行動となろう。では、呼びかけを重ねて行うことは、くどく相手の注意を喚起することとなり相手への過剰な関与を行う手段となるだろうか。表4から連続する呼びかけ（…クン …クン ， チョット チョット， …サン， チョットなど）が目上・同等の相手に対してなされにくいことが分かる。表現内容そのものに過剰関与の性質が希薄な呼びかけ表現であっても、重ねて用いることによって聞き手の過剰な注意を強いることとなり、過剰関与型のマイナス待遇表現行動の手段となりうると見てよいであろう。また、こういった発話は、注意が行き届かないことも多いだろう。よって、期せずしてマイナス待遇表現行動と聞き手に解釈されたり、不快感を与えたりすることも多いのではなかろうか。

このように、表現形式・表現要素にマイナス評価が明示的でなくとも、「唐突さ」「くどさ」などの談話構造上の規制が場面ごとに存在することが示唆される。そして、聞き手への「扱い方」としてこれらの規制を意図的に破ることは、過剰関与型のマイナス待遇表現行動となりうるのである。

2. 4. マイナス評価が明示的な表現の運用

次にマイナス評価が明示的な表現内容の運用について分析を行う。マイナス評価が明示的である表現要素としては、先にあげた、問いつめの表現、非礼停止要求の表現、非礼改善要求の表現、非礼を指摘・批判する表現、相手との接触を回避する表現があげられる。

しかし、こういった表現内容からだけで、マイナス評価は表明されるわけではない。日本語では、文体や卑語助動詞などからもマイナス評価が明示される。そこで敬体・普通体のいずれで表現されているかを表5、6に反映させた。また、過剰な「へだて」の効果をねらって文体を丁寧にしたと回答者が内省したものについても表5に反映させている。

また、無視するという回答はその理由を聞き、敬遠の意図があることを確認している。これも表に示した。さらに敬遠の意図を表すのに、地図を返すという非言語行動をとると

表5 マイナス評価が明示的な表現内容の出現状況＜実年層・男＞

C : context S : speaker(age) H : hearer

C	S \ H	親上	親同	親下	疎上	疎同	疎下
弱 非 礼	MA (58)						
	MB (54)						
	MC (54)						
	MD (50)						
	ME (44)						
	MF (42)						
	MG (38)						
	MH (35)						
	MI (35)						
	MJ (34)						
強 非 礼	MA (58)						
	MB (54)						
	MC (54)						
	MD (50)						
	ME (44)						
	MF (42)						
	MG (38)						
	MH (35)						
	MI (35)						
	MJ (34)						

○：状況描写（ココニ アリマスヨ。ミツカリマシタ。ワカラナンナ。など）
◇：意向をうかがう。（アト ドーシマショー。ココチガイマスカ。など）
◆：問いつめ（ワカラナクテ イーノカ。ドコイクノ。）
▼：非礼停止要求（エーカゲンニセーヨ。シャベッテヤント。など）
▲：非礼改善要求（コッチ ミテクダサイ。マッテクダサイ。など）
■：非礼の指摘・批判（ヒトニ サガサセテオイテ。ドッカイクナンテ トンデモナイヨ。など）
※：接触回避表明（モー シラン。ジブンデ サガシテ。など）
×：無視（放っておく。協力を放棄する。）
＊：非言語行動による敬遠（地図を返す）

䷏ : 敬体の使用

: 敬体と普通体の混用

■：過剰な「へだて」の効果を狙った丁寧な文体の使用（話者の内省より）

表6 マイナス評価が明示的な表現内容の出現状況<実年層・女>

C : context S : speaker(age) H : hearer

C	S \ H	親上	親同	親下	疎上	疎同	疎下
弱 非 礼	F A (56)	▲	▲◆	◆◆▲	▲	▲○	▼▲◆
	F B (55)	○▲	○▲	○▲	○▲	○▲	○▲
	F C (53)	▲	○▲	▲	○▲	▲	▲
	F D (49)	▼▲	▼▲	▼▲	▲	▲	■▼▲
	F E (48)	▼○▲	■▲○▲	■▼○	○▲	○▲	○▲
	F F (47)	○◇▲	○▲	○▲	○▲	○○▲	○▲
	F G (47)	○▲	▼▲◆	○▲	○▲	○▲	○▲
	F H (33)	○▲	○▼▲	○▲	○▲	○▼▲	○▲
	F I (32)	◆	▲◆	○◆	○	▲◆	▲◆
	F J (30)	○○○	○◆	○○	○	○	○
強 非 礼	F A (56)	▼▲	▼▲■	▼▲	▼▲○■	▼▲■▼▲	▼▲○■▲
	F B (55)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	F C (53)	◆▲	◆▲	◆▲	▲	◆▲	▲
	F D (49)	○※	■▲▲	◆■▲	○	■	◆▼▲
	F E (48)	▲	◆○▲	◆■○	○▲	◆○▲	■◆■
	F F (47)	◆◆	◆▲	◆▲	◆○※	◆▲	◆▲
	F G (47)	◆▲	▲◆	▼■▲◆▲	◆▲	◆※	◆■
	F H (33)	○◆◆	◆▲	◆◇▲	◆◆	◆▲	◆◇▲
	F I (32)	▲○	▲	▲■	▲○▲	▼▲	▲■▲
	F J (30)	○※	○	○※	○※	○	○※

○：状況描写（ココニ アリマスヨ。ミツカリマシタ。ワカランナー。など）

◇：意向をうかがう。（アト ドーシマショー。ココチガイマスカ。など）

◆：問いつめ（ワカラナクテ イーノカ。ドコイクノ。）

▼：非礼停止要求（エーカゲンニセーヨ。シャベッテヤント。など）

▲：非礼改善要求（コッチ ミテクダサイ。マッテクダサイ。など）

■：非礼の指摘・批判（ヒトニ サガサセテオイテ。ドッカイクナンテ トンデモナイヨ。など）

※：接触回避表明（モー シラン。ジブンデ サガシテ。など）

×：無視（放っておく。協力を放棄する。）

＊：非言語行動による敬遠（地図を返す）

≡：敬体の使用

≡：敬体と普通体の混用

≡：過剰な「へだて」の効果を狙った丁寧な文体の使用（話者の内省より）

いう回答も記号化した。なお、非礼改善要求は場面設定の文脈から、必然的に出現数が多くなっているの、表上には示すがここでは考察から外すことにする。

2. 4. 1. 表現内容と敬体の使用

強非礼場面では、弱非礼場面よりマイナス評価の指標の「怒り」が強くなる。これに応じて男女問わず弱非礼場面ではマイナス評価が明示的でない表現内容○（状況描写）が多くなり、強非礼場面ではマイナス評価が明示的な表現内容（黒系記号）が多くなる。この傾向は、マイナス待遇表現行動を抑制する目上に対する場面であっても消えない。

これに対して、敬体の使用は弱非礼場面であっても強非礼場面であっても、敬体を用いる人に対しては一貫して用いる傾向にある。MC（54）の聞き手が疎の上の強非礼場面では発話なし。FH（33）の聞き手が親の上の強非礼場面（敬体と常体を混合）の2例を除くと目上に対して弱非礼場面で敬体を用いて、強非礼場面で常体を用いているのはわずか2例（53例中）である。また、疎の同年、目下に対する敬体の使用も場面の違いで常体に変化することはほとんどない。

つまり、敬語を用いるべき相手に敬語を用いずに話すことには、強力な規制がかかっているが、表現内容の選択は比較的よく変化している。敬語は「言うべきこと」として使用され、上の関係を明示しているが、事態へのマイナスの評価は表現内容によって表されているのである。

2. 4. 2. マイナス評価が明示的な表現内容の使い分け

もちろん、マイナス評価が明示的な表現内容を表すことにも規制はかかっている。マイナス評価を明示する表現内容も多様であり、その種類の選択によって対人関係上の配慮が行われている。その具体的な使い分けを、表7から表11まとめた。

表7～表9において明らかなように、過剰関与型のマイナス評価が明示的な表現は目上に対して用いられにくくなっている。なかでも非礼の指摘・批判は同等の聞き手に対しても用いられにくい。これらの結果をまとめた表10から、過剰関与型の表現内容に関する規制は目上>同等>目下の順で強いことが分かる。これに対して、相手との親疎関係には大きな影響を受けない。

一方、敬遠型はこの逆の結果となる（表11）。敬遠型の内容を表す表現内容は、出現数は少ないものの、その使い分けは上下関係よりも、親疎関係によって規定されている。そして、疎の関係の相手に多く用いられる。

表7 ◆ 問いつめ

	親	疎	計
上	11	6	17
同	16	13	29
下	16	13	29
計	43	32	75

表8 ▼ 非礼停止

	親	疎	計
上	3	2	5
同	5	5	10
下	5	5	10
計	13	12	25

表9 ■ 指摘・批判

	親	疎	計
上	1	2	3
同	4	2	6
下	8	9	17
計	13	13	26

表10 ◆▼■ 過剰関与型

	親	疎	計
上	15	10	25
同	25	20	45
下	29	27	56
計	69	57	126

表11 ※*× 敬遠型

	親	疎	計
上	3	4	7
同	1	7	8
下	2	5	7
計	6	16	22

過剰関与型の表現内容は、上下関係が使用要因として影響し、敬遠型の表現内容は親疎関係が影響していることが明らかである。また、過剰関与型が敬遠型より5倍以上の出現数となる（このことは日本語におけるマイナス待遇表現行動の特色であろうか）。過剰関与型が目上に対して用いられにくいのは、日本語のプラス待遇表現が、相手とのへだてを重視し、距離を保つことによって行われることと関係があると思われる。つまり、相手を目上として扱うためには、「へだて」る必要があり、これが過剰な関与を抑制する要因となる。

一方、敬遠型はそもそも相手と話し手とをへだてる表現である。よって、その使用は上下関係には影響を受けにくい。もともと、敬遠型が疎の相手に対しては関与したいという欲求が希薄であることによるものと考えられる。

このように、表現内容の選択は、敬体の使用ほどの強い規制を受けず、聞き手との関係が大きく影響することが明らかになった。表現内容の選択は、マイナス評価表明するための有効な手段であり、マイナス待遇表現行動を考察する際には看過できない言語要素であるといえる。

2. 5. おわりに

以上、マイナス待遇表現行動について、その分析の問題点を検討し、表現形式・文体のみによるマイナス待遇表現行動の分析の限界を明らかにし、マイナス待遇表現行動に過剰関与型・敬遠型の2つのタイプを認めた。

これらを踏まえ、面接調査から得た自由回答のデータから、対人関係によるマイナス待

遇表現の諸形式の分析を試みた。発話の切り出し方や表現内容による分析を行い、妥当と思われる結果を出すことができた。これにより、談話構造上の特色、内容上の表現内容という言語要素、過剰関与・敬遠型という2つのタイプが、マイナス待遇表現行動の分析に有用であることが明らかになった。

また、その使い分けを上下関係、親疎関係といった分析軸で具体的に分析し、その要因について考察を行った。分析の結果は、当該フィールドにおけるマイナス待遇表現行動の特徴を示すものである。ここでは、その特徴が数値によって導き出された。これにより、他地域・多言語との計量的対照研究の可能性がより広く開かれたと考えたい。

3. マイナス待遇表現行動のスタイル — 運用規制が発話に与える影響 —

3. 1. はじめに

待遇行動（南1987）にともなって表れる表現には様々な特徴があり、待遇意図や表現欲求を表出するために用いられる言語要素は多岐にわたる。その要素には、語彙・文型・文体・文の長さ・音調・話題などが含まれ、それらの言語要素が複雑に、あるいは単純に組み合わせられ、これにより「様々」な表現が産出される。

マイナス評価を表明する際の、対人関係維持のために生じる規制は、こういった表現の組み合わせにどのような影響を与えるであろうか。言語や言語変種の待遇表現形式の豊富さや体系性、言語運用能力といった点においても規制が存在するであろう。そういった規制の中で言語要素の選択はいかに行われ、そして組み合わせられ、一まとまりの発話を構築しているのか。

こういった点に注目して調査結果を分析し、話し手の属性によるマイナス待遇表現行動のスタイルを明らかにする試みをここでは行う。なお、ここでは、対人関係上の使い分けを考慮するため、その規範形成が固まっていない若年層を分析の対象から外した。ここでは、話し手の属性によるマイナス待遇表現行動のスタイルを明らかにするという目的のため、若年層の調査結果も分析対象とする。

3. 2. 規制を受ける表現の諸要素

上向きの待遇表現は使い方を間違えると失礼になってしまうことが多い。

（飛行機内でスチュワーデスが眠っている乗客に）

お客様、お休み中申し訳ございませんが、シートベルトをお締め下さい。

この表現の言語要素を次のように操作すると失礼になってしまうことがある。

文型：お客様、お休み中申し訳ございませんが、シートベルトを締めなさい。

表現の意味的内容の連鎖順序（以下、連鎖順序）

：シートベルトをお締め下さいませ。お客様、お休み中申し訳ございません。

語彙：お客様、寝てるところすみませんが、シートベルトをお締め下さいませ。

表現量：お客様、シートベルトをお締め下さい。

変種：お客様、お休み中えらいすんまへん、シートベルトを締めとくんはなれ。

このように、プラス待遇表現の場合、文型・連鎖順序・語彙・表現量・言語変種などの言語要素²の選択には何らかのルールがあり、待遇意図を表すために、統制される性格を持つといえる。言い換えれば、場の品位や対人関係を維持するための言うべきことを言う性格が強い。これに対してマイナス待遇表現行動は、先にも述べたように、対人関係を維持するために設けられている規制を破る性格が強く、その規制を破ったことが送り手と受け手との間にマイナス評価表明の効果を与えればその表現はマイナス待遇表現になるのである。

その多様な表現レパートリーの運用には、場面、地域、性、世代、生業、個人の性格などの社会言語学的・心理学的な変数が関与することが予想される。さらに、その変数の効き方によって、マイナス待遇表現行動の際に考慮される、対人関係を維持するための「言うべきでない」言語要素が何であるかは異なってくるであろう。

3. 3. 分析の対象

上述のように、待遇表現行動において規制される言語要素は数多い。それらをすべて分析対象とするのは、非常に難しく、分析結果も難解なものとなろう。そこで、ここでは、分析対象を1) 表現内容、2) 表現内容の量（以下、表現内容量）、3) 言語形式のぞんざいさの3点とする。

1) の表現内容には、2. 2. で行った分類に「罵倒・脅し（ボケ、シバクゾなど）」を加える。2) の表現内容量とは、1) の分類にしたがって記号化した表現内容の数を指す。そして、3) の言語形式のぞんざいさでは、要求表現の述語部分・対称詞・卑罵的語彙の出現に注目する。

2) の表現内容量は、文節数が少なくても同じ表現内容を重ねて用いることによって過剰な関与となりうる。典型的な表現は次のようなものである。

オイ チョット ドコ イクネン。 チョット チョット ミテミー。

（強非礼場面のSN(34)の回答。親同が聞き手。）

このような点から、一つの表現内容には文節数に幅があったり、同種の表現内容が一つの発話にいくつかあったりするが、そういったものを一つ一つ数えた表現内容量も過剰な関与を行う手段として有効なマイナス評価表明の要素となると考えられる。

² 言語表現を構成する言語要素については林（1978）に詳しい。

3) の言語形式のぞんざいさの認定については、要求表現の述語動詞部分、呼びかけの形式、卑罵的自立語（卑罵的名詞＜ボケ・アホンダラ＞感動詞＜コラ＞・対称詞＜ワエ（お前）＞）について注目した。当該方言の要求表現述語部分におけるぞんざいさの相対的位置関係は表12のようなものとなる。

真田・宮治・井上（1995）では奈良県西吉野村・大塔村における命令表現が詳しく調査され、表12で見られる以外の語形が確認されている。しかし、今回は本調査で出てきたもののみを表にプロットした。そして、上表の網掛け部分をぞんざいな形式として扱う。網掛けのない「ミー（下降調）」についてもややぞんざいであるが、より極端な形式をここでは扱う³。

表12 要求表現の述語部分 今回の調査で得た主な語形のみ

		ぞんざい ←→ 丁寧・改まり	
強 要 度 弱	強	ミロ ミンカ ミヨ	ミナサイ
		ミー（下降調）	
		ミー（平進）	
		ミテ	ミトクナーレ
	弱		ミテクダサイ ゴランクダサイ

3. 4. 回答の特徴

3. 4. 1. 回答の全体像

まず、表13～表16に回答の全体像を示した。それぞれ弱非礼場面・強非礼場面に対する聞き手ごとの回答を上記の分類に基づき記号化したものである。黒系統の記号（×※を含む）は、マイナス評価が明示的な表現内容を表したものである。言語形式のぞんざいさについても網掛けで示しているので、表が黒っぽいほどぞんざいなことばづかいであるということになる。また、無視するという回答も表に反映させた。多くの情報が表中にありすぎ複雑なものとなったことは否めないが、話し手の属性ごとに明確な傾向を読みとることができる。その解釈は後に述べるとして、まずは回答の特徴について述べる。

³ 動詞の依頼形（テ形）や命令形に終助詞「ヨ」（当該方言では「ヤ」も入る）が付くことによって、要求の度合いが変わること（上野 1972）を踏まえた。

表13 実年齢層弱非礼場面 S=speaker H=hearer

	S\H	親・上	親・同	親・下	疎・上	疎・同	疎・下
実年齢層男	TU(58)	○□	○□	○□	○□	○□	○□
	TN(54)	□□	□□	□□	□□	□□	□□
	FT(54)	□	□	□	□	□	□
	MH(50)	□	□	□	□	□	□
	KH(44)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	HY(42)	□□	□□	□□	□□	□□	□□
	TN(38)	○▲	○●	○●	○●	○●	○▲
	NT(35)	○□	○□	○□	○□	○□	○□
	HH(35)	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲
	SN(34)	○□	○□	○□	○□	○□	○□
実年齢層女	ST(56)	○▲	○▲	○▲	○▲	○▲	○▲
	AU(55)	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲
	KT(53)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	H(49)	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲
	HN(48)	○▼▲	○▼▲	○▼▲	○▼▲	○▼▲	○▼▲
	HH(47)	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲
	TU(47)	○□	○□	○□	○□	○□	○□
	YH(33)	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲
	KT(32)	○□	○□	○□	○□	○□	○□
	IF(30)	□	□	□	□	□	□

表14 実年齢層強非礼場面 S=speaker H=hearer

	S\H	親・上	親・同	親・下	疎・上	疎・同	疎・下
実年齢層男	TU(58)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	TN(54)	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲
	FT(54)	◆	◆	×	×	×	×
	MH(50)	*	*	◆	*	*	○◆
	KH(44)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	HY(42)	◎□	◎□	◎□	◎□	◎□	◎□
	TN(38)	○▼▲	○▼▲	○▼▲	○▼▲	○▼▲	○▼▲
	NT(35)	◎□	◎□	◎□	◎□	◎□	◎□
	HH(35)	○◆	○◆	○◆	○◆	○◆	○◆
	SN(34)	○◆	○◆	○◆	○◆	○◆	○◆
実年齢層女	ST(56)	○▼▲	○▼▲	○▼▲	○▼▲	○▼▲	○▼▲
	AU(55)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	KT(53)	◆	◆	◆	◆	◆	◆
	H(49)	◎□	◎□	◎□	◎□	◎□	◎□
	HN(48)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	HH(47)	◆	◆	◆	◆	◆	◆
	TU(47)	◆	◆	◆	◆	◆	◆
	YH(33)	◆	◆	◆	◆	◆	◆
	KT(32)	▼	▼	▼	▼	▼	▼
	IF(30)	※	※	※	※	※	※

表15 若年齢層弱非礼場面 S=speaker H=hearer

	S\H	親・上	親・同	親・下	疎・上	疎・同	疎・下
若年齢層男	KH(15)	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲
	YS(14)	○▲	○▲	○▲	○▲	○▲	○▲
	YK(14)	□	□	□	□	□	□
	RS(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	SK(14)	□	□	□	□	□	□
	SA(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	TO(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	KO(13)	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲
	HM(13)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	TH(13)	○□	○□	○□	○□	○□	○□
若年齢層女	YF(18)	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲
	WH(18)	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲	□▲
	HW(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	TM(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	YM(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	HF(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	MN(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	HM(14)	◎□	◎□	◎□	◎□	◎□	◎□
	KO(13)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	SK(13)	▲	▲	▲	▲	▲	▲

表16 若年齢層強非礼場面 S=speaker H=hearer

	S\H	親・上	親・同	親・下	疎・上	疎・同	疎・下
若年齢層男	KH(15)	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲
	YS(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	YK(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	RS(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	SK(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	SA(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	TO(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	KO(13)	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲
	HM(13)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	TH(13)	▼	▼	▼	▼	▼	▼
若年齢層女	YF(18)	※	※	※	※	※	※
	WH(18)	※	※	※	※	※	※
	HW(14)	◆	◆	◆	◆	◆	◆
	TM(14)	◆	◆	◆	◆	◆	◆
	YM(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	HF(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	MN(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	HM(14)	▲	▲	▲	▲	▲	▲
	KO(13)	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲	▼▲
	SK(13)	◆	◆	◆	◆	◆	◆

凡例

- 呼びかけ:…サン、チョット、オイ、ホラ、コラなど
- ◎切り出しの断り:オハシチュースミマセン、ヨロシデショカなど
- 情報描写:ミツケタ、アリマシタ、ココデスなど
- ◇意向うかがい:コチガイマスカ、アトドーシマショ。など
- 批判的状况描写:ヒトモタノドイテ、ジョーシキハズレタスヨなど
- ◆詰めより:ナト(なんだ)、ナニカガエテン、ドコイノなど

- ▼非礼停止要求:エーカゲンニシロ、シャベッテヤント、マテなど
- ▲改善要求:ミロ、ミテ、ミテグサイ、ミテクレンなど
- ★罵倒・脅し:ホケ、ムカツク、シバクゾなど
- *敬遠:モーションデー、シツレーシヨロシデショカなど
- ※敬遠:ワカラナイデオカエシマス、モーサガサ、など
- ×無視

- 結問の文型
- 要求表現の命令形・結問形
- 要求表現の命令形・卑罵的語彙の併用
- 敬体・丁寧体

これらの表にもとづき、量的に集計したのが表13である。

表17 各属性の表現使用のうちわけ

	黒記号の総 数 (a)	記号の総数 (b)	a / b (黒記号 の割合)	一発話内の記号の種類 (c)	ぞんざい形式を含 む発話数 (d)
実年男性	1 1 5	2 4 5	4 6. 9 %	1. 8 0 種類	2 2 回答
実年女性	1 7 6	2 9 7	5 9. 3 %	2. 2 5 種類	0 回答
若年男性	1 2 6	1 7 2	7 3. 3 %	1. 4 1 種類	6 2 回答
若年女性	1 4 7	1 7 4	8 4. 5 %	1. 4 3 種類	1 2 回答

表17ではまず、世代差が目につく。実年層は若年層よりも記号の総数 (b) , つまり表現内容が多い。また、実年層では若年層より多くの種類の記号が用いられている (c) 。

表13～16を見ると、若年層男性は横線の網掛けが多く、聞き手が目上の場合を除いて黒の色合いが強くなっている。これは、マイナス評価を表明するために、ぞんざいな言語形式が多く用いられていることを示す。

また、表17の集計結果では、ぞんざいな言語形式 (d) は、若年層男性 > 実年層男性 > 若年層女性の順で多く用いられ、実年層女性には用いられていない (これは第5章での調査と同じ順位である)。つまり、ぞんざいな形式は女性より男性が、実年層より若年層が多く用い、世代より性別が運用の規制に対する強い要因であることになる。ほかに世代差より性差が強く効いているのは、黒記号の総数 (a) である。男性より女性の方がマイナス評価を明示する表現内容を用いる傾向にあるという結果になった。また、表17の黒記号の割合は一回答内の記号数にしめる黒記号の数を表したものである。これを見ると若年層は一回答内の70%～80%はマイナス評価を明示する表現内容であり、実年層より30%程度高い割合となっている。(b)の結果と合わせると若年層が短い発話で端的にマイナス評価が明示的な表現内容を用いていることがわかる。

3. 4. 2. 表現態度と発話の特徴

3. 4. 2. 1. 表現態度×ぞんざいな言語形式

ここでは各言語要素の使い分けではなく、言語要素の運用にかかる規制に注目するので、表現態度 (怒った口調) の程度ごとに言語要素の出現を見ていく必要がある。まずは、ぞんざいな言語形式の出現を見ていく。

口調がどの程度怒っているか (表現態度の程度) とぞんざいな言語形式の用いられ方の関係は表18～表21のようになる。

命令形の「ミロ」「ミヨ」「ミンカ」については、実年層男性と若年層女性が、「とても怒った口調で」という表現態度のときのみ、大幅にその出現率が上昇する (実年男性10%

台→40%台、若年女性10%台→30%弱)。もちろん、用いない場合の方が多いのであるが、ぞんざいな命令形が使われるとしたら極めて感情的な口調のときであるということがわかる。一方、若年層男性は、表現態度が強くなるにつれて徐々に命令形の出現率が上昇する。マイナス評価表明のために、この中では最も段落的に命令形が使い分けられている。実年層女性では命令形式がまったく用いられず、ぞんざいな言語形式の運用に対して厳しい規制が存在していることが示されている。このように、命令形式は属性ごとに個性を持って運用されていることが分かる。

これに対して、卑罵語の運用は、若年層男性の「とても怒った口調」のときに集中し(27.3%)、段階的な様相をほとんど見せない。評価段階・表現態度決定段階ともに極めてマイナスの方向性を持ったときに卑罵語は運用される。

表現態度×ぞんざいな言語形式

表18 実年層男

口調\ぞんざい形	命令	卑罵語	総回答数
とても怒った	42.9%(9)	4.8%(1)	21
怒った	14.3%(2)	0.0%(0)	14
少し怒った	17.9%(5)	0.0%(0)	28
ほんの少し怒	10.3%(3)	3.4%(1)	29
怒っていない	12.5%(3)	0.0%(0)	24

表19 実年層女

口調\ぞんざい形	命令	卑罵語	総回答数
とても怒った	0.0%(0)	0.0%(0)	2
怒った	0.0%(0)	0.0%(0)	15
少し怒った	0.0%(0)	0.0%(0)	35
ほんの少し怒	0.0%(0)	0.0%(0)	37
怒っていない	0.0%(0)	0.0%(0)	31

表20 若年層男

口調\ぞんざい形	命令	卑罵語	総回答数
とても怒った	77.3%(17)	27.3%(6)	22
怒った	65.0%(13)	0.0%(0)	20
少し怒った	50.0%(11)	0.0%(0)	22
ほんの少し怒	32.3%(10)	0.0%(0)	31
怒っていない	44.0%(11)	0.0%(0)	25

表21 若年層女

口調\ぞんざい形	命令	卑罵語	総回答数
とても怒った	28.6%(6)	9.5%(2)	21
怒った	10.5%(2)	0.0%(0)	19
少し怒った	0.0%(0)	0.0%(0)	24
ほんの少し怒	11.1%(3)	3.7%(1)	27
怒っていない	3.6%(1)	0.0%(0)	28

(%は口調ごとの総回答数に対するぞんざい形式が含まれていた回答数の割合。()内は実数。また、総回答数の合計が属性間で一致しないのは「無視する」という回答は総回答数にはカウントしていないためである。)

この点は、マイナス待遇表現行動における卑罵語の用いられ方の大きな特徴であるといえてよいだろう。「卑罵語」とその他の「感情卑語」、また、「卑罵・罵倒」と「マイナス待遇表現行動」とは、こういった性格の有無によって、区別されるべきであろう。卑罵語を運用するような極めて強いマイナスの性格の表現態度をもった言語行動を卑罵的なマイナス待遇表現行動と呼んでもよいかもしれない。となると、上述した「とても怒った口

調」で急増する実年層男や若年層女における命令形の使用は、表現態度形成の観点から見て、卑罵的なマイナス待遇表現行動であるということになる。

3. 4. 2. 2. 実年層女性の表現スタイル

ある言語要素の運用に強い規制がある場合、表現欲求を充足させるためにどういった処置がなされるのか。その処置のあり方を見るために、ここではぞんざいな言語形式の運用に強い規制がかかっている実年層女性の表現スタイルに注目する。

ぞんざいな言語形式でマイナス評価を表明できない実年層女性は、マイナス評価を強く表明できないのではなく、他の言語要素の運用によってマイナス評価表明を行っているという仮説を第5章で示した。しかし、第5章では、その場合どういった言語要素をどのように運用してマイナス評価を表明しているのかについてまでは、考察が及ばなかった。ここで扱っているデータにおいても、実年層女性ではぞんざいな言語形式は全く用いられていないが、その反面、実年層女性では記号量、黒系統の記号の出現数が多い(表2(a)(b)参照)という結果が出ている。

実年層男女が一つの回答で、黒系統の記号のマイナス評価が明示的な表現内容をいくつか用いているのか、口調の程度ごとに見てみよう(表22, 表23)。

表現態度×マイナス評価が明示的な表現内容

表22 実年層男性

口調		一発話内の黒記号の数						相関係数
		0	1	2	3	4	5	一発話内黒記号平均出現数
とても怒った口調	5点	1	13	5	2	/	/	1.38
怒った口調	4点	3	7	1	2	1	/	1.26
少し怒った口調	3点	7	9	10	2	/	/	1.25
ほんの少し怒った口調	2点	14	12	3	/	/	/	0.62
怒った口調ではない	1点	13	8	3	/	/	/	0.58

表23 実年層女性

口調\黒記号数		一発話内の黒記号の数						相関係数
		0	1	2	3	4	5	一発話内黒記号平均出現数
とても怒った口調	5点	/	/	/	/	1	1	4.50
怒った口調	4点	/	4	6	5	/	/	2.07
少し怒った口調	3点	1	18	13	3	/	/	1.51
ほんの少し怒った口調	2点	1	17	16	2	1	/	1.60
怒った口調ではない	1点	7	21	3	/	/	/	0.87

口調の程度によって点数を付し（5点～1点），一発話内の黒記号の平均出現数を出し，両者の相関係数を計算したところ実年層男性は0.918，女性は0.871となり共に強い相関が認められた。つまり，実年層男女ともに，怒った口調の程度が強くなるほど，黒記号の出現数は多くなる傾向がある。ただし，実年層男性は口調の強さによる一発話内の黒記号数は増加の幅が小さい。一方，実年層女性は口調の強さによる，一発話内の黒記号数の増加の幅は大きくなっている。実年層女性は強いマイナス評価の表明に，「問いつめ」「非礼停止」「非礼改善」「非礼の指摘・批判」などの表現内容を用いることが，重要な手段となっているのである。

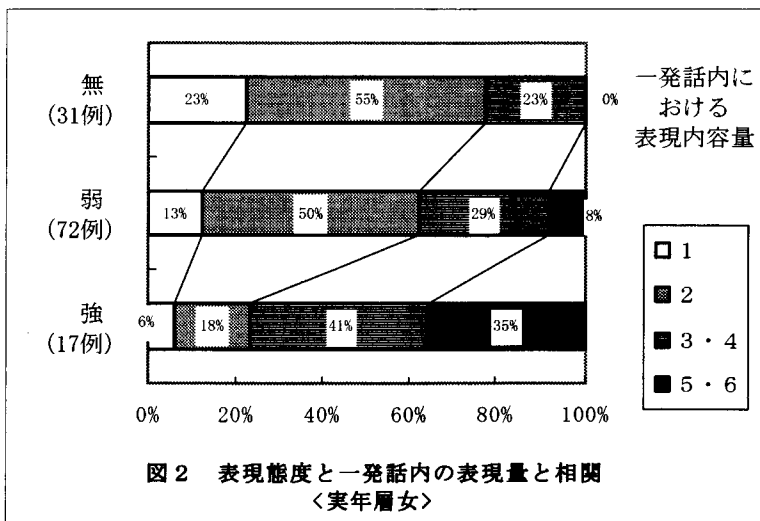
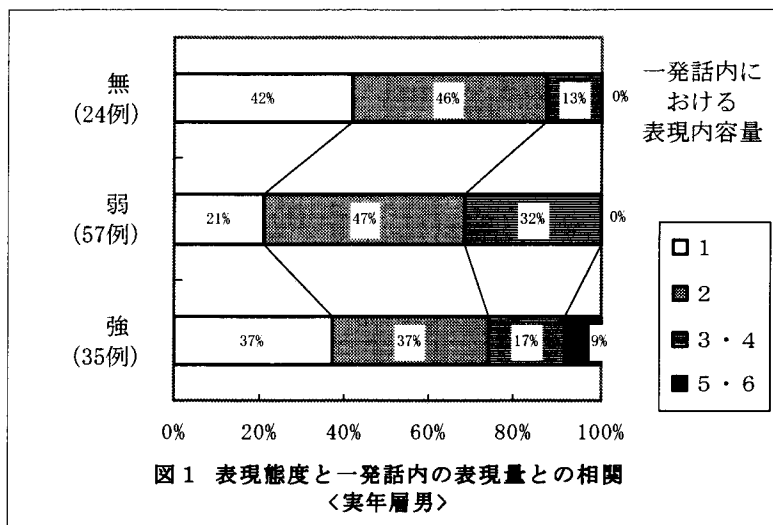


図1，2の凡例

無＝怒った口調ではない 弱＝ほんの少し怒った口調・少し怒った口調

強＝怒った口調・とても怒った口調 （ ）内はそれぞれの口調における発話の総用例数

また、図1, 2は口調の強さと一発話内の表現内容量との相関を示したものである。凡例は表現内容量の数を表している。口調の強さに伴う、表現内容量の推移の男女差がグラフからも、相関係数からも明らかである（男性0.484, 女性0.886）。実年層男性では口調の強さと表現内容量との相関は弱い、実年層女性では強い相関がある。本章2節では、談話構造のくどさが、相手への過剰な関与となり、マイナス評価表明の手段になりうることを述べた。実年層女性は、ぞんざいな言語形式をほとんど使用しないが、多くのことを述べることによって、相手に対して過剰な関与を行う傾向がある。

以上のような状況から実年層男性に比べて、実年層女性は表現内容・表現内容量によって聞き手に過剰な関与をし、マイナス評価を表明するという方向性を読みとることができる。実年層女性はぞんざいな言語形式の運用が厳しく規制されているために、マイナス評価が明示的な表現内容を用いたり、表現内容量を多くしたりして、過剰に関与する。これによってぞんざいな言語形式の運用が強く規制されて用いられないことを補償し、実年層の女性らしいマイナス待遇表現行動のスタイルを構築しているということになる。

3. 4. 2. 3. マイナス待遇表現行動のスタイル

以上から、マイナス評価表明のためにどの言語要素の運用に重きを置くかによって、マイナス待遇表現行動にはいくつかの言語表現スタイルを想定することができる。若年層男性の例に見る言語形式重視型、若年層女性に見るぞんざいな言語形式を用いず少ない表現内容量で端的にマイナス評価を表明する表現内容重視型、実年層女性に見る表現内容とその量によってマイナス評価を表明する型が存在することを知り得るのである。これらの典型的な例は以下のようなものとなる。

典型例

言語形式重視型： コッチ ミロヨ ボケ

(強非礼場面, T0(14)Mの回答。疎同が聞き手)

表現内容重視型： ナニ ヤッテンヨ コッチ ミーヨ

(強非礼場面, SK(13)Fの回答。親同が聞き手)

表現内容+量利用型： チョット マチ ジブンノコトヤロ ヒトニ ヤラシトイテ ナニ
シテンノ ヨーカンガエ

(強非礼場面, H(49)Fの回答。疎下が聞き手)

もちろん、これらの表現スタイルには折衷型・複合型が存在していることは断っておかなくてはならない。実年層男性はぞんざいな言語形式・表現内容量を4属性間で2番目に多く用いる(表2参照)折衷型である。また、表3～表6を見れば分かるように個人差があることも事実である。しかし、これまでの分析からも明らかなように、同じ言語要素でも運用への規制の強さは話者の属性ごとに異なる。そこで規制を破りやすい別の言語要素によってマイナス評価表明を行うため、言語要素の運用の仕方は属性ごとに異なる方向性を

もつこととなる。つまり、ある属性にとって運用に強い規制がある言語要素Aでマイナス評価を表明できない場合、別の規制の弱い言語要素Bの運用規制を破ることで、マイナス評価表明という表現欲求が補償されているという点が注目されるのである。

3. 5. 表現スタイルの解釈

これまでの分析により、同じ場面設定を与えても、マイナス評価を表明するに際して属性ごとに特定の言語表現スタイルが志向されるという傾向が認められた。何故、そういった現象が生じるのかについて、筆者の解釈を以下に示す。

まず、若年層は表現内容量・記号の種類も少ない（表2～4参照）。よって、記号の組み合わせパターン数も実年層の半分以下である（実年層88パターン、若年層35パターン）。若年層は多様な表現内容を複雑に組み合わせるよりも、ぞんざいな言語形式を用いることによって強いマイナス評価を表明している。これには社会言語能力・語用論的能力（渋谷1992）の未成熟さが関わっているであろう。つまり、能力上の規制が存在すると考えられる。さらに、若年層男性には、目上以外であれば、ぞんざいな言語形式の運用が憚られない回答状況が見られた。目上以外の相手にはぞんざいな形式の運用が比較的許容されるという、ことばづかいに関する共通認識が若年層男性内にあると考えられる。また、若年層女性の場合、ぞんざいな言語形式の出現が少ないことから、その運用には強い規制があると考えられ、さらに社会言語能力・語用論的能力も未熟であることから、聞き手との関与を避ける敬遠型の表現が多い。このことは運用に規制がある言語要素以外によって、表現欲求が満たされているという点で補償的であるといえる。

実年層になると、ぞんざいな言語形式の運用は同等、目下に対しても規制が強くなる。しかし、この規制に対して、多彩な種類の表現内容を駆使することによってマイナス評価の表明が行われる。また、ぞんざいな形式の運用に対する規制が最も強いと思われる実年層女性は、関与しすぎてはいけないという規制を破り、表現内容量を増やすことでマイナス評価表明を行っている。これについても、マイナス評価を表明するという表現欲求の充足が規制の強い言語要素によってできない場合、規制の弱い別の言語要素の運用規制を破ることで、それを補うという言語行動の性質を示唆している。ぞんざいな言語形式の運用にやや強い規制がかかる実年層男性は、表現内容という別の規制の弱い言語要素でマイナス評価を表明し、表現欲求を補償しているが、表現内容量はマイナス評価表明に強く関わっていない。

3. 6. むすび

ここではマイナス待遇表現行動のスタイルを、言語形式・表現内容・表現内容量という複数の言語要素から分析した。データの量、音調、言語変種の選択など分析する言語要素の選定などに課題は残るが、場面設定から得られた一まとまりの発話が構築されるとき

方向性について、社会言語学的な観点から分析することができた。

ここでは世代・性という観点からの分析が中心となった。しかし重要なのは、世代差・性差が確認されたことのみではない。今回の分析を通してマイナス待遇表現行動の発話レベルの考察において、前提となるべき事柄が2つ明らかになった。その一つは、マイナス待遇表現行動への規制は話者の属性によって異なっていることである。もう一点は、ある言語要素に使用の規制が強い場合、規制の弱い言語要素によってマイナス評価を表明し表現欲求を補償する、いわば「補償的表現スタイル」が存在するということである。この場合、限られた言語要素を個別に分析して、言語行動のあり方の違いを考察することは危険である。

さらに、言語要素にかかる規制のあり方は人々の言語行動に関する慣習、能力などによって影響されていると考えられる。女性が上品なことばづかいを好むという慣習はこれまで指摘が多いが、その慣習が発話に及ぼす影響についても、ここではその一端を明らかにすることができた。また、命令形などのぞんざい形式は話者の属性によって、運用のされ方が大きく異なった。発話意図と言語形式との結びつき方が属性によって異なっていることを示す一例であるといつてよいだろう。

ぞんざいな言語形式が実年層の女性にこれほどにも強く規制されている理由については、今回は資料の性質上述べることができなかった。この点については規制のありかたの通時的考察が必要となるかもしれない。しかし、これらの問題は女性の言語行動に限らず、さまざまなフィールドに適応して考えるべき研究課題である。

参考文献

- 上野田鶴子（1972）「終助詞とその周辺」『日本語教育』17 日本語教育学会
- 大石初太郎（1975）『敬語』筑摩書房
- 真田信治・宮治弘明・井上文子（1995）「紀伊半島における方言の動態」『関西方言の社会言語学』世界思想社
- 渋谷勝己（1992）「言語習得」『社会言語学』おうふう
- 西尾純二（1998a）「マイナス待遇表現行動分析の試み—非礼場面における言語行動規範について—」『日本学報』17 大阪大学文学部日本学研究室
- 西尾純二（1998b）「マイナス待遇行動の表現スタイル—規制される言語行動をめぐって—」『社会言語科学』1-1 社会言語科学会
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子（1996）「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較—」『日本語教育』88 日本語教育学会
- 林 四郎（1978）『言語行動の諸相』明治書院
- 比嘉正範（1976）「日本語と日本人社会」『岩波講座日本語 1 日本語と国語学』岩波書店
- 南不二男（1987）『敬語』岩波書店
- W. Labov（1971）Language in the inner city. University of Pennsylvania Press.

第7章

大学生におけるマイナス待遇表現行動の地域的バリエーション

— 待遇表現行動の地域的変異 —

1. はじめに

これまでの考察は、フィールドを特定地域に絞って行ってきた。分析考察は、いずれも表現産出のプロセスについてのモデルを利用したものである。本章においても、そのモデルを応用し、地域間比較を行い、マイナス待遇表現行動の対照研究の一例を示す。

一つの言語内には、言語行動のバリエーションが存在するといわれる。待遇表現行動も言語行動の一種であるが、日本語の中には言語行動のバリエーションがどのような形で存在するであろうか。待遇表現形式のバリエーションはこれまでに数多く確認されている。その使い分けについても地域差や集団による違いが議論されてきた。しかし、事態評価から表現選択に至る表現産出プロセスを対象とした研究は、バリエーションの領域にまで及んでいない状況である。

本章では、待遇表現形式のバリエーションや、場面による使い分けの多様性だけではなく、ある事態に接したときの評価や評価に基づく表現態度形成、そして表現選択に至るまでのプロセスに、地域的な多様性が存在することを明らかにする。

2. 表現行動のバリエーション

まずは、「表現行動のバリエーション」という用語について述べる。「表現行動」という術語は、言語行動と非言語行動とを包含する活動として用いる¹。バリエーション

(variation; 変異)は、意味的同一性(referential sameness)が確保された複数の言語形式をさす。「ことばの意味」という点を厳密に考えれば、このバリエーションの考え方を言語行動・表現行動に当てはめるのは、「バリエーションの内容を拡大して解釈」(渋谷1998)しているということになる。しかしながら、渋谷氏も述べているように、バリエーションの規定の拡大によって、「研究対象もさまざまに広がる可能性」(渋谷 同)を持ち、研究対象の広がりや言語現象の特徴を多角的に把握することにつながる。

表現行動についてバリエーションを考える場合、「同一性」を何に求めるかによって、

¹ 言語行動と非言語行動を区別し、両者を「表現行動」と呼ぶ林(1978)と立場を同じくする。ただし、林(1978)が表現行動の下位分類に「意味」「形式」を置くことについては筆者は疑問をもつ。なお、本調査では非言語行動についてのデータは得られたものの、質・量ともに十分とは言えないため、考察から外すこととした。

様々な性質の現象が考察対象となる。「依頼」「詫び」など言語行動の目的に同一性を求めた場合に現れる表現行動のバリエーション、電話での話の切り出し方などの会話を構成する特定の機能的なまとまりに同一性を求めた場合に現れる表現行動のバリエーションなどである。本論のテーマにおける表現行動のバリエーションはこれらとはまた異なる性質を持つものである。例えば、友人に自分が描いた絵を見せられるという「状況」に同一性を求めても、さらに次のA、Bのような異質の表現行動のバリエーションが考えられる。

A「状況把握（の一側面）」に同一性を求め、現れてくる表現行動のバリエーションを見る。

同一性：絵はとっても下手だとマイナス評価で状況を把握

バリエーション：おまえ、絵が下手だなあ。（評価をそのまま表現する）

うーん、何とも言えないなあ。ぼくは好きじゃないかも。

（評価を抑制して表現する）

うん、うまいうまい。（評価と裏腹の表現をする）

B「表現態度（の一側面）」に同一性を求め、現れてくる表現行動の違いを見る。

同一性：絵が下手であるという評価を表出するという表現態度

バリエーション：おまえ、絵が下手だなあ。（相手の能力について言及する）

汚い絵だな。（絵についての言及をする）

うつむいて、「ダメダメ」と手を振る。（非言語行動で表現する）

以上のように、表現行動のプロセスのどの段階に同一性を求めるかによって、同じ「状況」で現れる表現行動のバリエーションは、より細かく分類できる。こういったバリエーションのうち、本章ではとくにBについてアンケート調査の結果をもとに考察する。

3. 調査

3. 1. 調査対象

秋田大学、大阪大学、追手門大学、鹿児島大学の大学生348名のデータを対象とする。調査は都留文科大学（59名）、一橋大学（8名）に対しても行ったが、データの量や男女比率に問題があるため、今回は分析・考察の対象として採用しなかった。回答者の情報は表1を参照されたい。なお、回収されたデータのうち、有効回答は337件であった。回答者の属性の内訳は表2のとおりである。

インフォーマントの選定において、地域の言語形式の推移や記述を考察対象とする方言調査では、言語形成期と呼ばれる0歳から15歳前後の居住地を問題とすることが多い。この言語形成期に外住歴がないことが、地域を代表することばの話し手であるための必要条件となる。しかし、対人関係や集団維持に関わる言語行動においては、幼少期に過ごした地域よりも、先輩後輩などの関係がはっきり現れてくる中学生からの居住地域が重要であ

ると判断した。よって、今回の分析では回答者の中学・高校・大学における居住歴を重視している。また、学校を卒業し、職場などに入れば、期待される表現行動は職種や集団の性質によって大きく異なることが予想される。よって、大学生を対象とした本調査は、地域的な表現行動の違いを検証するのに適しているといえる。

表1 回答者の在籍大学と男女 (単位：人)

大学（地域）	地域出身者			地域外出身者			合計
	男	女	計	男	女	計	
秋田大学	58	51	109	29	3	32	141
大阪大学（関西圏）	6	13	19	0	2	2	21
追手門大学（関西圏）	38	21	59	4	10	15	73
鹿児島大学	54	54	108	0	5	5	113
合計	156	139	295	33	20	53	348

表2 全回答者の属性 (単位：人)

外住歴		性別		年齢						
あり	なし	男	女	18歳	19歳	20歳	21歳	22歳	23歳以上	不明
53	295	189	159	25	162	70	52	27	10	2
学年				クラブ・サークル						
1	2	3	4以上	体育会	文化系	両方	無所属	その他・無回答		
179	93	49	27	96	76	4	137	35		

表1では地域出身者と地域外出身者とに分けて集計している。この「地域出身者」とは、大学が所在する地域で中学・高校期を過ごした者のことである。秋田大学では東北圏、追手門大学・大阪大学では関西圏、鹿児島大学では九州圏の出身者を地域出身者としている。ただし、関西圏以外は各大学が所在する県の出身者が大多数を占めている²。よって、追手門大学・大阪大学の地域出身者は「関西圏」で、秋田大学と鹿児島大学の地域出身者はそのまま大学名で分析を行うこととする。

3. 2. 調査法

調査法としては、国内の各地である程度量的なデータが必要であるため、質問紙法（アンケート調査）を採用した。この調査法では面接調査のように、回答の際の音調や質問以

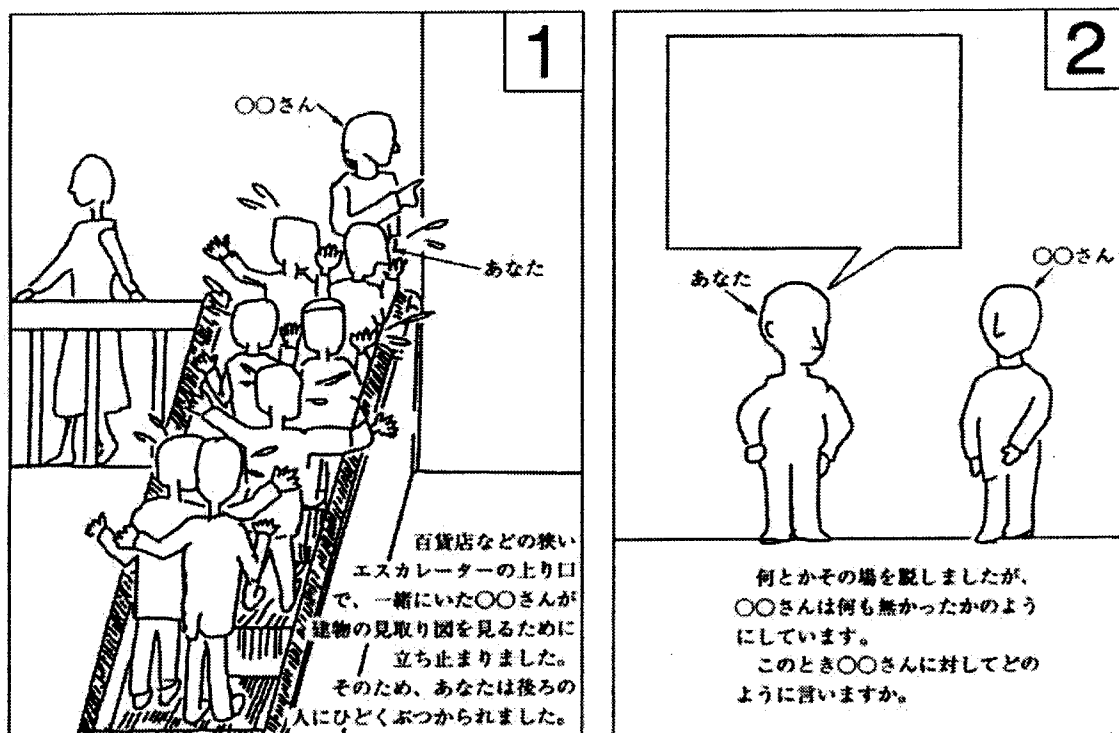
² 東北圏出身者109人のうち89人（81.7%）が秋田県出身者、関西圏の地域出身者78人のうち42人（53.8%）が大阪府出身者、九州圏出身者108人のうち106人（98.1%）が鹿児島県出身者である。

外の部分での内省などについて、詳しい情報を得られない。今回の調査ではパラ言語・非言語行動情報についても回答を得たが回答数が少ない。よって、パラ言語・非言語行動情報を無視した上で、それでもなお、現れてくる表現形式の特徴を見ることとなる。

3. 3. 状況設定と回答項目

本調査で行った状況設定は、次のイラストに示したものである。アンケート用紙には、このイラストと状況説明が付されている。イラストで状況を説明したのは、文章から回答者が思い浮かべる状況に、なるべく個人差が生じないようにするためである。

この状況で、人間関係による表現行動の規制がもっとも緩やかであると予想される「地元が一番親しい同性の友人」が話し相手の場合について分析・考察を行う。なお、「地元」としているのは、新入生の場合、まだ友人がいない可能性を考慮してのことである。



そして、話し相手ごとにどの程度のマイナス評価³で、事態を評価しているかを、図1のようなスケールに丸をつける形で回答してもらった。次に、どのような発話（発話がないときは行動）をするかについて回答を得ている。さらに、表現態度形成段階の特徴を、図2のようなスケールで回答してもらっている。なお、これらのスケールは集計・分析する

³「腹立たしさ」をどの程度表現するかはマイナス待遇行動の一側面に過ぎない。しかし、「冷たくあしらう」「攻撃的に言う」「皮肉にほめかす」など、非言語行動を含めた広範な表現行動を「腹立たしさを表現する」ということができる。

際、左から順に1～5の評点を与えている。

話し相手が〇〇の場合、どの程度腹立たしく思いますか

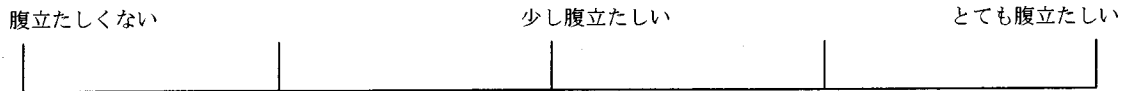


図1 事態へのマイナス評価のスケール

その言い方・行動から相手に対して腹立たしさが、どの程度表現されますか。

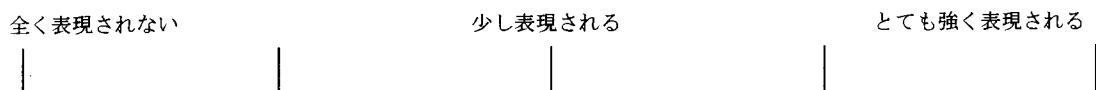


図2 表現態度のスケール

表現産出のプロセスとしては、表現態度の形成の後に表現・行動の選択がなされる。しかし、表現態度についての回答は発話・行動の回答の後にした。表現態度を先に回答した場合、表現態度の回答に発話・行動の回答を無理に合わせようとして、不自然になることを避けるためである。また、アンケート調査は意識を聞き出すものであり、実態と一致するものではないということがよくいわれる。しかし、回答の場で内省される意識は、実際の行動の準備状態であるともいえる。そういった表現行動に対する態度に地域差を含む属性差、または属性差を越えた一般的傾向があるとすれば、それは言語行動の特徴を説明する重要な調査結果というべきであろう。

4. 事態評価から表現態度を形成するまで

4. 1. 表現態度形成におけるプロセスの分類

ここでは発話・行動の選択に至るまでの表現意識のプロセスを考察する。上述の調査法では、事態評価から表現態度を形成するまでに、いくつかの回答パターンを設定することができる。5段階評価のスケールを2つ回答するため、理論的には25の回答パターンが存在する。しかし、これら25パターンに意義付けがないまま、全て個別に分析することは考察を煩雑にする。そこで回答パターンから推測される表現行動意識から、表3のような5つの大分類と13の小分類を行った。

まずは、評点を<1><2, 3><4, 5>にくくり、それぞれを<ゼロ><弱><強>で分類した。次に事態へのマイナス評価と表現態度評点が一致しない場合は、その差の絶対値が2以上のものと2未満のものとを区別している。ただし、どちらかの評点が1の場合はもう一方が<弱>か<強>かで分類した⁴。この基準によって、回答パターンとその

⁴ スケールでは連続しているが、評点1は評点2以上とはその意義が大きく異なる。「腹立たしくない」の回答だと、回答者がプラス方向の評価をしている可能性さえ考慮しなければならないのである。よって、

分類を整理したものが表3である。

表3 表現態度形成プロセスの分類

分類 記号	分類		回答パターン
	大分類	小分類	みなしの評価－表現態度
a	無評価無表出型	同左	1－1
b	一致型	弱評価一致型	2－2 3－3
c		強評価一致型	4－4 5－5
d	無表出型	弱評価無表出型	2－1 3－1
e		強評価無表出型	4－1 5－1
f	抑制型	弱評価微抑制型	3－2
g		強評価微抑制型	4－3 5－4
h		強評価強抑制型	4－2 5－2 5－3
i	誇張型	無評価微誇張型	1－2 1－3
j		無評価強誇張型	1－4 1－5
k		弱評価微誇張型	2－3 3－4
l		弱評価強誇張型	2－4 2－5 3－5
m		強評価誇張型	4－5

4. 2. 表現態度形成の傾向

4. 2. 1. 表現態度形成の属性差

表3の分類にしたがって、回答者の属性ごとに集計した結果を表4に示す。

以下の分析は、表現・行動を選択するまでのプロセスを問題としており、言語形式の具体的な考察は次節で行う。表4には性差・地域差のデータを示したが、フェイスシートに記入された他の属性（年齢差・学年差・所属クラブ・サークル）においても有意差検定を試みた。このうち、回答パターンの有意差が確認されたのは、回答者の所属するクラブ・サークルの違いにおいてのみである（表5）。

表現態度形成の属性差は、年齢や学年、そして地域差よりも、社会集団の性質によって強く生じているのである。体育会系では強いマイナス評価を抑制する（g型）タイプの回答がない。また、弱いマイナス評価を誇張して表現（l型）している。これらの点に文化系サークルの表現態度形成との違いがみられる。

評点0とすることもできないし、単純に差をとることもできない。

表4 事態評価から表現態度形成までの地域差

	全体	男	女	秋田大	関西圏	鹿児島大
a 無評価無表出	9.2	11.5	6.5	8.7	7.7	10.4
b 弱評価一致型	35.0	32.4	38.1	34.0	37.2	40.6
c 強評価一致型	6.8	5.5	8.4	7.8	10.3	2.8
一致型合計	41.8	37.9	46.5	41.7	47.4	43.4
d 弱評価無表出型	4.7	4.4	5.2	5.8	3.8	4.7
e 強評価無表出型	0.3	0.5	0.0	1.0	0.0	0.0
無表出型合計	5.0	4.9	5.2	6.8	3.8	4.7
f 弱評価微抑制型	8.9	6.6	11.6	8.7	9.0	8.5
g 強評価微抑制型	5.0	5.5	4.5	4.9	6.4	3.8
h 強評価強抑制型	1.5	1.6	1.3	2.9	0.0	1.9
抑制型合計	15.4	13.7	17.4	16.5	15.4	14.2
i 無評価微誇張型	3.6	2.7	4.5	2.9	1.3	2.8
j 無評価強誇張型	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
k 弱評価微誇張型	16.6	18.7	14.2	16.5	15.4	17.9
l 弱評価強誇張型	6.5	8.2	4.5	4.9	6.4	5.7
m 強評価誇張型	1.8	2.2	1.3	1.9	2.6	0.9
誇張型合計	28.5	31.9	24.5	26.2	25.6	27.4

表5 所属クラブ・サークルによる有意差（カイ2乗 $p=5\%$ 水準 単位%）

	体育会系	文化系	所属なし
g 強評価微抑制型	0.0	9.1	6.7
l 弱評価強誇張型	11.7	6.5	3.7

4. 2. 2. 大学生全体での傾向

次に回答者の属性を無視して全体を集計した場合、どの表現態度形成のプロセスが多く出現するかを表4の「全体」の欄からみる。最も集中するものでも、大分類の一致型41.8%で50%を越えない。大学生の日本語において、親しい間柄でのマイナス待遇表現行動の表現態度形成は個人差が大きいということになる。

しかしながら、大分類・小分類ともに、「全体」での回答パターンは、カイ2乗検定0.1%水準で有意差が確認される。つまり、個人差は大きい、全くランダムに表現態度が形成されるわけではないのである。大分類では一致型（41.8%）、誇張型（28.5%）に回答が集中し、つづいて抑制型（15.4%）、無評価無表出型（9.2%）、無表出型（5.0%）の順で出現率

が高い。これらの結果から、マイナス評価が抑制されずに表出される一致型・誇張型は、**70%を超えることになる。**

ただし、一致型は**b**の弱評価一致型に回答が偏る。強い腹立たしさを事象を評価した場合は、一致型は選択されにくい ($c=6.8\%$)。強い腹立たしさは、親しい間柄であってもそのまま強くは表現しにくいという結果である。この結果は誇張型の場合にもあてはまり、強評価をさらに誇張するタイプ (m 型) の出現率は低い (1.8%)。

つまり、親しい間柄では、腹立たしさを抑制するような表現態度は形成されにくく、一致型・誇張型が選択されやすい。ただし、強い腹立たしさは、そのまま表現態度には出しにくいという結果である。

今回の状況設定における表現態度形成は、地域差・性差についても顕著な違いは認められない。裏を返せば、本調査の結果は、「表現態度の形成は人それぞれである」というだけでは片づけられないものとなった。表現行動における表現態度形成には、緩やかながら確固とした傾向性が認められるのである。

5. 表現態度と表現要素の選択

表現態度形成に属性差が見られにくいからといって、選択される(非)言語表現に属性差が見られにくいとは限らない。ここでは、2. で述べたBにあたる、表現態度に同一性を求めた表現行動の地域的なバリエーションについて考察を加える。よって、ここでは表1に示した回答者のうち「地域出身者」のデータのみを分析対象とする。

5. 1. 分析項目

熊谷(1997,2000)では言語行動の特徴を形作る諸要素を抽出する試みが為されている。表現行動のバリエーションは、同一の場面や表現態度などにおいて用いられる発話の諸要素が、異なる「特徴の束」(熊谷1997)を形作っている現象であるといえる。とはいえ、本論で熊谷(1997,2000)にあげられている全ての諸要素を網羅しつつ、地域的な表現行動のバリエーションを論じることは困難である。

ただ、限られた要素であっても、表現行動の特徴は立体的に浮かび上がってくるであろう。表現意図を表出するために強く働く表現要素とそうでない表現要素とを対比的に示すことによって、表現行動の特徴を分析することができる。次の(1)～(4)の回答は、同じ表現態度評点3(少し腹立たしさが表現される)での本調査の回答であるが、かなり異なる特徴を備えている。

- (1) ナニ タチドマッテルノ (a) チョット ジャマダヨ (b) (関西)
- (2) イキナリ トマルナ (c) (秋田大)
- (3) オマエ (d) ナニ カンガエテルンヨ (e) ハズカシーヤツダナ (f) (鹿児島大)
- (4) ヘンナ トコデ タチドマラントイテヨ (g) ビックリシタヤンカ モー (h) (関西)

(1) は疑問の文型をとっているが、返答を期待しない詰問(a)と、「相手が起こした望ましくない状況」の描写・判断(b)からなっている。(2) は終助詞などを伴わない裸の禁止表現で行為要求がなされている。他に(3) では「相手の人物そのもの」を「ハズカシーヤツ」という評価的語句で描写・判断しているのに対し、(4) では「ビックリシタヤンカ」と「話し手自身のこと」について言及している。また、(2) と(3) (4) とでは発話量が大きく異なる。

こういった発話の特徴づける表現要素の選択に地域的な傾向はあるだろうか。本調査で量的分析に耐えうるサンプルを確保できた、次の3点をここでの分析項目とする。

分析項目1. 誰についての描写・判断であるか。

1-1 話し手自身に関わる描写・判断 (主語が「私」になりうるもの)

ビックリシタ ウシロノ ヒトニ ブツカラレタヤン

1-2 話し相手に関わる描写・判断 (主語が「あなた」になりうるもの)

ジャマニナッテタヨ

1-3 第3者に関わる描写・判断 (主語が3人称になりうるもの)

ウシロ ツカエル

分析項目2. 文末の表現

2-1 裸もしくは終助詞付きの命令・禁止表現

2-2 詰問表現

分析項目3. ジャマ・メーワクという評価的語彙の使用

これらの出現率を表現態度評点ごとに集計した。ただし、以下の分析では評点4と評点5は出現数が少なかったためまとめて集計している。また、一つの発話に複数の表現要素がある場合も一つずつカウントし、全回答数のうちの出現率を求めている。

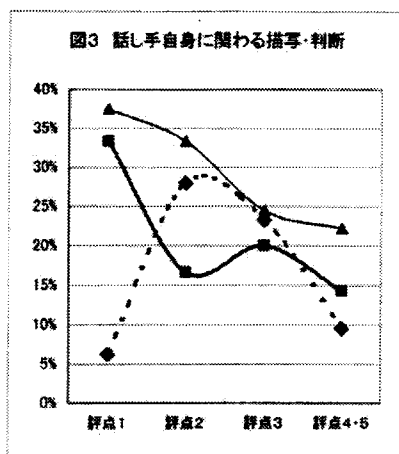
5. 2. 表現態度の程度と表現要素の表れ方における地域性

以下、前節の表現要素についての集計結果を図3～図8に示した。図に付した表で網掛けがある部分は同じ評点における地域間での有意差(カイ2乗検定, $P<10\%$)を表し、太枠で囲まれているのは隣接する評点間での出現率に有意差(カイ2乗検定, $P<5\%$)があることを示す。地域の横に示した数値は、表現要素の全評点での出現総数である。相関係数は評点の上昇(評点2→評点4・5)と出現率の上昇との相関を示す。なお、各評点にいくつの回答があったかは表6の通りである。

表6 表現態度評点からみた回答者の分布

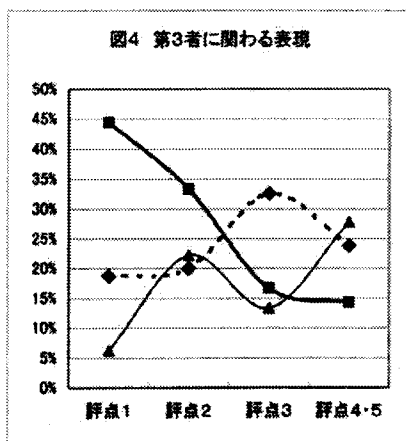
	評点1	評点2	評点3	評点4・5	計
秋田大	16	25	43	21	105
関西圏	9	18	30	21	78
鹿児島大	16	27	45	18	106

5. 2. 1. 誰についての描写・判断であるか



表現態度評点による話し手自身に関わる描写・判断の分布

	評点1	評点2	評点3	評点4・5	相関係数
◆秋大20	33.3%	28.0%	23.3%	9.5%	-0.96
■関西15	33.3%	16.7%	20.0%	14.3%	-0.41
▲鹿大30	33.3%	33.3%	24.4%	22.2%	-0.99



表現態度評点による第3者に関わる表現の分布

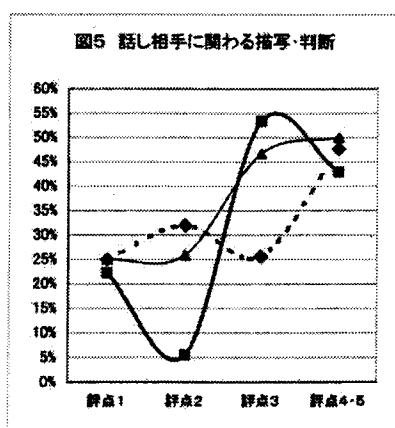
	評点1	評点2	評点3	評点4・5	相関係数
◆秋大27	18.8%	20.0%	23.8%	23.8%	0.30
■関西18	33.3%	16.7%	14.3%	-0.92	
▲鹿大18	16.7%	22.2%	27.8%	0.38	

数-0.92) のも、やはり、第3者についての表現の選択が、腹立たしさの表出に強く関わらないためであろう。

まず、5. 1. で示した分析項目のうち、話し手自身に関わる描写・判断の出現率を見る(図3)。関西圏・鹿児島大では評点1(腹立たしさは表現されない)から評点が上がるにつれ、出現率が低くなっている。強い腹立たしさ表現しようとするほど、別の表現要素が選択される様子が分かる。腹立たしさの表出に「話し手自身に関わる描写・判断をする」ことはあまり関わっていないようである。

しかし、秋田大では評点1から評点2, 3にかけて出現率が高くなる。そして、強い腹立たしさ表現しようとする(評点4, 5)と出現率は再び低くなる。つまり、秋田大では弱い腹立たしさを表明する場合に話し手に関わる描写・判断の表現が選択される。第3者(図4)に関わる描写・判断の出現率は、腹立たしさに関わらない評点1で関西圏と鹿児島大とに有意差が確認され、マイナス評価を表明しないときに、第3者を話題に持ち出しやすい関西圏の表現選択の傾向が見られる。

また、評点2～5では秋田大・鹿児島大ともに評点と出現率との相関は弱い。腹立たしさの表出との関わりは小さいようである。ただし、評点3では秋田大の出現率が上がり、鹿児島大の出現率との間に有意差がある。また、関西圏で評点の上昇とともに出現率が下がる(相関係



表現態度評点による話し相手に関わる描写・判断の分布

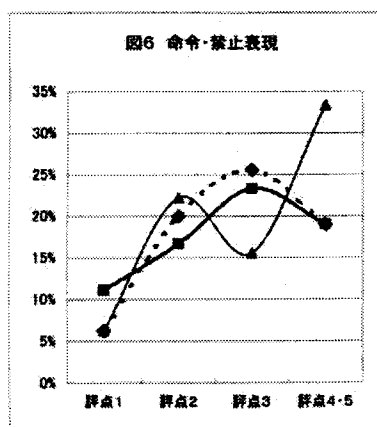
	評点1	評点2	評点3	評点4・5	相関係数
◆秋大33	25.0%	22.2%	25.6%	47.8%	0.69
■関大28	22.2%	5.6%	53.3%	42.9%	0.74
▲九大41	25.0%	25.9%	46.7%	50.0%	0.92

ただし、関西圏では評点2程度の表現態度では5.6%の出現率しか見せない。そして、評点3になると50%近く出現率が跳ね上がる。この点、高くなるにつれ出現率が徐々に上昇する秋田大や鹿児島大とは傾向が異なっている。関西圏のこの傾向については後に述べる。命令・禁止表現、詰問表現についても共通する点であり、隣接する評点間では、有意差がこれらに限って見られる（5.2.4. 関西圏参照）。

5.2.2. 命令・禁止、詰問の表現

ここでは文末の述語部分が裸、もしくは終助詞付きの命令形式である表現（図6）と疑問の文型をとっていながら、疑念を持たず、むしろ相手に詰め寄る表現態度を持つ詰問表現（図7）について調査結果を示す。

両図ともに、概ね評点が高くなるとともに出現率が上昇することが相関係数から読みと



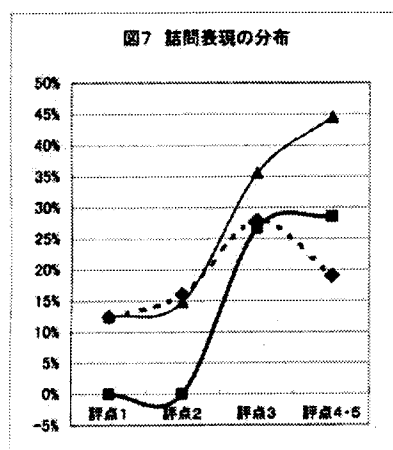
表現態度評点による命令・禁止表現形の分布

	評点1	評点2	評点3	評点4・5	相関係数
◆秋大21	6.3%	20.0%	25.6%	19.0%	-0.26
■関大15	11.1%	16.7%	23.3%	19.0%	0.35
▲九大20	6.3%	22.2%	15.6%	33.3%	0.62

一方、話し相手に関わる描写・判断（図5）は、どの地域においても評点の上昇ともに出現率も高くなる。この表現要素が強いマイナス評価を表現しうること示している。ただし、腹立たしさが関わらない評点1でも3地域とも20%程度の出現率を見せる。評点1ではマイナス評価を表明する態度が伴っていないため、評点2以上の使用とは性質が異なる。つまり、普段からある程度用いられている表現要素も、マイナス評価表明になるとより多く用いられるようになるのである。表現要素と待遇的価値との対応だけでは論じられない現象である。

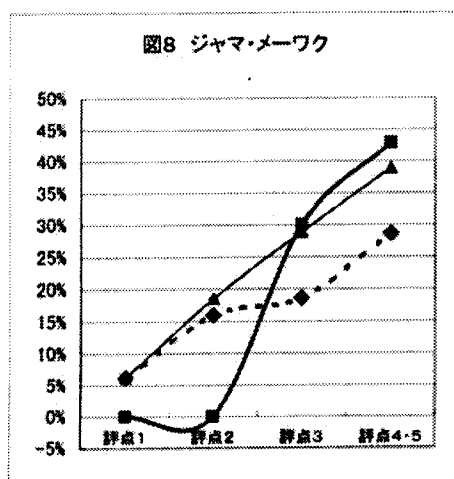
れる。しかし、唯一、負の相関（-0.26）を見せるのが東北の命令表現である。さらに、秋田大の命令表現は評点3で出現率が1位になるが、評点4、5では関西圏とともに最下位となる。関西もグラフでは似た波形を示すが、弱いながらも正の相関がある（0.35）。また、女性による回答は東北のみであった（6件）。男女差・評価表明という点から、東北における命令・禁止表現の運用が関西や九州とは異なることがうかがえる。

詰問表現については、どの地域も一様に正の相関がある。ただし、命令・禁止表現の運用と同様、評点4・5になると出現率が落ちる点、東北は他地域と異なる。また、関西では「話



表現態度評点による語彙表現形の分布

	評点1	評点2	評点3	評点4・5	相関係数
◆秋大22	12.5%	14.8%	27.9%	19.0%	0.25
■関西14	0.0%	0.0%	28.7%	28.6%	0.89
▲愛大30	12.5%	14.8%	35.6%	44.4%	0.97



評価的語彙ジャマ・ワークの分布

	評点1	評点2	評点3	評点4・5	相関係数
◆秋大19	6.3%	18.0%	18.6%	28.6%	0.95
■関西18	0.0%	0.0%	30.0%	42.9%	0.97
▲愛大26	6.3%	18.0%	28.9%	38.9%	0.99

前者には評点1で出現がほとんどなく、後者は評点1でも25%程度の出現率を見せる。「話し相手に関わる描写・判断」は話し相手をどのように描写・判断するかについてもマイナス評価表明に関連していそうである。

一方、「話し手自身」「第3者」に関わる描写・判断はマイナス評価表明に関わりにくい。これらは3地域に共通する点である。逆に、今回の分析では地域による表現要素選択の違いも確認された。以下に、各地域の表現要素選択の傾向をまとめる。

秋田大学：裸、もしくは終助詞を伴う命令・禁止表現の運用に他地域と異なる特徴がある。

これらの形式は行為を要求する意味を持つという点では他地域と共通するが、その要

し相手に関わる描写・判断」と同様、評点2では使用が抑えられている。

5. 2. 3. ジャマ・メーク

「ジャマ・メーク」という評価的語彙の使用は、今回の分析項目のなかでは唯一3地域とも右肩上がりのグラフとなる(図8)。

「ジャマ・メーク」といった語彙が、3地域ともに強いマイナス評価を表明しうること示している。ただし、関西圏ではやはり評点2では出現が0で評点3で急激に出現する。これらの語彙は強い表現態度になるにつれ多く出現している。また、マイナス評価の表出が関わらない評点1ではほとんど出現しないことから、これらの語彙の使用は、通常、強く規制されていると考えられる。この点は、「話し相手に関わる描写・判断」(図5)とは異なっている。

5. 2. 4. 地域的な表現行動のバリエーション

「ジャマ・メーク」といった評価的語彙はいずれの地域でも強いマイナス評価を表現しうる。また、描写・判断の発話では「話し相手に関わる」ものが強いマイナス評価を示しうることが分かった。ただし、

求におけるマイナス評価表明の態度と表現形式との対応が他地域と異なっていることを示す事例である。さらに、東北では詰問表現も評点4, 5では出現率が減少している。これに替わって、強いマイナス評価を表明する表現要素が今回の分析項目の中では「ジャマ・メーク」という評価的語彙の選択である。しかし、これについても他地域よりマイナス評価表明には強く働いていない。こういった表現が強いマイナス評価を有効に表しうるかを探ることが今後の課題となる。

関西圏：命令・禁止の表現、話し相手に関わる描写・判断は強いマイナス評価表明になると用いられにくくなる。そして、関西では、強いマイナス評価を表しうる表現要素は、微妙なマイナス評価の表出には用いられにくい。ある程度、露骨にマイナス評価を表明する時点（本調査では評点3）で、突然、マイナス待遇表現が現れるのである。これは関西における表現行動の一特徴であると筆者は考える。

鹿児島大学：「話し手自身」「第3者」に関わる描写・判断以外の全ての分析項目が強いマイナス評価を表しうる。マイナス評価表明とそれに関わる表現要素の選択との相関が3地域の中で最も強いと言える。

これらの地域による異なりは、発話の「状況」と「表現態度の強弱」といった点に同一性を求めた上で生じている。日本語における表現行動のバリエーションと呼ぶべき現象であるといえる。

6. まとめ

第4節では、表現行動における表現態度形成には、地域差を越えた確固たる傾向性があることが明らかになった。この点は、具体的な言語事象が絡まないため、従来、ほとんど触れられていない。

しかし、表現態度形成に地域差はなくても、表現態度と表現要素との結びつきには地域差があった。そして、状況と表現態度とに同一性を求めた表現行動の地域的バリエーションの存在を確認した。発話を複数の表現要素から考察したことで、表現行動の地域的特徴を多角的に把握し得たことに本研究の意義を認めたい。ただし、本章では表現行動のバリエーションを確認したにとどまっており、表現行動の地域差が何を意味するのかについては議論が及ばなかった。

語彙・文法・表現法などについては『日本言語地図』（1966-1985）・『方言文法全国地図』（1989-）など大規模な調査資料が蓄積されており、地域的なバリエーションを解釈するための情報が豊富である。一方、表現行動レベルでの全国的な資料は乏しい。

ここでは、マイナス待遇表現行動の地域的なバリエーションの存在を確認したが、周辺地域との連続性はあるのだろうか。あるとすれば、その連続的な分布は語彙・文法形式のように通時的な表現行動の展開を示しうるのか。あるいは、地域社会の性質が関与しているのか。これらの問題は今後の課題でもあり、研究の展望でもある。

参考文献

- 熊谷智子 (1997) 「はたらきかけのやりとりとしての会話－特徴の束という形でみた「発話機能」－」『対話と知－談話の認知科学入門－』新曜社
- 熊谷智子 (2000) 「言語行動分析の観点」『日本語科学』7 国立国語研究所
- 国立国語研究所 (1966-1985) 『日本言語地図』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所 (1989-) 『方言文法全国地図』大蔵省印刷局 (第5巻まで公開)
- 渋谷勝己 (1998) 「連載 社会言語学のキーテーマ3 言語行動」『月刊 言語』27-3 大修館書店
- 杉戸清樹 (1983) 「＜待遇表現＞気配りの言語行動」『講座 日本語の表現3 話しことばの表現』筑摩書房
- 西尾純二 (1998a) 「マイナス待遇表現行動分析の試み－非礼場面における言語行動規範について－」『日本学報』17 大阪大学文学部日本学研究室
- 西尾純二 (1998b) 「マイナス待遇行動の表現スタイル－規制される言語行動をめぐって－」『社会言語科学』1-1 社会言語科学会
- 西尾純二 (2000) 「言語行動における遂行義務と回避義務」『阪大日本語研究』12 大阪大学大学院文学研究科 日本語学講座
- 林 四郎 (1978) 「敬語行動のタイプ」『言語行動の諸相』明治書院

第8章

まとめと研究の展望

1. 各章のまとめ

本論文で第1章から第3章までは、マイナス待遇表現行動の研究の背景と理論的枠組みについて述べた。それらをふまえ、第4章から第7章では、具体的なケーススタディを展開した。本章では、それぞれの章で得られた知見を総合し、今後の研究を展望するため、まずは各章のまとめを行いたい。

まず、第1章では、従来の待遇表現の分類の中に、マイナス待遇表現をより明確に位置づけた。敬語・卑罵語などといった語彙レベルに留まらない待遇表現として、マイナス待遇表現を位置づけることにより、本研究で考察対象とする表現を「卑語」と卑語を含んだ「マイナス待遇表現」とに分類した。マイナス待遇表現には、敬語を使う慇懃無礼や卑語をともしないものも存在することからも分かるように、卑語の研究のみでは不十分である。マイナスという評価性は、さまざまな形で表現される。卑語を用いないマイナス待遇表現行動も多い。そこで、言語形式を記号系としてとらえる表現形式と、表現産出のプロセスに着目した表現行動とを区別し、本研究を表現行動の研究として位置づけた。

第2章では、待遇表現の研究史を、マイナス待遇表現行動の研究との関連でふり返った。待遇表現を捉える観点には、表現形式としての性質を解明するものと、表現行動としての性質を解明するものとがあった。表現行動としての待遇表現研究は、表現産出のプロセスについてモデル化が行われており、表現行動を扱う本研究に参考にする部分が大きかった。研究対象としては、語彙レベルだけでなく、文や発話レベルの分析までが行われている。しかしながら、マイナス待遇表現は語彙レベルの研究が多く、研究に偏りがあることを指摘した。

また、狭義の敬語形式が、対人関係を表示する社会的ダイクシスであるかどうかといった議論がこれまでに展開されている。一方、マイナス待遇表現には、社会的ダイクシスとしての性格があてはまらないものがある。対人関係を表示しない卑語形式には、「～やがる」のような対象に向かって感情を表出するタイプとがあることを指摘した。ただし、授受表現の「～してやる」やねぎらいの「ご苦労様」のように、対人関係を表示するマイナス待遇表現も存在する。

このように、待遇表現行動には、事態に対人関係を認識しそれを表示する「関係性待遇」と、事態を感情的に認識し、その感情を待遇対象にむけて表出する「感情性待遇」とが存在する。そこで、マイナス待遇表現形式のうち、関係性を表示する「～してやる」などを

「関係卑語」とし、感情性を表示する「～やがる」などを「感情卑語」して区別した。

以上のような、これまでの研究の背景をふまえ、第3章では具体的なマイナス待遇表現行動を分析する枠組みを提示した。また、表現行動を扱うにあたって、マイナス待遇表現行動の表現産出プロセスをモデル化し、そのモデルに沿って、研究課題の整理を試みた。本研究では、表現産出のプロセスを大きくは、評価段階・表現態度形成（扱い）段階・表現選択の段階の3段階に分け、細かくは評価段階・マイナス評価「表明程度」決定段階・「表現姿勢」決定段階・表現選択の段階の4段階に分けた。これらの段階は送り手の表現産出の操作を示したものである。それぞれの表現行動において、送り手が各段階での意思決定を吟味するカリキュレーションが存在しうることが、「関係性待遇」はそのカリキュレーションがあまり働かず、慣習化していることについて触れている。

また、事態への評価の仕方、評価の表明の仕方、それらに基づく表現の選択の仕方に言語社会による異なりがある可能性を指摘した。そして、その異なりを段階ごとに明らかにすることを研究課題として提示した。

第4章以降は、第2章で提示した「関係性待遇」、「感情性待遇」の概念と、第3章で示したマイナス待遇表現行動の表現産出モデルを利用したケーススタディである。

第4章では関西方言の卑語形式ヨルについて、言語行動論的な立場からその表現性を明らかにした。ヨルは、対象が目下であることを表示することも、「～ヤガル」のように対象に対するマイナスの感情性を表示することもできる。すなわち、関係性待遇と感情性待遇のいずれの表現行動でも用いられる卑語形式である。言い換えれば、関係卑語と感情卑語のいずれの性質をも有している形式である。さらに、話し手の事態評価の多様性からヨルの表現性を分析すると、ヨルは、常にマイナスの方向性をもつとは限らず、喜びを表すような場面や、感情的に中立な驚きを表すような場面でも用いられることが明らかになった。この複雑な表現性を、この章ではヨルの文体の低さから説明した。つまり、ヨルは文体が低いがために *covert prestige* を持っている。これによって、ヨルを使用することで、表現にマイナス方向に限らない情意性を持たせることができると推定した。

また、ヨルは場面設定の調査で自発的には回答されにくい、「ヨルが使えるかどうか」を尋ねると「使える」という回答が多くなる。この点について、敬語とは異なり、卑語の運用は遂行義務性が希薄であることに理由を求めた。

第5章は、様々な卑語形式の使用の属性差についての考察であった。ここでは、話し手の卑語形式運用の男女差・世代差を明らかにした。また、「ミンカー」「ミロ」といった命令表現と、「アホ」「ボケ」「ムカツク」などの卑罵形式とが、表現態度形成の段階において異なる様相をみせることから、卑語の表現行動上の多様性を指摘した。

さらに、実年齢女性より、実年齢男性よりも攻撃的な口調で発話していながら、卑語形式の運用が少なかった。このことから、卑語形式の運用に対する規制が話し手の属性によって異なるという、扱いの段階と表現選択の段階の属性差を明らかにした。この結果は、マ

マイナス待遇表現行動の考察における語彙レベルの分析の限界を示すと同時に、マイナス評価を表明するために規制される表現要素が属性によって異なることを示唆するものであった。

世代差については、若年層の男女は、卑語形式を実年層の男女よりも多く使う傾向にあった。しかし、若年層はマイナス待遇表現行動の規範が、実年層ほど確立しておらず、若年層が地域社会の待遇表現の変化を先導しているものとは一概にいえなことを指摘した。世代差は、卑語表現の表現態度形成にも表れる。若年層は、目下に対してマイナス評価をそのまま表明する傾向にあったが、実年層は親しい同年代に対してマイナス評価をそのまま表明する傾向にある。また、実年層は若年層に比べ、親しい関係の同年代以外の相手にもマイナス評価の表明を抑制するという分析結果が得られた。

こういった表現態度の属性差は、まさしく待遇表現行動のバラエティに関する問題でありながら、待遇表現行動研究では問題にされていないところである。

第6章と第7章とでは、発話レベルのマイナス待遇表現行動を分析対象とした。第6章では、敬語の使用が皮肉や慇懃無礼というマイナス待遇表現行動となる理由について考察した。皮肉や慇懃無礼には「へだて」という敬語のはたらきが関与し、マイナスの評価的態度で対象をへだてることで、普段より相手を突き放すマイナス待遇表現行動になることを指摘した。このことから、マイナス待遇表現行動には、相手を遠ざける「敬遠型」と、言ってほしくないことをあえて言い、対象に過剰に関与する「過剰関与型」の2つのタイプが存在することを指摘した。

この点を踏まえ、発話データを分析すると、過剰関与型のマイナス待遇表現行動は、上下関係によって規制され、敬遠型のマイナス待遇表現行動は親疎関係によって規制されることが明らかになった。表現内容の分析では、卑語形式だけでなく、表現内容を分析の要素に加えることによって、表現の「くどさ」「唐突さ」といったことが、マイナス待遇表現となりうることを指摘できた。また、敬語形式は、強いマイナス評価を表明する場合でも、相手が目上なら使用が維持される。これに対して、マイナス評価を明示する表現内容は、マイナス評価の程度によって敏感に変化することがわかった。この点は、プラス待遇表現行動とマイナス待遇表現行動との相違点である。

また、第5章では、話し手の属性によって、規制されるマイナス評価を表明する要素が異なることが示唆された。第6章の分析では、実年層女性による卑語形式の運用は強く規制されているものの、マイナス評価が明示的な表現内容や表現内容量によって、相手に過剰な関与を行うことが明らかになった。つまり、ある表現要素に強い規制がかかると、規制の弱い別の表現要素によって、マイナス評価を表明するという補償行動がみられたわけである。これが各属性のマイナス待遇表現行動のスタイルを形成する要因として考えられた。

この考察結果も、マイナス待遇表現行動を語彙レベルで考察する危うさを指摘するものであり、敬語形式が語彙レベルの分析に、ある程度耐えうることは異なるといえよう。

第7章では、マイナス待遇表現行動の地域的なバリエーションを考察した。そもそも、表現内容の選択といったレベルでの表現行動のバリエーションは、これまでにあまり確認されていない。しかし、本調査では、日本国内におけるマイナス待遇表現行動の地域差が認められた。腹立たしさの表明（マイナス評価表明程度決定段階）と表現形式の選択との結びつきは、秋田・関西・鹿児島 の 3 地域で異なっていたのである。日本語の言語行動の多様性を示す事例を提供したこと自体に意義を認めたい。

ただし、事態へのマイナス評価をどのように表出するかという表現態度形成については、地域差が見られなかった。また、「ジャマ・メーク」といった評価的な語彙の選択が、強いマイナス評価を表明するために有効であるという点でも、3地域は同じ結果を見せた。表現産出のプロセスは、心理的なものであり、個人差が大きいということは、アンケートを実施する前には十分考えられたことであった。しかし、表現態度形成に地域差が見られないという調査結果は、日本語のマイナス待遇表現行動に、何らかの傾向性があることを示すものである。むしろ、所属するクラブ・サークルの違いう社会集団の性質の違いによって、表現態度形成の差は表れた。

2. 研究の展望

2. 1. マイナス待遇表現とプラス待遇表現との関係

本研究の冒頭（第1章 はじめに）で、プラスとマイナスの各方向性の待遇表現について、その相違点を議論する必要性を説いた。待遇表現はプラスとマイナスの両方の方向性を含むものであり、両者とも「対象への言語上の待遇を表す」というプラスとマイナスの「共通性」を強調した概念であったように思われる。このことは、敬語の調査法をそのままマイナス待遇表現に当てはめるなどの弊害をこれまでに生んでいたのではないだろうか。また、本研究では、具体的な調査からプラス待遇表現とマイナス待遇表現とのあいだに、いくつかの「相違点」を導き出した。例えば、卑語形式ヨルの運用は遂行義務性が弱いものに対して、敬語運用は遂行義務性が強い。このことは、ヨルのデータを収集するために、使用の有無を確認することが有効であるという方法論にまで影響している。

こういった結果は、待遇表現が強調した「共通性」を否定するものであるが、その一方で、待遇表現という概念をより詳細に説明したものと考えるべきではないだろうか。また、プラス待遇表現行動の分析に、今回提示したモデルを適応してみる必要もあるだろう。

2. 2. 通時的研究との連携

ヨルの表現性の考察では、共時的な用法が明らかになった。しかし、一見、お互いが矛盾するかに見えるいくつかの用法をヨルが持つ理由は、通時的な解釈を導入せざるを得なかった。ヨルは関係卑語にも、感情卑語にもなる形式である。しかも、卑語としてではなく、驚きという中立的な感情を表現する、文体の低さゆえの情意性をもった形式でもあつ

た。

これらの複雑な表現性を説明するには、＜文体の低さ→関係卑語＞＜関係卑語→文体の低さ＞という通時的変遷の過程を想定し、その移行段階にあるが故に、用法が混在しているという仮説を立てたくなる。この検証については、本研究では及ぶところではなかった。つまり、表現行動の観点からのみでは、一つの卑語形式の表現性を完全に説明できないということが明らかになったのである。この点は、文献研究や関西方言内での地域差の研究に発展する問題である。

また、卑語形式の問題だけではないマイナス待遇表現（行動）の通時的な展開についても興味深い。再三述べたように、マイナス待遇表現行動は反社会的行動となる場合があり、その場合は規制されるべき言語行動となる。その規制のあり方は、古典の文学作品などにも表れてくるであろう。あるマイナス待遇表現行動の規制が、通時的にどのように変化しているのか。あるいは、規制されるマイナス待遇表現（行動）は、どのように変化してきているのか。いずれも、日本語の言語行動の特徴を説明する上で、有効な視点ではないだろうか。

2. 3. 日本語行動のバラエティの探求

日本語の言語行動の特徴を説明するという点では、第5章から第7章で分析したような、マイナス待遇表現行動のバラエティの把握も意味のあることのように思われる。言語行動のバラエティについての研究は、始まってまだ日が浅い。言語行動にはどのような地域方言・社会方言があるのかといった議論をするためのデータがほとんどないのである。

今回の分析では、マイナス待遇表現行動という特定の言語行動ではあったが、言語行動の地域差の抽出を行った。ただし、今回のサンプルが十分なものであったか、また、調査法は適切であったかといった点については今後、検討を続けなければならぬ。統計的な処理もさることながら、多くの研究者がそれぞれの観点で調査を実施し、データの蓄積したうえで、議論を積み重ねていくことが重要であると考えられる。

2. 4. 応用社会言語学的な展開

マイナス待遇表現行動に属性論的な、あるいは地域的なバラエティが存在するということは、人々の社会生活にどのような影響を与えているであろうか。マイナス待遇表現行動という反社会的な性格を持ちうる言語行動に属性差が存在することで、何らかの言語問題が生じているのではないだろうか。男女や世代の問題だけでなく、教師と学生、医者や看護婦と患者、日本人と外国人など、話し手の属性ごとにマイナス待遇表現行動にかかる規制は異なるであろう。ある属性の話し手には不当にマイナス評価表明が許され、別の属性の話し手には許されないということが起こってはいないだろうか。こういった点についても、言語行動の研究者がもっているデータはあまりにも少ない。身近な言語問題を解決

する応用社会言語学的な観点で、今後の研究が望まれるところであろう。

3. おわりに

本研究では多くの紙数と時間を、理論的背景の整理や研究の位置づけのために割いた。それはマイナス待遇表現行動という研究対象が、従来の研究の方法論や蓄積を利用しにくいものであったためである。待遇表現のモデルや場面による使い分けに関する研究が、本研究の基礎になったことは間違いないであろう。しかし、マイナス方向の待遇表現を扱う際に、それらの手法を当てはめると、初めは上手くいかないことが多かった。それは、マイナス待遇表現行動の特徴が、場面の人的要素や対人関係のみによって規定されるものではなく、話し手の心情や表現産出の過程のあり方によって大きな影響を受けることによるものであった。

このような研究対象の特徴を考慮し、具体的なデータの分析を可能にするために、第1章の2節でも述べたように、本研究の重心は第3章のモデル構築に偏ったのである。いくつかのケーススタディを重ね、モデルの断片を利用したことにより、マイナス待遇表現行動についてのいくつかの知見を得ることができた。また、マイナス待遇表現行動を研究対象にしたことで、本章2節のように、待遇表現行動・言語行動に関する多くの研究課題が見えてくるようになった。その課題は本論文で扱うには、あまりに膨大である。

本研究は、その膨大な課題に着手するための足場を築き、それぞれのケーススタディで試論を展開したものであると位置づけるべきものであろう。

今後はさらにケーススタディを積み重ね、本研究で立てた仮説や分類を柔軟に修正しながら研究を進めていきたい。

付 録

— 調 査 票 —

各調査の結果は、それぞれ本論文の次の章で分析・解釈されている。配列は調査実施時期の順である。

A調査：第5章

B調査：第6章

C調査：第7章

D調査：第4章

調査 A

調査のねらい：場面の人的要素と話し手の心情とが、要求表現の述語部分の
使い分けに与える影響を分析する。

実施時期：1996 年

調査法：質問紙法

協力： 学習塾（奈良県橿原市）

対象： 若年層（中学生・高校生） 計 77 名

うち、男性 32 名・女性 45 名

実年層（学習塾の生徒の父兄・学習塾の職員） 計 70 名

うち、男性 29 名・女性 41 名

注 1： 以下に掲載する調査用紙は、フォントや配置などが実際に使用したもの
とは異なる。

注 2： 本論文の第 5 章は、本調査の結果に基づいて執筆した。

注 3： 調査実施にあたって、調査用紙はホチキス止めし、別紙 A はそれとは別
に配付した。

ことば使いについてのアンケート

大阪大学大学院 文学研究科 博士前期課程

西尾純二

アンケートにご協力いただきましてありがとうございます。私は大学で、ことばや方言について勉強しているものです。今回のアンケートでは、あなたのことば遣いについて教えてください。

このアンケートはテストではありません。あなたなりのことば遣いを、「自分ならこう言う」と考えてお答えください。他の人と相談せず、自分でお考えください。

なお、このアンケートは研究以外の目的で使用しないことをお約束します。

○ まず、あなた自身のことについてお尋ねします。

ご氏名	男・女
-----	-----

年齢
中学生 高校生 大学生 20代 30代 40代 50代 60代 70代

ご住所（府県名と市町村名までで結構です。身元調査ではありません）

現在お住まい以外の土地で生活したことはありますか。			
（ ）歳～	（ ）歳	都道府県	市・郡
（ ）歳～	（ ）歳	都道府県	市・郡
（ ）歳～	（ ）歳	都道府県	市・郡

ご住所（府県名と市町村名までで結構です。身元調査ではありません）			
父親	都道府県	市・郡	
母親	都道府県	市・郡	

○ では、次の人物を具体的に一人思い浮かべてください。

- | | |
|-------------------------|------------|
| A 先生や上司、先輩であまり親しくない目上の人 | 以下、Aさんとして。 |
| B 先生や上司、先輩で親しい目上の人 | 以下、Bさんとして。 |
| C あまり親しくない同年代の人 | 以下、Cさんとして。 |
| D 親しい同年代の人 | 以下、Dさんとして。 |
| E 後輩や知り合いであまり親しくない目下の人 | 以下、Eさんとして。 |
| F 後輩や知り合いで親しい目下の人 | 以下、Fさんとして。 |

具体的に思い浮かべていただけたでしょうか。思い浮かべていただいた人物が話し相手であったときのことば遣いをうかがいます。質問文にあるような状況を想像してお答えください。

場面A-1 話し相手はあなたが想像したあまり親しくない目上の人です。

Aさんが地図を持ってきてあなたに道を聞きに来ました。あなたは地図の一部を指し示してそこを見るように言うとき、どのような言い方をしますか。下の選択肢から数字でお答えください。

ここ（を）・・・

1. ミー 2. ミーヤ 3. ミーヨ 4. ミレ 5. ミヨ 6. ミロ 7. ミリ 8. ミテ
9. ミンカ（一） 10. ミナハレ 11. ミナハレヤ 12. ミテクダサイ 13. ゴランクダサイ
その他：回答欄にどんな言い方がカタカナでご記入ください。

回答欄

数字（ ） その他：

場面A-2 話し相手はあなたが想像したあまり親しくない目上の人です。

Aさんが地図を持ってきてあなたに道を聞きに来ました。あなたは一生懸命Aさんのために道を探していますが、Aさんは他の人と笑ってしゃべっています。道を見つけたので、Aさんにこちらを見るように言うときどのように言いますか。

こっち（を）・・・

1. ミー 2. ミーヤ 3. ミーヨ 4. ミレ 5. ミヨ 6. ミロ 7. ミリ 8. ミテ
9. ミンカ（一） 10. ミナハレ 11. ミナハレヤ 12. ミテクダサイ 13. ゴランクダサイ
その他：回答欄にどんな言い方がカタカナでご記入ください。

回答欄

数字（ ） その他：

これはどんな言い方ですか。別紙のa～eの質問に数字でお答えください。

a（ ） b（ ） c（ ） d（ ） e（ ）

場面A-3 話し相手はあなたが想像したあまり親しくない目上の人です。

何人かで楽しく騒いでいます。雰囲気に合わせて、あなたはAさんとも楽しく話すつもりです。すると、Aさんがあなたが持っていたペンを見せてくれと言ってきました。あなたはペンを見せながら、どのような言い方をしますか。

いいですよ（ええよ）・・・

1. ミー 2. ミーヤ 3. ミーヨ 4. ミレ 5. ミヨ 6. ミロ 7. ミリ 8. ミテ
9. ミンカ（一） 10. ミナハレ 11. ミナハレヤ 12. ミテクダサイ 13. ゴランクダサイ

その他：回答欄にどんな言い方がカタカナでご記入ください。

回答欄

数字（ ） その他：

これはどんな言い方ですか。別紙のc, d, fの質問に数字でお答えください。

c（ ） d（ ） f（ ）

場面B-1 話し相手はあなたが想像した親しい目上の人です。

Bさんが地図を持ってきてあなたに道を聞きに来ました。あなたは地図の一部を指し示してそこを見るように言うとき、どのような言い方をしますか。下の選択肢から数字でお答えください。

ここ（を）・・・

1. ミー 2. ミーヤ 3. ミーヨ 4. ミレ 5. ミヨ 6. ミロ 7. ミリ 8. ミテ
9. ミンカ（一） 10. ミナハレ 11. ミナハレヤ 12. ミテクダサイ 13. ゴランクダサイ

その他：回答欄にどんな言い方がカタカナでご記入ください。

回答欄

数字（ ） その他：

場面B-2 話し相手はあなたが想像した親しい目上の人です。

Bさんが地図を持ってきてあなたに道を聞きに来ました。あなたは一生懸命Bさんのために道を探していますが、Bさんは他の人と笑ってしゃべっています。道を見つけたので、Bさんにこちらを見るように言うときどのように言いますか。

こっち（を）・・・

1. ミー 2. ミーヤ 3. ミーヨ 4. ミレ 5. ミヨ 6. ミロ 7. ミリ 8. ミテ
9. ミンカ（一） 10. ミナハレ 11. ミナハレヤ 12. ミテクダサイ 13. ゴランクダサイ

その他：回答欄にどんな言い方がカタカナでご記入ください。

回答欄

数字 () その他 :

これはどんな言い方ですか。別紙の a ～ e の質問に数字でお答えください。

a () b () c () d () e ()

場面B-3 話し相手はあなたが想像したあまり親しくない目上の人です。

何人かで楽しく騒いでいます。雰囲気に合わせて、あなたはBさんとも楽しく話すつもりです。すると、Bさんがあなたが持っていたペンを見せてくれと言ってきました。あなたはペンを見せながら、どのような言い方をしますか。

いいですよ（ええよ）・・・

1. ミー 2. ミーヤ 3. ミーヨ 4. ミレ 5. ミヨ 6. ミロ 7. ミリ 8. ミテ
9. ミンカ（一） 10. ミナハレ 11. ミナハレヤ 12. ミテクダサイ 13. ゴランクダサイ

その他：回答欄にどんな言い方がカタカナでご記入ください。

回答欄

数字 () その他 :

これはどんな言い方ですか。別紙の c, d, f の質問に数字でお答えください。

c () d () f ()

以下、同様にC～Fの人物を話し相手に想定した質問項目が続く。

次頁に a～f の選択肢を示す。

別 紙 A

*回答はアンケート用紙に記入してください。

質問 a それは攻撃的な口調ですか。

- 1 かなり攻撃的に言っている。
- 2 攻撃的に言っている。
- 3 少し攻撃的に言っている。
- 4 ほんの少し攻撃的に言っている。
- 5 攻撃的には言っていない。

質問 d それは親しげな口調ですか。

- 1 かなり親しげに言っている。
- 2 親しげに言っている。
- 3 少し親しげに言っている。
- 4 ほんの少し親しげに言っている。
- 5 親しげには言っていない。

質問 b それは突き放すような口調ですか。

- 1 かなり突き放して言っている。
- 2 突き放して言っている。
- 3 少し突き放して言っている。
- 4 ほんの少し突き放して言っている。
- 5 突き放しては言っていない。

質問 e あなたは内心、怒っていますか。

- 1 かなり怒っている。
- 2 怒っている。
- 3 少し怒っている。
- 4 ほんの少し怒っている。
- 5 怒っていない。

質問 c それは冗談ばい口調ですか。

- 1 かなり冗談ばく言っている。
- 2 冗談ばく言っている。
- 3 少し冗談ばく言っている。
- 4 ほんの少し冗談ばくに言っている。
- 5 冗談ばくは言っていない。

質問 f 内心、親しくしようと思っていますか。

- 1 かなり親しく接したい。
- 2 親しく接したい。
- 3 少しだけ親しく接したい。
- 4 ほんの少しだけ親しく接したい。
- 5 親しく接したくはない。

B調査

調査のねらい：発話レベルでのマイナス待遇表現行動とマイナス評価の程度、
マイナス評価表明の程度との相関を探る。また、面接調査の実施に
より、発話行動の意識について種々の内省を得る。

実施時期：1996 年

協力機関： 天理参考館（中井精一氏）。学習塾（奈良県橿原市）。

調査法：面接調査。指定状況下の発話をインフォーマントがロールプレイ。

対象： 若年層男女 計 20 名
 うち、男性 10 名・女性 10 名
 実年層男女 計 20 名
 うち、男性 10 名・女性 10 名

このほか、7 名に対して予備調査を実施し、調査実行上の問題点の
把握を行った。

注 1： 以下に掲載する調査用紙は、フォントや配置などが実際に使用したも
のとは異なる。

注 2： 本論文の第 6 章は、本調査の一部を利用して執筆した。

ことば使いについての質問票

大阪大学大学院 西尾純二

ご氏名	年齢	性別
-----	----	----

ご住所

居住歴（下の年齢を表す数直線上に、居住地を書き込む）

0	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75

ご両親の出身はどちらですか。		
父親	都道府県	市・郡（町村）
母親	都道府県	市・郡（町村）

次の人をひとり想像して、その人との間柄を教えてください。

親しい目上の人（ 例：部長 ）	親しい同年代の人（ ）
親しい目下の人（ ）	親しくない目上の人（ ）
親しくない同年代の人（ ）	親しくない目下の人（ ）

<通常場面>

()さんが地図を持ってきてあなたに道を聞きに来ました。あなたとその人はそれぞれ地図の違うところを見ていますが、あなたは道を見つけました。その人にあなたが見ているところを注目してほしいくて、こちらを見るように言うときどのように言いますか。

親しい目上 (親しげな口調) ←評点 1～5 を記入。別紙参照。以下同様。

自由発話

親しくない目上 (親しげな口調)

自由発話

同年代の友人 (親しげな口調評点)

自由発話

親しくない同年代 (親しげな口調評点)

自由発話

親しい目下の人 (親しげな口調評点)

自由発話

親しくない目下の人 (親しげな口調評点)

自由発話

<弱非礼場面>

() さんが道を聞くためにあなたのところに地図を持ってきました。あなたはその人のために一生懸命道を探していますが、その人はあなたの友達と横で笑ってしゃべっています。地図で道を見つけたので、こちらを見るように言うときどのように言いますか。

親しい目上 (内心の怒り) (怒った口調) (親しげな口調)

自由発話

親しくない目上 (内心の怒り) (怒った口調) (親しげな口調)

自由発話

同年代の友人 (内心の怒り) (怒った口調) (親しげな口調)

自由発話

親しくない同年代 (内心の怒り) (怒った口調) (親しげな口調)

自由発話

親しい目下の人 (内心の怒り) (怒った口調) (親しげな口調)

自由発話

親しくない目下の人 (内心の怒り) (怒った口調) (親しげな口調)

自由発話

<強非礼場面>

今度も（ ）さんのために地図で一生懸命道を探していますが、なかなか道を見つけられません。もう10分も探していますが、（ ）さんはずっとあなたの友達と笑ってしゃべっています。あなたは我慢して一人で道を探していましたが、疲れてイライラしてきました。今度は一生懸命探しているあなたをおいて、どこかに行こうとしています。（ ）さんを引き留めて（ ）さんもちちらを見るように言うときどのように言いますか。

回答形式は<弱非礼場面>に同じ。

別 紙 B

内心の怒り

- 5 とても怒っている。
- 4 怒っている。
- 3 少し怒っている。
- 2 ほんの少し怒っている。
- 1 怒っている。

怒った口調

- 5 とても怒った口調。
- 4 怒った口調。
- 3 少し怒った口調。
- 2 ほんの少し怒った口調。
- 1 怒った口調。

親しげな口調

- 5 とても親しげな口調。
- 4 親しげな口調。
- 3 少し親しげな口調。
- 2 ほんの少し親しげな口調。
- 1 親しげな口調ではない。

C 調査

調査のねらい：発話レベルでのマイナス待遇表現行動とマイナス評価の程度、
マイナス評価表明の程度との相関に関して、地域差の存在と地域差の
内容を探る。

実施時期：1999 年

協力機関（協力者）：秋田大学（日高水穂氏）、都留文科大学（村上敬一氏・
中川美和氏）、一橋大学（庵 功雄氏）追手門大学（野呂香代子氏）、大阪
大学、鹿児島大学（太田一郎氏）。

調査法：質問紙法。

対象：詳細は本編 7 章を参照。

注 1：以下に掲載する調査用紙は、フォントや配置などが実際に使用したも
のとは異なる。

注 2：本論文の第 7 章は、本調査の一部を利用して執筆した。

ことば使いについての質問票

大阪大学文学研究科 西尾純二

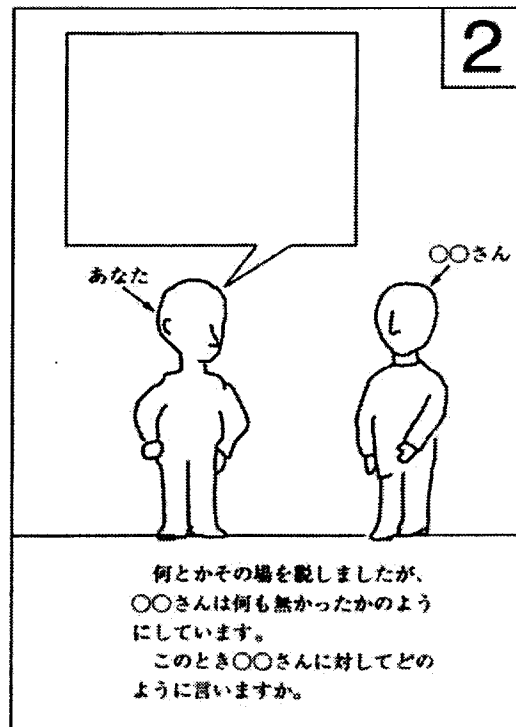
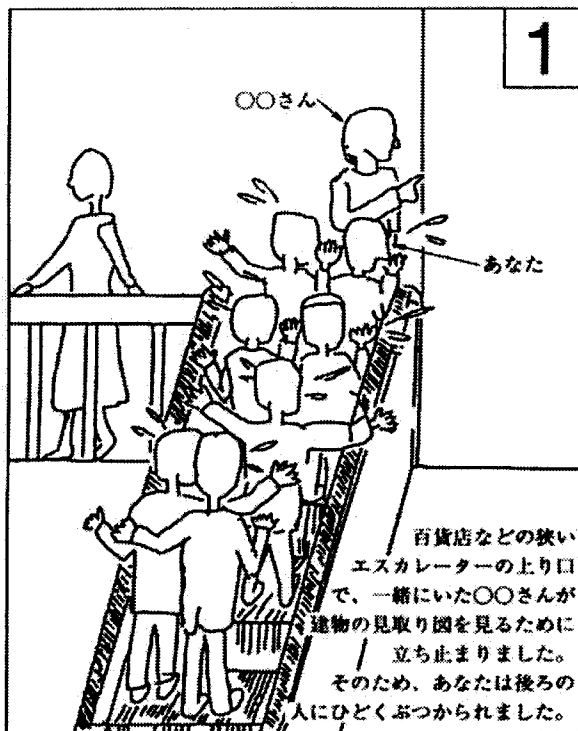
貴重な時間を本アンケートに割いていただき有り難うございます。このアンケートはテストではありません。地域のことばづかいを知るためのものです。本アンケートで設定されている場面の中で、あなた本人が一番言いそうな話しことばを、なるべく忠実に再現してください。

なお、本アンケートは研究の目的以外で利用することはありません。

☆ この質問票に回答するときは以下の点に注意してください。

- ◆ 上から順番に回答してください。
- ◆ 本アンケートでは下のイラストのような状況を設定します。相手の人物は設問によって変化します。相手の人物に応じた、あなたのことば使いを回答してください。
- ◆ 人物設定をしていただくところは、できるだけ実在の人物を想定してください。もちろん無記名で構いません。実在する人物がいない場合は、できるだけ設定に近い人物を想定してください。
- ◆ 自分ならどう言うか台詞を回答していただくところがありますが、セリフの表記はすべてカタカナ表記をお願いします。漢字・数字を避けてください。

状況



回答例

イラストの状況で話し相手が地元が一番親しい同性の友人の場合、どの程度腹立たしく思いますか。下の尺度のどこかに○を付けてください。

腹立たしくない	少し腹立たしい	○	とても腹立たしい

このときどのように言いますか。または何も言わないとしたら、どんな行動を取りますか。どちらかを回答してください。

何か言うとしたら……

回答欄

ナニカンガエテンネン。サッサト ドケヨ。ジブンノコトバッカリ カンガエヤ
ガッテ。

何も言わないとしたら……

回答欄

その言い方・行動から相手に対して腹立たしさが、どの程度表現されますか。

全く表現されない	少し表現される	○	とても強く表現される

☆ この回答例のように、表紙のイラストのような状況で、あなたならのように言うかを出来るだけリアルな話しことばで記してください。表記は漢字・数字を避けてください。全てカタカナ表記をお願いします。

前頁の質問形式で、以下、話し相手を「地元が一番親しい同性の友人」「あまり付き合いの無かった同性の同学年の人」「指導教官または大学の面識のある先生」「同性の後輩」「地元の親しい異性の友人（恋人を除く）」のそれぞれ5人設定した。最後に次のような回答者に関する情報を尋ねている。

◆最後にあなたのことについて教えてください。

性別 () 年齡 () 學年 ()

中学・高校のときの居住地

(歳) ~ (歳) (都道府県) (市町村)

(歳) ~ (歳) (都道府県) (市町村)

(歳) ~ (歳) (都道府県) (市町村)

所属のクラブ・サークル

体育会系・文化系・その他 ()

所属クラブ、サークル無し

ご両親の出身地

父(都道府県 市町村)

母 (都道府県 市町村)

ご協力ありがとうございました。貴重な資料といたします。

整理番号（*記入不要）

--	--	--	--	--	--	--	--

調査 D

調査のねらい：関西方言の卑語形式ヨルの表現性を，関係性待遇と感情性待遇という観点から分析する。

実施時期：2002 年

協力： 大阪府立大学・*帝塚山学院大学・*近畿大学の学生
*は鳥谷善史氏のご協力を得た。

対象： 大学生の男女：220 名に配付。

分析対象：158 名

男性：78 名

女性：80 名

注 1： 以下に掲載する調査用紙は，フォントや配置などが実際に使用したものとは異なる

注 2： 本論文の第 4 章は，本調査の一部を利用して執筆した。

ことばの使い分けについてのアンケート

日本語では、話し相手や話題にする人物、そのときの気分や、話す「場」の性質などの違いによってことばを使い分けます。また、その使い分けは方言によっても違うようです。

このアンケートでは、様々な場面でのあなたの言葉遣いをお尋ねします。次のページ以降の場面設定で、「正しい言葉遣い」ではなく、「あなたならどう言うか」についてお答えください。

企画 大阪府立大学総合科学部

日本語学研究室 2

講師 西尾純二

njunji@lc.cias.osakafu-u.ac.jp

まずは、ことばの使い手としてのあなた自身のことをお尋ねします。

性別 (男 ・ 女) 年齢 ()

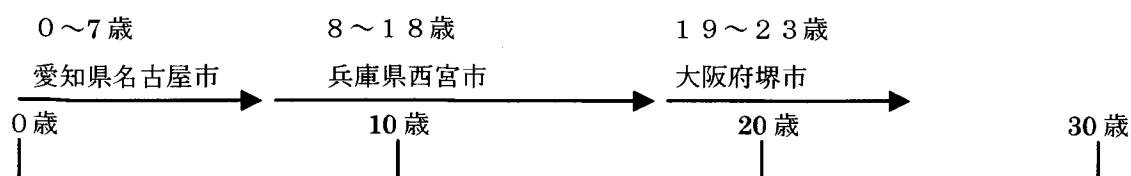
現在の住所 () 都・道・府・県 () 市・町・村

(字や番地は不要です。)

居住歴

<記入例>

- ・何歳～何歳までかを明記してください。
- ・住んでいた場所は都道府県名、市町村名までを記入してください。



<記入欄>



次にいろいろな場面でのあなた自身の言葉遣いについてお聞きします。
すべてカタカナで記入してください。

- ① a. 「〇〇（後輩）が図書館に行った」と親しい友人に言う場合、どのように言いますか。
 ※一年生の人には高校時代の後輩を想定する。

[]

- b. このとき、イキヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。
 <aでイキヨッタを回答した人も回答してください>

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- c. <bで2か3と答えた人のみ回答> 次の1～3のいずれかの番号に○をつけてください。

1. この場面でイキヨッタと言うときは、その後輩に対して悪い印象を持っている。
 2. 別に悪い印象がなくても、この場面で後輩にはイキヨッタということもある。
 3. その他 ()

- ② a. 「〇〇（先輩）は図書館に行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言いますか。
 ※4年生の人は現OB・OGが在学中の時の言い方を回答する。

[]

- b. このとき、イキヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。
 <aでイキヨッタを回答した人も回答してください>

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- c. <bで2か3と答えた人のみ回答> 次の1～3のいずれかの番号に○をつけてください。

1. イキヨッタと言うときは、その先輩に対して悪い印象を持っている。
 2. 別に悪い印象がなくてもイキヨッタということもある。
 3. その他 ()

- ③ a. 「〇〇（先生）は図書館に行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言いますか。

※面識のある大学の先生を想定してください。

[]

- b. このとき、イキヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。

＜aでイキヨッタを回答した人も回答してください＞

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- c. ＜bで2か3と答えた人のみ回答＞次の1～3のいずれかの番号に○をつけてください。

1. イキヨッタと言うときは、その先生に対して悪い印象を持っている。
2. 別に悪い印象がなくても先生にイキヨッタということもある。
3. その他 ()

④ ＜弟・妹がいる人のみ回答＞

- a. 「(弟・妹) 〇〇は図書館に行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言いますか。

[]

- b. このとき、イキヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。

＜aでイキヨッタを回答した人も回答してください＞

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- c. ＜bで2か3と答えた人のみ回答＞次の1～3のいずれかの番号に○をつけてください。

1. イキヨッタと言うときは、弟や妹に対して悪い印象を持っている。
2. 別に悪い印象がなくても弟や妹にイキヨッタということもある。
3. その他 ()

- ⑤ a. 「犬が公園のほうに行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言いますか。

[]

- b. このとき、イキヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。
<aでイキヨッタを回答した人も回答してください>
1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える
- c. <bで2か3と答えた人のみ回答> 次の1～3のいずれかの番号に○をつけてください。
1. イキヨッタと言うときは、その犬に対して悪い印象を持っている。
2. 別に悪い印象がなくても犬にイキヨッタということもある。
3. その他 ()
- ⑥ a. 「ゴキブリがあっちに行ったよ」と親しい友人に言う場合、どのように言いますか。
- []
- b. このとき、イキヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。
<aでイキヨッタを回答した人も回答してください>
1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える
- c. あなたはゴキブリがどれくらい嫌いですか。いずれかの番号に○をつけてください。
0. 嫌いではない 1. 少し嫌い 2. 嫌い 3. とても嫌い
- ⑦ a. 「さっき、あその犬を撫でようとしたら私の手を噛んだ。腹が立つなあ！」と親しい友人に言うとき、下線部をどのように言いますか。
- []
- b. このときあなたならどれくらい腹が立ちますか。次のいずれかに○をつけてください。
0. これくらいでは腹が立たない 1. 少し腹が立つ 2. 腹が立つ 3. とても腹が立つ
- c. このとき、カミヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。
<aでカミヨッタを回答した人も回答してください。>
1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- ⑧ a. 「あの先生、予告もせずに今日の講義を休講にした。せっかく来たのに腹が立つなあ！」と親しい友人に言うとき、どのように言いますか。※面識がある大学の先生を想定して下さい。

[]

- b. このときあなたならどれくらい腹が立ちますか。次のいずれかに○をつけてください。

0. これくらいでは腹が立たない 1. 少し腹が立つ 2. 腹が立つ 3. とても腹が立つ

- c. このとき、シヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。

< aでシヨッタを回答した人も回答してください。 >

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- ⑨ a. 朝刊のスポーツ欄を見ると、あなたがファンのプロ野球のチームが勝っています。このとき、「おっ、〇〇（ファンのチーム）勝った」と言うときどのように言いますか。

[]

- b. このとき、カチヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。

< aでカチヨッタを回答した人も回答してください。 >

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- ⑩ a. あなたがファンのプロ野球チームは、ここ10年ほど下位に低迷しているとします。あなたは半分あきれています。そのチームの試合をテレビ中継で見いてましたが、今日は勝ちました。このとき「おっ！今日は〇〇（あなたがファンのチーム）勝った」と言うときどのように言いますか。

[]

- b. このとき、カチヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。

< aでカチヨッタを回答した人も回答してください。 >

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- c. あなたがファンのチームはどこですか。

[]

- ⑪ a. 朝刊のスポーツ欄を見ると、あなたが嫌いなプロ野球のチームが勝っています。このとき、「ちえっ、〇〇（あなたが嫌いなチーム）勝った」と言うときどのように言いますか。

[]

- b. このとき、カチヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。

<aでカチヨッタを回答した人も回答してください。>

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- ⑫ a. あなたがファンのプロ野球チームの試合をテレビ中継で見えています。5回の裏で0－6で負けています。今日はダメだと思い、テレビを切りました。翌朝、朝刊を見ると、ファンのチームが逆転して8－6で勝っています。このとき驚いて、「あっ！ 〇〇（あなたがファンのチーム）勝った」と言うときどのように言いますか。

[]

- b. このとき、カチヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。

<aでカチヨッタを回答した人も回答してください。>

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- ⑬ a. 朝刊を見て「あっ！ うちの先生、研究ですごい賞をとった！」と驚いて言うとき、どのように言いますか。

[]

- b. このとき、トリヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。

<aでカチヨッタを回答した人も回答してください。>

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

- ⑭ a. 友人がファンだけど自分は好きでも嫌いでもないプロ野球チームが勝ったことを、その友人に伝えるときどのように言いますか。 ※ 対戦相手も自分に関心のないチーム

[]

b. このとき、カチヨッタと言えますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。

< aでカチヨッタを回答した人も回答してください。 >

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

⑮ a. あなたはプロ野球にどれぐらい関心がありますか。次のいずれかの番号に○をつけてください。

0. 関心はない 1. 少し関心がある 2. 関心がある 3. とても関心がある

⑯ a. あなたの目の前で、友人がペットボトルを道に捨てました。「何でそんなことをするんだ」と言うとき、「何でそんなことをしょんねん」と言えますか。

1. 言わない 2. 言えないこともない 3. 言える

以上です。ご協力ありがとうございました。

謝辞

実に多くの方々にご協力を賜り、そして温かく見守っていただいたおかげで、本論文を書き終えることができた。この場を借りてお礼を申し上げる。

まずは、調査にご協力くださった皆様にお礼申し上げます。若年層のアンケート調査と面接調査では、樫原英数学院の木村塾長のご協力を得た。また、実年層の調査の一部は、筆者の出身高校である奈良県立樫原高等学校のOB・OGの方々にご協力いただいた。卒業生名簿を頼りに電話をおかけし、同じ出身高校であるというだけで、まったく面識のなかった筆者の調査を快く引き受けてくださったことは、感激の至りであった。神戸YWCA学院においても、実年層の学生さんにご協力をいただいた。また、富山大学の中井精一氏には、ご本人にもインフォーマントになっていただいたうえ、天理大学付属天理参考館の学芸員の方々を紹介していただいた。大学生のアンケートでは、秋田大学の日高水穂氏、鹿児島大学の太田一郎氏、当時追手門学院大学に勤務しておられた野呂香代子氏、神戸松蔭女学院大学の村上敬一氏、東京都立大学の中川美和氏、一橋大学の庵功雄氏、大阪樟蔭女子大学の鳥谷善史氏にご協力をいただいた。さらに、ご回答いただいた全てのインフォーマント各位にも、心からの謝意を表したい。

なお、筆者に修練の場を与えてくださった変異理論研究会のメンバー、故宮治弘明氏、ダニエル・ロング氏、中井精一氏、松田謙次郎氏、沖裕子氏、金沢裕之氏、岸江信介氏、永田高志氏、村上敬一氏にもお礼申し上げたい。この研究会では、数回発表の機会を得たが、そこでいただいたご指摘や研究についての語らいは、常に筆者の研究意欲を駆り立てるものであった。また、研究室で議論を交わし、教えを請うた先輩である日高水穂氏、姜錫祐氏、そしてかけがえのない学友である、余健氏、朝日祥之氏、李吉鎔氏、松丸真大氏、阿部貴人氏。ほか名前をあげることが叶わない諸学兄にも御礼申し上げます。

本研究をはじめのきっかけは、卒業論文で要求表現を題材にしたことが端緒であった。テーマとしてとりあげた命令・要求表現の使い分けが、対人関係という要因だけでは説明がつかないことから、様々な試行錯誤を経て本研究にたどり着いた。学部生時代をすごした三重大大学でご指導をいただき、卒業後も温かく見守ってくださった愛知学院大学の鏡味明克先生、指導教官であった甲南大学の中畠孝幸先生にお礼申し上げます。また、大学院で本格的に研究に没頭することになったが、ここでも筆者は至高ともいえる指導者に恵まれた。そのご指導と恩義に、本研究がお応えしているか甚だ不安ではあるが、せめて御礼を申し上げたい。

渋谷勝己先生は、筆者が博士前期課程 2 年の折に大阪大学にご着任なさった。修士論文の提出を目前にしている筆者を叱咤激励いただき、常に研究の高みをお示しくくださった。理路整然としたアドバイスは、筆者の研究の指針となった。厚くお礼申し上げます次第であ

る。

そして、大学院在学中の指導教官であり、今もなお研究の相談にのっていただいているのは真田信治先生である。研究室が自由な雰囲気であるようにいつも心をお配りいただき、未開拓な分野の私の研究を、我慢強くご指導いただいた。時には厳しく、また意気消沈しているときは研究を続ける勇気を与えてくださったのも真田先生である。また、研究者として、あるいは一学生として筆者を見てくださり、絶妙のタイミングと決して一線を越えない御教示に救われたことは数知れない。筆舌に尽くしがたい感謝の意を表したい。

蛇足ながら、私生活を支えて研究の場に身をおくことを叶えてくれた家族に感謝したい。家庭の経済的安定を支え続けた父は、筆者が博士前期課程 1 年生の折に、病魔に犯され退職を余儀なくされた。母は気丈に窮地の家庭を支えた。しかし、そのなかで、職に就かず学業を続ける筆者をさぞ不安に思っていたことであろう。

最後に、いつも筆者の研究に耳を傾け、もっとも近い場所から力強い応援を送り、筆者を精神的に支えた妻玲見と、本論文の完成の喜びを分かち合いたい。